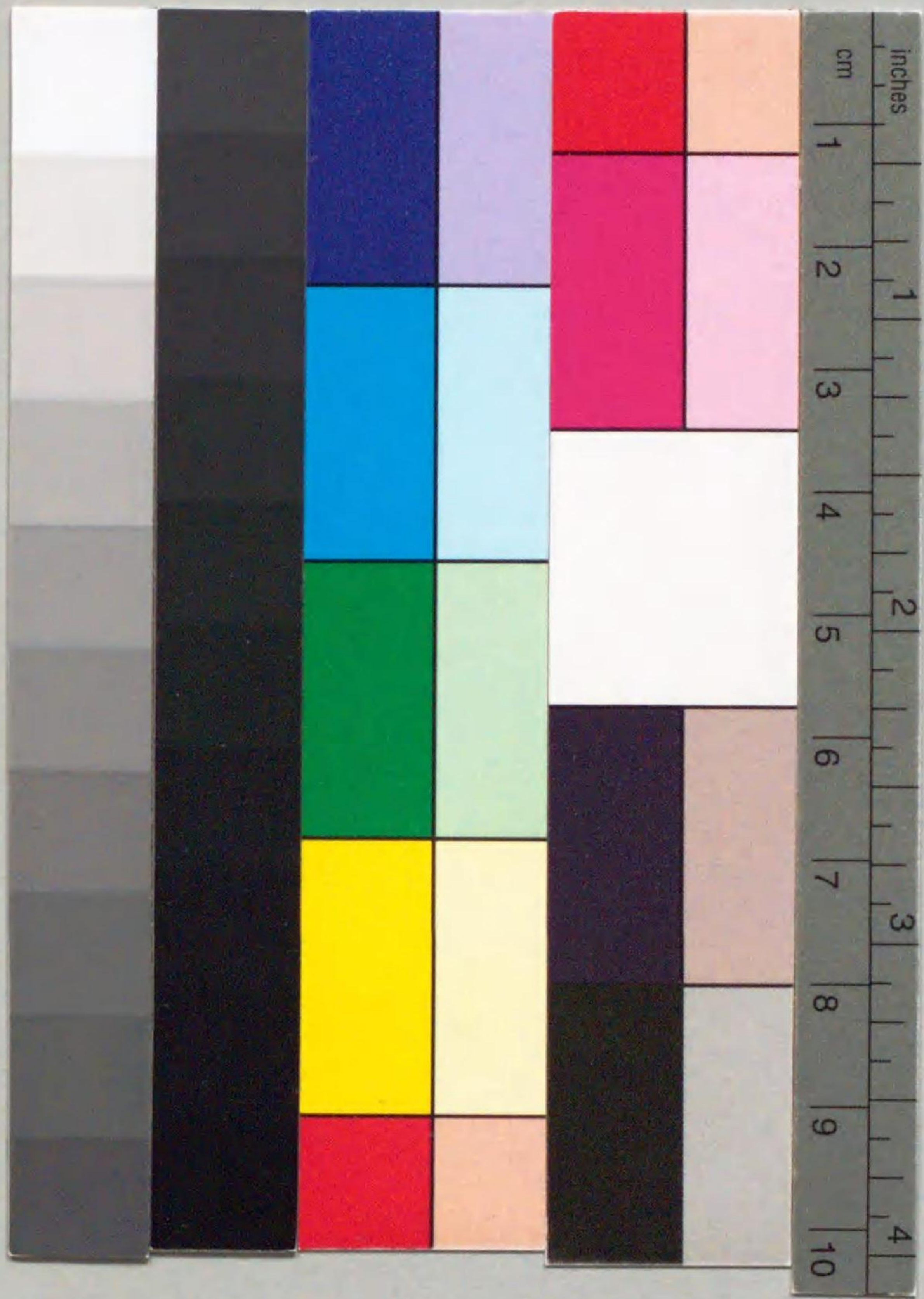


081
Y978
T



00974979





彦根田舎源氏

下

彦根田舎源氏

下



081
Y978
TII
(111)



數量更正
3928

974979

修紫田舎源氏 下 目錄

二十一編上	一
同 下	九
二十二編上	三
同 下	四
二十三編上	六
同 下	八
二十四編上	一〇
同 下	一七
二十五編上	二五
同 下	三一
二十六編上	三九
同 下	四五
二十七編上	五三
同 下	六一

目錄

二十八編上	六一
同 下	六八
二十九編上	七六
同 下	八三
三十編上	九一
同 下	九八
三十一編上	一〇六
同 下	一一三
三十二編上	一二一
同 下	一二八
三十三編上	一三五
同 下	一四二
三十四編上	一五〇
同 下	一五七
三十五編上	一六五
同 下	一七二
三十六編上	一八〇
同 下	一八七

目錄

同	下	五四六
三十七編上	五六四
同	下	五八四
三十八編上	六〇〇
同	下	六二一

上編一九





油町 雀屋板

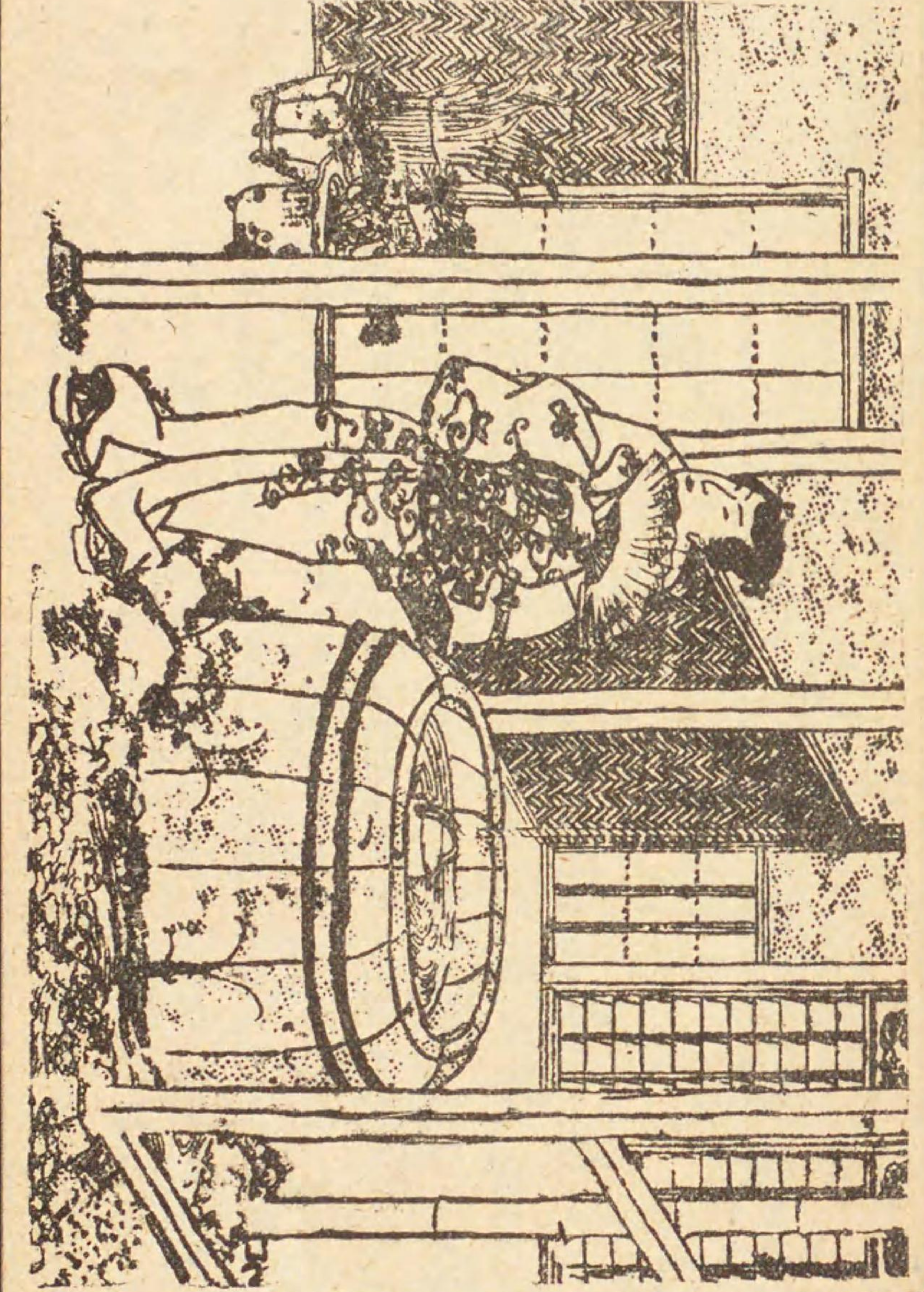
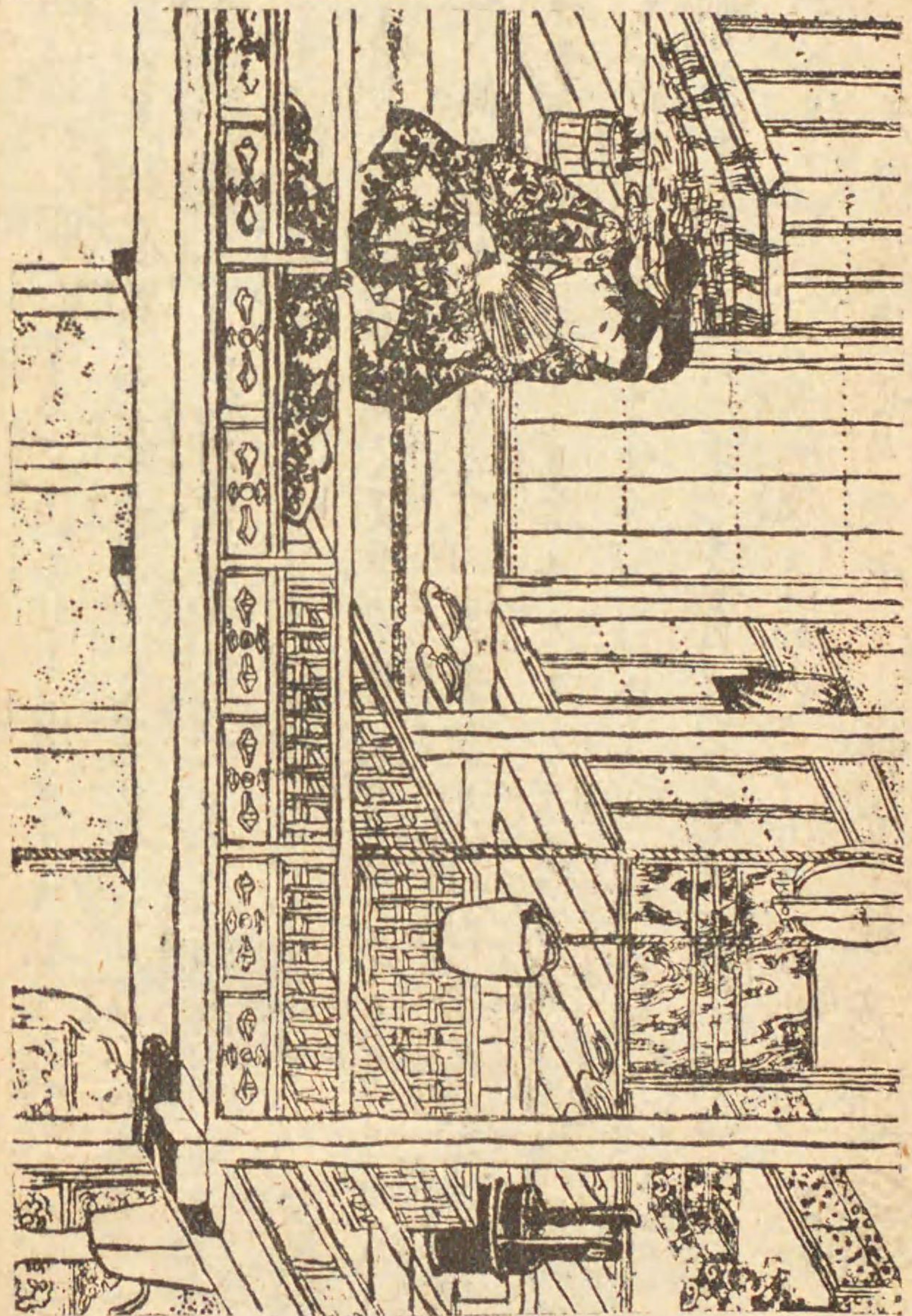
種彦作 貞画 光一編上冊

願ひの如く明石まき立消のせも續きしも板元が油町でござり
 ますと夫利屈あつた茶番ゆきとささぬれは次ふ店よ何と合せり
 女清玄其祭りの錦繪せや一並に是も尼の釣舟とござり
 ます。悔士の轉りも申すもあちやッびいの事とござりませう。
 清玄尼乃繪をとりて見せ。源氏の假字冊子でござり申すく
 ひと假名と目ふり申す。盛衰記先陣問答の繪せや。獨
 深覺の床もこのり。是も千ちとござり申す。梅もふり申す
 どもと申す。このり申す。このり申す。このり申す。このり申す。
 繪合申す。このり申す。このり申す。このり申す。このり申す。
 あ、おもと又腰元とさか煙よりかきかりよ。説出せり。

天保丙申正月良辰

柳亭種彦述





修紫田舎源氏

二十一編上

柳亭種彦著

081.6
Y

一垣の卯の花咲く頃より、御庭の萩の移ろふまで、お文の取遣ばかり遊ばし、脇から見ると
 もどかしい。何所も秋は寂しけれど、此所はとりわけ濱風の、都に變りて御身に染み、光氏君
 も御獨寐を、侘しう思召すかして、入道様をお話相手に、折々御側へ招かせられ、事に擬へて
 あなたを彼方へ、進らせよとは宣へど、此方へ渡り給はん事をば、あるまじう思召し、あなた
 は又むくつけない、田舎人かなんぞの様に、初から打解けて軽らかに語らふ業は、せぬものぢや
 とて思ひたち、此方から御出の氣色はなし、いつがいつまで睨めくら、心くらべを遊ばして、
 御出なさるが私にはとんと合點が参りませぬ。立浪はじめむづかしい、顔する者は御側に居
 ず、さア此際にお心の、底を聞かせて下さりませ」ト千鳥に言はれ朝霧は、襟に埋みし顔を
 上へ、「妾を不便と思召し、よしある人に添はせんと、所詮及ばぬ親達の、願ひながらも引籠り、

人に見えず年月を、過さばもしや良縁の、ありもせんかとまだ夫をかひなき頼とし給はんが、
 人数ならぬ此身の為、なかく馴れて程もなく、捨果てられなば物思を、妾が添へるのみならず、
 今にもまさりて父上の、猶御心を盡さんかと、思へば露も我君の、御側へ寄り心はなし。年
 頃音に聞傳へ、さういふ御方の御有様、いつぞは見上げ申したいと、口に言はねど心には、と
 うから思うて居たりしを、思ひがけなく去年より、須磨の浦邊の御住居、其方が勤めに姿を變
 へ、人目を包めば御顔と顔、たしかに向合はさねど、仄にも見奉り、世に類なき御上手と、人ご
 とにいふ御琴の、音も松風に連れて聞き、ましてや今は此浦へ、迎取り参らせられ、且暮の御
 有様、斯うであとと皆の者が、話は御側に居るのも同前、彼方にも妾が事、知召されて戯に
 も、尋ね給ふは有難き、事と想うて此浦に、おいでの中はたどお文で、聞え交すが此世の思出、
 濱邊の蟹に立交り、朽ちぬる身には餘る嬉しさ、能う思うても見たが宜い」ト振向く此方に母
 眞柴。朝霧いよく羞かしう、千鳥もはつと驚いて、立つも立たれず手をもじく。眞柴はに
 つこり打笑ひ、「入道殿は年頃の、祈の驗顯れて、今こそ願叶ひしと、喜んで居らるれど、朝
 霧が今言ふ通り、迂濶に逢はせまるらせて、田舎育と見下され、物の数ともし給はぬ、其時は
 又どの様な、歎をせんと末々の、事を思へばいみじくしく、世には光ると聞ゆれど、私の胸は

曇る君、辛う切ない目を見てから、後悔してもかへらぬ事、目にも見えぬ神佛を、頼になされ
 る宗入殿、光氏君のお心をも、娘が運はこれ程で、あらうといふも分別なく、良聲取りしと思
 はるよが、いかにしても笑止なゆゑ、打返し、御意見申して、彼方へあぐる事をば延べて
 置くものの、若し忍んでやおはさんかと、さまざま思ひ亂れて居る、妾が心は白浪に、千鳥が
 兎角轉りて、過つる卯月お文の返事を、初めて娘に書かせたも、屏風の陰で聞いて居た。此後
 屹度たしなめ」ト眞柴はそれかれ心をつけ、兎角思ひ煩ふを、聞入れずして宗入は、召使ふ男
 女にだに、深く包みて我心、ひとつに何か思案を定め、忍びやかに陰陽師を、招きて吉日を占
 はせ、心祝ひの事あれば、密に是へ招く人、ありとて娘に物好せし、袷帷子打著せつ、常より
 髪も艶好くあけさせ、名の木を撰びし懸香は、邊に薫じてさながら立居も、輝くばかりに粧は
 せ、腰元千鳥を膝元近く、呼寄せて何やらん、打さよやいて表へ走らせ、妻眞柴にも「密々に、
 我語ふ事のある間、此方へ來よ」ト宗入が、居間へ誘ひ其座には、若き腰元女のみ、残して皆
 皆退きて、既に其日も暮れければ、朝霧も大方は、推して胸の轟くなるべし。
 その日は八月十三日、月華やかにさし出でたるを、光氏は只ひとり、打眺めて居る處へ、「御免
 遊ばせ我君」ト、手燭かよけて入來るを、誰そやと見れば千鳥なり。「幾夜寢覺を訪ふか、いと珍

らしき聲ぞする。此頃はたど岸を打つ、浪の音のみ耳につき、いとうるさきに入道が、年頃教へ置いたり、物語りしかの物の音を聞かばやさらずは此浦の、寂しさは堪へ難しと、ほのめかしても答は無し」ト少し曲りて宣へば、につこり笑うて手をつかへ、「主の申上げまする、岡邊の家は打晴れて、今宵は風情も侍らん、只あたら夜のと聞えあけ、御供致せと御駕籠の、用意もされしが構の内、殊には路も狭ければ、御馬の方が宜からうと、私一人が御口取、いざ是に召しませ」ト庭下駄直せば光氏も、片頬に笑みて打點き、「古くは駒の爪と呼び、今駒下駄といふ木履を、馬に乗れとは心憎し。又入道も、

あたら夜の月と花とおなじくは心知られん人に見せばや
 その古歌の五文字のみ、言致しとも物好なり。まだ有明の程なれば、ゆるく行かん」ト薄物の、羽織を取つて引つくりひ、さまざま積る物語に、夜ふかして出で給ふ。かの岡邊の家は、今まで住みし座敷よりは引離れ、同じ構の内ながら、やと遠く入る所なり。路の程も四方の浦浦、手に取るばかりに見渡され、思ふどち、いざ見にゆかん玉津島、入江の底に沈むと詠みし、歌さへ心に浮ぶなる、月の影にもまづ戀しき、人の事を思ひいで、この庭下駄の駒ならば、直に都へ引返し、赴きぬべく思ひつよ、

時の間に駈けれ月毛の駒の爪

と打囁き給ふ中に、何地行きけん千鳥は見えず、訝しながら光氏一人、岡邊の宿に近づきて、こらの景色を眺むれば、造れる様のいと木深く、海の面にかめしく、造りなして打晴れたる、高殿なんどの面白く、又は萱もて葺渡し、賤が家めきて心細く、住みたる様の方もあり。此所に居ては世の憂さも、自から忘れんと、思遣られて物哀れに、ぞみ給ふに入道の、かの行を勤むるなる、三昧堂の近ければ、鉦の聲松の風に、響合ひて物悲しう、岩に生ひたる松の根ざしも、心ばへある様なりけり。此所彼所の有様など、御覽じながら猶近く、分入り給へばいろいろの、草の花ども庭の面に、踏所なく咲満ちて、蟲の聲を盡したり。かの娘を住ませたる方は、殊に磨き立て、周圍の竹垣結廻し、たゞ一筋の細道なる、横の戸口を打開きて、おきなば渡らせ給へといふ、心の見えてはすはなり。然ばとて閉寄せて、おくのも心なしとてか、月影細くさしいる程、けしきばかり押開けたり。光氏縁に打憩ひ、障子の内に朝霧の、居るを推してほとほと扇を鳴し、「ふみ見るもいと危きと知りながら、仲立つ人を藤葛、縋りて渡る言葉の懸橋、峯の木魅の一聲は、答へ給へ」ト宣へど、豫てよりして朝霧は、見えじものと心に深う、思ひ居たりし事なれば、此所へ忍びておはせしが、なかくに歎かしう、「花も香もなき磯馴松、

誰か眺めん懸橋は、吉野龍田の景色ある、所へ渡し給へよ」ト、言捨て奥へ入らんとせしが、あまりにつれ無き女やと、笑はれんやと思ひけん、又光氏が有様を、ほの見まほしく思ひてや、次の一間に隠ろひて、此方を窺ひ居たりけり。

光氏は吐息を吐き、都にときめく人の娘に、優りて彼が心強さ、斯くまで窺れし某が、身を悔りし故なるか、とありて此儘歸りなば、心くらべに負けたりと、漏聞く人の譏らんかと、さまざまに思ひ悩み、心に案じ口に嘯き、亂れ恨み給ふ様、物の心を辨へし、人にこそ見せまほし。其時に琴の音の、さらりと響くに思はずも、ふつと見かへり給ひければ、近き屏風に脱かけし、振袖の風にあふり、おのづから弾鳴されたる、音と思しく人はなし。袴の邊に爪袋、柱袋、なんと打散りて、今までけはひしどけなく、打解けながら此琴を、搔まさぐりける姿見えて、いとをかしさに朝霧が、隠れし方に打向ひ、「娘の調ふる手遣は、我に優りしなるとて、入道の話にのみ、聞馴したる琴をさへ、惜み給ふは恨めし」ト、猶さまぐくに宣ひて、

世の夢も半は覺めん引板の音

我に弾きて聞かせよを、心に籠めて物越に、言ひかけ給へば彼方にて、

心惑ひいづれを引かん引板の繩

とばかり仄に答へたり。光氏つらく案ずるに、阿古木は流の女なり、是は田舎の娘なり、さりながらふたりとも、素性の卑からざるを、心に思ひてうちあがりし、けはひはいと能く似通ひたりと、小首を傾け言葉なし。既に前にも記し如く、朝霧はこの座敷に、何心無く打解けて、遊び居たりし其折に、忍び渡らせ給ひしを、早くも知りて近かりける、障子の内に隠れしが、尻差や堅めけん、觸れど開かず強くせば、開くべきを光氏は、人の心を破らじと、思へば強て押開かず。されど歸らん風情もなく、此程よりの心盡しを、淺からず哀れに歎ち、又は一廉ある言葉に、實を現はし給ひければ、御姿のみかは御志も、近勝りするなるべし。若き身にさへ寢覺して、常には長く覺えたる、秋の夜ながら今宵のみ、早く明けぬる心地して、人に見られじ知られじと、思へば心あわたしう、細やかた語ひおき、光氏は立歸り、心の鬼に恥かしく、今までよりも忍びやかに、今朝まづ文を送りけり。さて入道は朝霧の、腰元女に語ひ置き、昨夜よりの事どもを、備に聞いて多年の願、今こそは叶ひしと、喜びながら流離の、御身にてまませば、此事を世に洩さじと、深く包みて御文の、使に來りし侍を、ことごとしくも饜應さず、かへし遣りしを宗入は、胸苦しくぞ覺えける。斯くて後は忍びつと、ときく通はせ給ひしが、ある夕暮に朝霧の、文もて例の腰元千鳥、光

氏が常に住む、座敷を窺ひぞむを、此方は夫と早くも見とめ、「幸ひ邊に人もなし、是へ來れ」と近く呼寄せ、「過つる卯月主より、衣更の衣服とて、我に贈りし衣の袂に、縫付置いたる一通に、密書と書きしは其方の手蹟、何事なるかと密に見れば、宗全よりして忍の使、今に絶えぬは心得がたし、此上ともに宗入が、兄に合體なさざるため、祕藏の娘朝霧と、語ひ給へと記してあり、夫故にこそ斯くまでに、心を盡し親子の體を、つくぐと窺ふに、都よりして音信の、ありし様子は更になし、忍の使はいかなる姿に、窺して此所へ來りし」と、問はせ給へば千鳥は摺寄り、「ひとつ構の内ながら、此所から朝霧様の、お住み遊ばすあの岡邊の、お家までは程も少し、離れてあれば毎夜々々、御通ひなさると自から、人も見咎めその中には、物言さがないき蟹の子も、立交りてかうであよと、囀り散す事もあらうと、あなたは夫を思し憚り、しけしけ通ひ給はぬを、さればこそその初に、返すぐも言ひたる通り、田舎育のこの朝霧、御氣に入らう筈はない、はやもう飽かれて絶々に、なりしとくよく姫君の、御歎を入道様も、聞召されて實にさういふ、事もあるかとかの極樂の、願をば打忘れ、阿彌陀如來の來迎より、君の御入を待ち給ふ。望叶ひて今更に、心を腦し給ふのが、いとほしう侍べる」と、さらさらと言述ぶれば、光氏は眉に皺寄せ、「わが問ふ事は答へもせず、何をか言ふ」と咎むるを、千鳥

は打消しにつこり笑ひ、「いえ、是から申上げぬと譯が分らぬ、宗入様が是程君を慕はせられ、どうぞ娘を上げたいと、思召すお心の、實を女の淺はかな、心ながらも感入り、宗全より忍の使、今に絶えずと密書に認め、御目に懸けしは君を岡邊へ、釣出す爲の皆いつはり。宗入様のおつしやるは、腹は變れど種はひとつ、端折屈の兄ながら、天命知らずの不所存者と、宗全とははや音信不通、御心置なくいつまでも、此所に渡らせ給ふべし、山名を欺る我君を、又欺りしは我ながら、天晴智恵者」と蟹の子に、劣らず千鳥も囀り散し、持來し文の返事も乞はず、逃行く影を光氏は、見送りて笑を含み、「口のさがなき女郎花、我落ちにきと語らねば、宜いが」ト机に打凭れ、彼が携へ來りし文を、手に取上げしがその紙の、紫なるに不圖嵯峨に、残し置いたる紫の、事を思ひて吐息をつき、風の傳にも此頃の、事ども彼が洩聞きなば、戲にもせよまづ聲に、ならせ給ふを斯うくと、告知らせもせず包みしは、心に隔ありけるよと、恨みんかとして心苦しく、案じ給ふも取分けて、睦しかりし故なるべし。前にもたびく記すが如く、この嵯峨の内君は、類稀なる利發にて、情深く心優しく、假にも人と争はず、かくまで柔和の生ながら、かゝる方の事のみは、早く目をとめ氣にとめて、光氏都にありし頃、夜ありきしけくなる時は、恨み嘆ちて引止め、曲り給ひし事なんどの、なき

にあらねば其事の、胸に浮みてまづ此よし、彼が許へ言遣らんと、いつもよりも細やかに、書いたる文のその奥に、

實や都に在りし時、心の外のすさび事に、紛れ出でしをあだくしき、心なりとて疎まれし、その折々を今思ひ出づるも、胸の苦しきに、この浦にても又怪しう、はかなき夢を見侍りしが、人の物言さがなきも、磯打つ浪の聲に紛れ、都へ聞えん由はなけれど、我より斯くと問はず語りに、告ぐるに隔なき心を、思ひ合せ給ふべし、誓ひし事を、
など書きて、

かりそめのみるめは蟹のすさびかな

「この文を嵯峨の住居へ、片時も早く持行くべし」と侍にいひつけて、直に立たせ給ひければ、夜を日について道を急ぎ、四日ばかり過ぎて後、紫の上の返を、かの使は持て歸りぬ。取上げて見給ふに、何心なく美しげに、書いたる文のそのはてに、

思ひがけなき御夢語、夫にて思ひ合せらるゝ、事の多かる其中に、

はつしほや松より浪の越えんとは

知らずうらなく契りしこそ、いと愚に侍れ。

など、かどくしくは聞えねど、心の中に恨めしと、思ふを掠めて書きしかば、いと哀れさの身に染みて、打措き難く見給ひつゝ、此頃使を立たせしより、返を待侘びその文を見て猶更にこの如く、嵯峨の事のみ思遣り、久しく岡部の家を訪はず、忍の旅寐もし給はねば、朝霧は初より、思ふに違はずかれぐに、なり行き給ふと胸塞り、年老い給ひて行末の、短き親のみ頼として、今まで年月暮しよも、いと便なく思ひしが、身にもふさはぬ位ある、人と契りて程もなく、捨果てられなば兩親を、力となしよ時よりも、まさりて悲しき目や見んと、心を悩し今ぞ實に、海に身を投げつべき、心地しながら邂逅に、忍び給ひし折々は、恨めし氣なる氣振も見せず、なだらかに待遇して、憎からぬ様に見えしかば、月日のたつに隨ひて、光氏もいとあはれと、思はぬにしもあらざれど、嵯峨野に生ひし葦草、ゆかりの人にはあづけしが、覺束なくて年月を、過ぐるに兎に角心に懸り、明石を末の松山に、言ひなぞらへて送りしを、思ひ出づるに心苦しく、獨寢勝に打過ぎて、繪をさまざまに描き集め、文の代に都へ送り、返事を聞くべしと、思ふ事ども其上に、さまざまに書付け給へり。

實に嵯峨の内君とは、離れておはせど御心は、自然と通ふとおほしくて、嵯峨の君も物哀れに、慰む方なくおほえ給ひ、おなじ様に此頃より、繪をかきあつめ給ひつゝ、やがて我身の有様を、

日記の様に書き給へり。いかなる事をか記されし、御側に侍る女にさへ、深く包み給ひしかば、それ知る者は無しとなん。

二十一編 下

年かはりぬ。都にては義尙公、御目を煩ひ給ふ上に、御心地例ならざりければ、世の中いよいよ騒がしく、さまざまに言罵るよし、此浦へも聞えけるにぞ、光氏も一方ならず、心を痛め給ひけるが、ある日表の方よりして、あわたどし氣に走り來るを、誰そやと見れば惟吉なり。何事なるかと問ひ給ふも、待たず後に指示して、「思ひがけなく遊佐の國助、罷下られ早是へ」ト聞いて光氏胸轟き、「近うく」ト招き給ふ、御かほばせを見るよりも、國助涙に搔暮れて、言葉もなければ急立ち給ひ、「まづ問ふべきは義尙公、御藥の事ありと、此浦にてもとりく風聞、御所勞の御容體、いかにく」ト光氏の、言葉にやうく國助は、涙拂ひて面を上げ、「久しぶりにて拜顔の、喜ばしさに取交せて、嵯峨にまします内君の、常々歎かせ給ふ御事、胸に浮みて思はぬ落涙、義尙公の御所勞の、重らせ給ふ注進かと、思召し違へられ、暫しが程も御心を、痛めし段なわが落度。日毎々々に室町へ、出仕致して御有様を、見上ぐる度に御肥立、御全快にも近ければ、まづ御心安かるべし」ト聞けども光氏安堵せず、「汝が此度下りしは、なみく

ならぬ大事ならん、はや語れ〜」ト、せりたて給へば國助は、なほ近々と御側へ摺寄り、「申上ぐるに及ばねど、今室町の内君たる、立田の前は一色郡領、持廉が娘にて、御顔貌も嬋妍にて、殊に伶俐ましませば、御なからひも睦しう、見えさせ給へど年を重ね、御懐胎の様子もななく、是のみ諸人歎きし處、去年の春よりその御氣色、諸神諸佛へ御祈念の、驗顯れ安々と、玉の様な男御子、生れ出でさせ給ひければ、御所は更なり京洛外、上下の喜び大方ならず、然るに唯今申し如く、義尚公の御惱、させる事とは見えざれど、御みづからは御本復、あるまじう思しけん、今年睦月のするつかた、某を招かせられ、たま〜男子は擧げながら、まだ二ツにていとけなし、春若丸に世を譲り、我は樂く暮さんと、おもへど彼もまだ幼し、後見なして政事を、執行ふべき其人を、さま〜思ひ廻らすに、光氏ならで外に無し、弟ながら仁義の道を、守りて我にも優りし孝子、それを浦曲に沈め置くは、いと有るまじき事なれば、終には母上富徴の前の、仰も背きて父君に只管願ひ、たとへばいかなる罪ありとて、光氏を赦されぬべきに定めつ、汝密に彼所へ下り、此事告げよと密の仰。音川山名の合戦も、勝元既に勝利あらはれ、はや宗全は味方の者、残すくなに討なされ、散々になり落行けば、君此所に御座あつて、西國押への御用心にも、及ぶまじく候間、御歸洛あつて然るべし」ト、事細やかに

述べければ、光氏頭を打傾け、「世に有難き兄君の、御志にはありながら、宗全敗北したりと雖も、未だ存命にてある中は、我此所は退き難し。御身都へ直様歸り、室町御所へ罷出で、光氏多く犯したる、罪を赦され給ひし事、忝なしともなかく、に、申上ぐべき言葉も覺えず、程を計りて罷上り、御目見仕らんと、言上なして置くべきなり。波路隔てて住みこそすれ、京地の様子は間者より、日毎の告にて詳しく知れり。宗全の首勝元の、手に握つたる其折は、迎なくとも立歸らん」ト欣然として紫とも、嵯峨の館はいかにぞとも、問ひ給はねば此方より、申出づべきしほもなく、「さあらば早く船出を急がん、頓て目出度御歸洛待ち奉る。某も去年よりりして病に侵され、出仕も心の儘ならず、依りて近々願を立て、本國相摸へ引籠る、心懸に候へば、もしやこれが今生の、御名残も計り難し。御機嫌能う」トす〜と、立行く裳裾を光氏は、走り寄つてむづと引止め、「天眼通は得ざれども、我人の五音を聞いて、察する處おほよそ違はず。汝はじめ我を見て、涙にかきくれ言葉を出さず、別に望んで言ふ處も、甚だ以て心得がたし。必死の覺悟極めしは、いかなる事か包まず言へ、道理に當らば止めはせぬ」ト見透す言葉にはつと平伏し、「恐入つたる御眼力。室町御所の仰の趣、傳へまらせ其座にて、切腹なさんと此の如く、書置は認めたれど、御前を穢すを恐れ、立去る趣意をあら〜申さば、

三年以前須磨の浦へ、君御下りの其時に、稲舟姫への御貢の、事ども仰置かれし處、宗全勢
 烈しき頃は、糺河原を取切られ、往來自由ならざる間、御いたはしや姫君は、此程までも御不
 自由がち、嵯峨の御館の内君は、實はゆかりの者なる故、御不足なく何事も、計ひながら義勝
 公の、御愛子をば等閑に、捨置いたりと沙汰あらば、申し解くべき言葉なし。此上の御慈悲に
 は、御免蒙り此座を去らず」ト言ひさま既に指添に、手を打懸けて腹切らんす、覺悟の體に見
 えければ、押しめて光氏は、わざと少し聲を荒らけ、「嵯峨野糺の館を始め、わがゆかりある所へ
 は、敵を間近く寄せさせじと、皆それづくに手配を、いひつけ置きしが思ひの外、敵兵多く諸
 所より起り、防ぎ難くて糺の道を、取切られしは豫ての備、行届かざる故なれば、汝には過失
 なく、我に却つて落度あり、切腹なさば狂人と、笑はれんは必定せり。はや疾く歸りて光氏も、
 頓て歸洛と嵯峨の館の、塵を拂はせ置くべきなり。打連立ちて歸るのを、今日か明日かと待ち
 わぶる、處へ汝は腹切つて、我も戻らぬ知らせを聞かば、いかに歎かんそれかれを、思ひ廻ら
 し自殺を止り、此方の無事を傳へよ」ト、今に始めぬ寛仁大度の、仰に國助額を疊に、摺付け
 摺付け、詞もなか／＼涙にくれて、取急ぎ御前を退き、折しも追手の風を幸ひ船出して、立歸
 りけりとなん。

左右する間に春過ぎて、夢の間に夏もたちぬ。義尚公の御目の惱、此頃重くならせ給ひて、物
 心細く思されければ、東山に聞上げ、七月廿餘日の程に、又重ねて光氏君、京へ歸り給ふべき、
 御書須磨へ下り著きぬ。義政公の自ら筆を、染めさせ給ひしなりければ、とりわけ謹み拜見し、
 巻收めて頭を垂れ、「定なき世を見るにつけ、我身はいかに成果てんと、心の中に思ひしを、斯
 く俄なる父君の、許を請けて嬉しきに、つけても既に二年近く、住馴れし又此浦を、離れん事
 の名残惜しや」ト獨語ちつとそれよりして、兎角に心浮立たず、思し歎くに入道も、さあらん
 事とは兼てより、思ひ設けし事ながら、斯くと聞くより胸塞がり、いと悲しくは覺ゆれど、我
 君都へ歸らせられ、いよくときめき給ひなば、娘も彼方へ呼迎へ給うて、内君同様に、傳あ
 たま附けられん。其時こそは我願、叶はめなんど己が心を、己が心に慰めて、思ひ直して居た
 りけり。

光氏もはや別れんに程無き故にや、此頃は人目も包まず夜毎々々、わりなく語ひ給ひけり。然る
 に過ぎつる水無月の、はじめよりして朝霧は、何となう打惱み、引籠りて居たりしが、秋風の
 立ちてより、やう／＼心地も常に復り、病の床は離れけれど、氣むづかしくて酸き物を、好む
 有様たどならず、その氣色いちじるければ、光氏いよく胸を痛め、別の近づく折も折、生憎

なる事かなと、今までよりの猶不便に、思ひなしつとつくくと、我身の上を顧るに、幼うして母上に、別れし此方さまの、艱苦の果は見も知らぬ、かよる浦邊にさまよひて、漸く都の合戦をさまり、父君の御心も、解けて都へ歸るべき、時に臨みて撫子の、種蒔きながらその花の、咲出づるをも詠めずして、船出すとは怪しきまで、物思ふべき身なるかな。都を離るる其折も、思ひの外なる悲しき道に、出立つ事とは思ひしかど、世も静りなば行廻り、遂には歸來らんと、思ひ慰む方もあり。夫に引換へ此度は、嬉しき方の出立ながら、又此浦を立歸り、見るべき時のあるべしとも、思ひがけねば故郷を、振捨つるより猶悲しと、さまざま思ひ亂れ給ふ。朝霧は更にもいはず、思ひ沈みて物だに言はず。夫に引換へ光氏に、附従ふ者どもは、大方ならず打喜び、京よりも御迎の、人々次第に参りつと、心地よけなる有様を、見もやらずして主の入道、涙にくれて月もたちぬ。

秋もなかばとなりければ、あはれなる空の景色を、見るにつけても光氏は、それかれの事思遣り、あよいかなれば心から、なしといふにもあらざれど、今も昔も心を痛め、身を悩ます事いと多きは、前世の罪の報なるか。せめては帶の祝まで、此所にも思へど都より、御使のなほ繁ければ、夫も心の儘ならずと、涙勝にて居給ふを、人々怪しう思ふめり。月頃はつゆ人に、氣

色を見せず時々に、紛れて語り給ひければ、朝霧はつれなきやうに、思ひ居りしに此程は、繁渡らせ給ふに依り、御志の深きも顯れ、殊更わりなく語ふは、別れし後に物思を、いよく添へる種なるべし。

かくて出立ち給ふ日も、ますく近づき、明後日ばかりになりぬる其日は、暮るゝを待ち、かの岡の家へ渡り給へり。常にはいたう夜を更し、此方も忍んで通ひ給ひ、彼方はとりわけ人目を恥ぢ、閨の燈火灰にして、いつも夜明けぬ其中に、立別れ給ふに依り、まださやかに朝霧の、容姿など見給はざりしが、此夜は宵の程なれば、點しつれたる銀燭の、火影は晝より明かにて、隠れん限なく差對ふを、つくくと打まもるに、高貴人の妻といふとも、はづかしからず氣高くして、目覺しき姿なれば、見捨てて行かんも口惜しく、殊には胤をも宿したれば、押つけ支度を調べて、都へ迎へん心となり、詞にも左様にぞ、語り慰め給ひける。光氏の有様は、度々前にも記したれば、今ははた更にもいはず、年頃の物思に、甚く面瘦せ給ひしも、なほ美しく見なさるとは、人柄に依るにやあらん。心苦しき氣色にて、涙ぐみつといと哀れに、うらなく契り給へるは、たとへ此儘捨果てられ、再び便のあらずとも、今まで情を受けたるこそ、女と生れし詮あれと、側目にまもる腰元は、密に言ふもあるべけれど、朝霧の心には、情の深き

姿のめでたき、夫につけ是につけ、世の中はれて我夫と、呼交されぬ身の程を、思ふに盡きせぬ悲しさを、なほ添へよとや波の聲、秋の風には殊に響き、鹽焼く煙かすかに立ち、見る物聞く物哀れさを、取集めたる所の様なり。

靡かなん鹽焼くけぶりわかるとも

ト光氏書きて見せければ、朝霧は吐息と共に、

かきつめて拾ふかひなきうらみ哉

ト言ふも哀れに打泣きて、詞すくなにありながら、光氏殊に心を籠め、語ひ給ふ節々の、答なんどは淺からず、聞ゆるも猶悲しければ、紛らさんとて光氏が、京より持ちて下りし琴を、急ぎ取りに遣して、珍らしき手をいとほのかに、搔鳴し給へるに、深き夜も澄み、音色もすみ、譬へて言はん方もなく、腰元どもも感にたへ、いよく座敷の静りて、物言ふ者もあらざれば、件の琴を朝霧が、膝の邊へ押遣り給ひ、「御身は父に習ひながら、却つて其師知義に、手づかひの似たりと聞き、常に床しく思ひしかど、今日まで更に聞かせぬぞ、返すくも恨なる。さらば形見に一言なりと、聞かせ給へ」ト勧められ、朝霧いとど悲しさに、止めかねたる涙は落ちて、うみと呼ぶ名の琴にもあれば、夫につけても思遣る、又の逢瀬は長磯に、此身はひとり捨てら

れて、岩越す波路隔たれば、いつか交さん枕縁、心と共に亂るよ調子、搔合せつよ細聲に、

なげの情の一言を、女心のあさはなだ、心に深く染めて結んで三重の帯、廻り逢ふのを樂

みに、泣いて明石の浦千鳥。

唄ふともなき口すさびを、光氏少し打恨み、

又行廻り逢ふまでの、かたみに契る中の緒の、調は殊に變らざらなん。つま音の違はぬ先

にかならずと、いふにいつはり波の聲。

唄ひ添へ給ひければ、忍びやかに搔合する、その程拍子上手めきたり。藤の方の調べ給ふを、世に類なく人々の、賞めのよめきしは顔貌の、いと麗しく在する故、それに引かれて爪音も、ゆかしく聞なす事あらん、是はあくまで弾すまし、心にくき音色ながら、霞隠れの藤浪にも、をさく、劣らぬ朝霧に、隔たる船の楫の音、いとど哀れに懐しう、まだ耳馴れぬ手などを、面白き程にして、弾したるは残おほく、思はせんとの業なるべし。光氏ほとく、音色に聞惚れ、かくまで上手と知るならば、この月頃押しても所望し、聞べきものをいと悔しう、差俯いて是も又、吐息がちにて居たりしが、目を押し顔振上げ、「その爪琴は朝夕に、手馴れて祕藏なる間、この浦邊まで持下り、京都へ歸る泊々の、慰めにもと思ひしが、又廻り逢ひ搔合する、ま

づ夫までの形見に「ト、與へ給ふは圖らずも、御胤を宿し其上に、今調べたる爪音を、あかす哀れと聞き給ひ、いよく彼を振捨て難く、思ひ給ひし故なるか、心の限り行先も、變らぬ契の事なんど、なほ細々と聞ゆれど、朝霧は兎に角に、別れん事の悲しさに、しやくり上げつよ答さへ、涙に思ひむせたるも、いと道理と見えにけり。

光氏京へ出立の、其曉は夜深き中に、起出させ給ひけるが、御迎の人々も、騒がしければ心も空に、急がれながら朝霧へは、人の隙間をはからひて、

うら波の立つも悲しや秋の風
と言送り給ひければ、

波ならば共に歸らんうらの秋

と思ふ儘をつくるはぬ、朝霧の返を見て、忍ぶとすれどほろくと、溢れ落つる御涙の、顔を見上げて其心の、中を知らざる人々は、一年餘といひながら、住馴れ給ひし此館を、立別れ給ふなれば、さもあるべしと推量るに、良清などは此浦に、かの淺からず思す人、ある故ならんと諸共に、打萎れつと言葉もなし。其外御側に侍ふ者ども、故郷へ歸る嬉しきにも、今日を限に此渚を、別るゝ事は哀れがり、打しほたれて口々に、いひあへる事どもは、こと繁ければ爰に

記さず。

さて入道の今日の設備、いとかめしう仕うまつれり。いつの間に用意やしけん、いと珍らしき旅の装束、御側の人々より、下の者まで引いたりけり。光氏の装束はいふべくもあらず、しひて御著替の數々を、詰めたる長櫃押並べ、都の土産にし給ふべき、御贈物の類、善盡し美を盡し、残る隈なく奉れば、光氏頓てその衣服と、脱更めて身に馴れたる、今までの衣どもは、かの岡の家へ送り給ふ。御移香を心にしめ、是なくばとて今一重、嘆を添へる形見なるべし。

かくて夜明も近づく頃、供の支度も調ひければ、光氏は宗入を、近く招きて今までの、心遣且は又、此度の贈物、それかれの事懇に、一禮を述べ給ひければ、只はつくと平伏して、暫しが間詞もなく、やうくにして顔を上げ、衣紋を正し形を改め、「浮世を捨てて此岸を、離れまじとは豫てより、佛に誓ひし身なれども、今日御送にまゐらぬ事、あまりに禮なく且は又、御名残の惜しければ、せめては國の境までと、心ははやれど子を思ふ、闇に惑ひて足元も、さだかならねば夫さへ叶はず、是にて御暇たまはらん」ト眉に皺寄せいとけなき、童の様に打泣くは、いとほしながら、傍に、侍る若き人などは、をかしき顔やと笑ひぬべし。宗入やうく涙をばらひ、「斯様申さばすきくしき、様にも聞召されんが、思ひ出でさせ給ふ折、侍るなら

ば此浦に、生ひて振なき姫小松、御詠にはならずとも、御園へ移植る給へ」ト、御氣色を伺ふに、
 光氏も彼が體、いとく哀れと思染み、ところく打あかみ、給ひたる御目の邊、いはん方な
 く美しきを、袂をもつて押拭ひ、「實生にふた葉とわかるよを、いかでか思ひ捨つべきぞ。今の
 嘆は喜びと、なるのを待ちて見給へや。あよその松は都へ移し、また詠むるも安けれど、再び
 此所へ下る事、あらじと思へばこの住居を、見捨てて行くこそ悲しけれ。都を離れし其折の、
 霞より霧には深き歎かな

いかどすべき」ト吐息をつき、思ひ切りて足早に、かへり見もせず出で給へば、宗入はいとど猶、
 物も覺えず茫然と、立てばよろほひ坐れば轉び、思ひなしにや姿さへ、みすほらし氣に頭を垂
 れ、只押黙りて居たりしが、娘はいかどの體なるかと、心もとなく杖にすがり、さながら蟲の
 這ふ如く、岡の家へこそ至りけれ。

朝霧の心地は更に、譬ふべき方もなくて、形見の衣を抱きしめ、うつぶし倒れ居たりしが、父
 君見えさせ給ひしと、千鳥に抱き起されて、其方のかたを打まもり、「心も愚に形さへ、人並な
 らぬ身に恥ぢて、一生人に見えじと、思ひ諦め居たりしを、誰が導か去年の秋、庭に見馴れ
 ぬ男郎花、あだなる縁の絲薄、靡かじものと初には、思ひながらに張弱く、終に心も亂れ萩

つゆの情を身に宿し、枝も重けの折も折、東山より御迎繁く、此度君の御歸洛は、せん方もなき事
 なれど、打捨て給へる恨めしさ。御面影の身に添ひて、忘れがたなや戀しや」ト、返らぬ事を口説
 きたて、只涙にぞ沈みける。母の眞柴も吐息して、「最前からいろくと、欺しても騙しても、聞
 入れもせず泣いてばつかり。何の爲に此様に、朝霧に氣を揉まする事を、あなたは好んで遊ば
 した。女の知つた事ではないと、私のいふ事露ほども、お聞入れない御氣質に、任せて置いた
 が悪かつた。常の身體でない娘、この歎から若し病氣を、引出したらば」ト言ふを打消し、「あ
 あ姦しい其方まで、同じ様な口説事、今言ふ常の身體でないが、あれが仕合光氏君の、いか
 でか思ひ捨て給はん。我も願うて置いたれば、おしつけ迎の來るを樂み、藥でも飲んでまづ、
 氣を落著けて居るがよい。目出たい事に思々しく、泣顔を見するな」ト、口には言へど打萎れ、
 座敷の隅に寄り居たり。眞柴は猶も嘯き止まず、娘の側に慰めわび、投首したる千鳥を鳥渡、尻
 目にかけて立浪の、傍へすり寄つて、「其方達までへその様に、歎をかくる因はといへば、よ
 しない事を入道殿の、思ひそめ給ひし故、いつしか娘を良い縁に、つけてくと年月の、たつ
 も知らずにあまりに婿を、撰び過したその果に、光氏君を迎取られ、今こそ願叶ひしと、喜ば
 れしは僅な間、娘は一人の事なれば、婿といふのも是が初に、こんな悲しい目を見るが、なん

で目出たい事ぢややら」ト言へばともぐ立浪も、涙に聲の打曇り、「行末遂けぬ縁ぢやとて、あなたがいろく旦那様を、お諫めなされた其事も、委しう聞いて居ります。仰の通り朝霧様の、御身に障りはせまいかと、夫が何より私も」ト歎くを見るも宗入は、いとほしけれどたゞ氣脱の、様になりつと詞も出さず。都よりは早打にて、宗全ははや首を刎ねられ、其子三郎統濟は、搦捕られしなどといふ、注進あれども天罰にて、さもあらんとて耳にも止めず、晝は一日寢て暮し、夜は却つて更に眠らず、光氏君と娘の事に、打懸りておこなひも、久しくせざれば珠數の行方も、知らずなりしと手を押摺り、只管佛を拜む様、狂氣に似たれば、侍どもに、諫められて月夜に出で、きやうだうといふ行に、打廻りさま遣水に、倒れ入りて岩角に、腰を突きて痛はけしく、病臥したる程になん、少し物に紛れける。

修紫田舎源氏第二十二編序

御子様方に告げ奉る。修紫では稻舟姫、本紫では常陸の宮の、姫君の荒れたる宮に、おはしましと事を綴りし、蓬生の巻は、源氏の須磨へ下り給ひし頃より、姫君の落居の事までを記載せて、前後へわたる物語なり。近く譬はど忠臣藏の、七段目に平右衛門が、細傳を説かんとて、主人の國へ飛脚に行き、歸りて御家没落に、驚きて非人となり、師直をねらへど討ち得ず、古郷へ起き父及び、勘平が横死を聞き、連判に加はりて、本望を遂げ早うちに、行く事までを記しなば、三段目の前よりして、十一段目の後へわたり、是、横の竝なり。蓬生もそれに同じ。故に明石の次へ繰あけ、僅に大貳の北の方、のほりて驚く大詰のみを、落標のうちに加ふ。もしほたれつとわび給ひしと、前へもどるは一力屋で、敵は用心厳しくてと、又五段目の前の事を、いひ出すに齊しけれど、唯詞と文章と、かはるが故に混雑せん歟。

思どらふびくくみん
あふぞもかぢをうづりよ
かきしりきき



これより世は海の子
新めつる言も思はれ
うさきやむ成毛

二十一編 上

光氏は浪華に渡り、船より陸を見渡せば、都より迎の人々、數も知らずに立集り、恙なく著きたるを、喜ぶならんどもよめきたり。まづ靜やかに船より上り、良清に宣ふやう、「大儀ながら此船にて、汝は明石へ立歸り、是まで事なく著岸の事、及び此度の入道が、心配りそれかれを厚く謝し、夫より直様伊豫へ下り、村荻を伴うて、しづかに京へ歸るべし。宗全は首を刎ねられ、統清は搦捕つて、獄中に在るなれば、はや村荻を都に置くとともに、憚なしとは言ひながら、彼が豫ての願に任せ、統清の死罪を赦し、隱岐の國へ流しやらん、その船出すみての後に、歸り來る方こそよからめ。さるが故に取急がず、伴ひ歸れといふにてあり。はた宗全が餘類の輩、大方討たれし體なれば、はや用心にも及ぶまじ。よりて先年伊勢へ下し、度會の陣屋の守を、言附け置いたる喜代之助をも、近々に召上せ、其方にも久々にて、親子の對面せさすべし。村荻にも其事を、よく傳へよ」下いひければ、良清はつと平伏し、「御意の通り妹の村荻、枕こそかはさねども、一度夫と呼びたる統清、命は助けたまはれと、豫ての願を聞召し、わけられて流罪

とは、さて三郎は仕合者。さあらば拙者は是より船にて、引返さん」ト退く跡へ、惟吉を呼出したまひ、「汝は今より住吉へ、わが代參に參るべし。須磨の浦邊の假住へ、雷落ちて廊下を初め、所々は焼けながら、此身は更なり人々の、身にも聊か怪我のなく、又高潮の寄すると聞き、命も盡きんと思ひの外、明石へ移りし其後に、却つて敵は波の爲に、鑿になつたるなど、皆この御神の加護に因れり。なほ此所まで平かに、著きたる喜くさんくの、願ほどきにと思へども、見る如く迎の人、送りの者ども立騒ぎ、俄に心急しくて、我此度は詣で難し、都へ歸りてゆるく行かん。信を凝して是等の事を、いふべきなり」ト惟吉を、御使として申させ給ひ、出立つ時に引かへて、遊び歩く事をばせず、急ぎ京に入り給ひぬ。

嵯峨の館に著きければ、歸りし人も待ちたる人も、たゞ夢の心地して、よろこび涙せきあへず、立騒ぎつゝ鳴も止まず。光氏は住馴れし、一間所へ打通り、設の席に坐したまへば、紫はよろこび泣に、あからむ目元も恥かしく、さし俯伏きて居るものから、命に換へて止めても、かひも渚に散行きし、花の春には引かへて、又廻りあふ月の秋、心も空も晴渡り、嬉しと思ふ氣色現れ、年月積る物思ひに、かのうるさきまで濃かりし髪の、生際の薄らぎたるも、却つてそれが麗しく、ものくしけにおひたちて、なほ愛敬の彌増り、言の葉が年のふけたる、犬吉が髪

を島田に結ひたる、小辨の姿の見かはすばかり、女なりしたるを始め、庭木の枝の繁くなり、小松の遙におひのびし、見るものごとくに珍らしく、まづ喜の酒酌かはし、打休みて後やうくと、心も静まり紫が、浮立つ顔を見るにつけ、又かのあかず別れたる、朝霧が歎きし様、目に浮みて心苦しう、夫婦の中は強ちに、包み隠さん様もなく、須磨に假住なしてより、雷に波にさまぐの、憂目を見たれどさいはひに、命は消えず燈火の、明石の浦へ移りてより、宗入が懇に、歎待す義理に纏まれて、心の外にいと果敢なき、假寐の夢を結びしと、告越したるとき曲りたる、御身の返し何とやらん、いまだに心がかりなり。全く色に溺れしと、いふにはあらず其人の、事どもは斯様々々と、聞出でたまへる状を、紫つくふ、打見るに、氣強き詞に引かへて、心の底はかの浦に、捨置かれしをあはれぞと、思出でたる御氣色の、見ゆればはたとならず、情をかけ言交し、たまひしならんと思ひながら、詞に出さず素振に見せず、いと睦しく語ひて、それとはなしに忘らるゝ、身をばおもはず誓ひてしと、ほのめかしたまひければ、はや世に馴れし言様やと、光氏はいとをかしと聞きなし、かく側近く見るだにも、飽かぬ姿を此年月、隔てて住みしも宗全が、反逆ゆゑと思ふより、猶殘黨もあらむには、狩出して再びかよる、亂だになき其時は、長閑に添はむもいと易しと、いよく世界を静謐に、なすべ

き手段を心に廻し、打くつろいで其夜は眠り、かの赤松の館なる、夕霧丸を片時も早く、見まく思へど次の朝、室町より召されければ、衣服を更め出仕なし、御對面あるべき一間に、悠然と控へ給ふを、物の隙より數多の女、打集りて差覗くに、年長けたまひし御有様、かの若やかに媚きし、御姿よりもはやかなれば、須磨とやらん明石とやらん、ものむづかしき片田舎に、今までは何として、住ませたまひし痛はしさよと、今更に泣騒ぐは、義正公の時よりも、仕へなれて昔の事ども、能く知りしものなるべし。義尙公も装束を、引整ひて出でたまふ。御心地例ならず、日頃經させ給ひければ、御顔も衰へながら、昨日今日ぞ少し宜しう、思されるゆゑ光氏君を、急ぎて召させ給へるなり。是より積る御物語、しめやかにある程に、秋の日早く西に落ち、折しも十五夜なりければ、月面白う東に上り、靜なる夜の様なり。義尙の宣ふやう、「かねぐ文にて聞えし如く、己近年多病となり、管弦亂舞の物の音も、久しく聞かず臥しがちに、引籠りてのみ居たりしが、幸にして男子を擧げ、香壽丸と嚴しき、名は命けながら彼はまだ、幼少にてあんなれば、兎に角に心細く、いよく病重りなば、春若丸に家をも世をも、譲らんものと父に願ひ、此程よりして此所に住ませぬ。是へ呼べ」との差圖につれ、侍女に誘はれ、立出でたまひてしとやかに、遙下つて手をつかへ、「兄上には御道中の、御勞もあ

らせられず、御機嫌能う」と御顔を、つくづく守りて珍しう、思したまふかいそくと、悦ばしけなる有様に、光氏も絶えて久しき對面の、いと嬉しくまづ手を執り、傍へ誘ひて能く見るに、年の程より丈も高く、成長なして立振舞、いとく賢う見えけるにぞ、それかれの事物語り、せさせて試みたまふに、その應答に才智顯れ、かくてはゆくく世を保ち、給ふとも憚なしと、頼もしく思されて、なほも身近く引寄せて、顔打眺め懐しう、語ひたまふを又例の、隙見して立騒ぐ、腰元女が口々に、「春若君は藤の方の、御標致を受繼がれ、御發明でお綺麗で、噂に違はず光氏様の、御顔を二ツに寫した様な、月はひとつ影はふたつの光君、まばゆい程ちや」トいふ聲の、此方へ漏るとに光氏は、いとうるさしと暇を乞ひ、遠侍まで出で給へば、思ひがけなき四郎正尙、まづ一禮を述べ終り、「今父上の某を、御側へ招かせられ、夜は更けたれども月夜よし、光氏今宵室町に、在るよしなれば、汝迎に、彼所へ行きて連來れ、早くくと待わびたまふ、御有様に候」ト、聞いて光氏大きに喜び、御勘氣の身にあんなれば、差控へ候ひし。さあらば」とて打連立ち、乗物を急がせて、東山に到着き、御前に出でたまふに、室町御所とは引かへて、茶道を好み侘好の、風情して住みたまへば、侍どもは御側に置かれず、平人の夫婦の如く、藤の方も押並び、御對面ありければ、一入に哀れなる、御物語もありしなるべし。

長き夜も遂に明けぬ。光氏は母花桐を、さやかに見たりし夢の後、殊更戀しく思ひしが、久しぶりにて杉生に、逢ひたまひしより昔の事ども、猶思出でられて、東山より戻路、まづ鳥部野に赴きて、恙なく歸りしよしを、花桐の御墓に申し、蓮臺寺に立寄りて、花桐及びその母後室、菩提の爲に法華八講、近きに勤めたまはるべし、日は追て沙汰すべしと、頼み置いて又夫より、赤松の館に至り、案内に及ばず直様に、打通り給ひければ、政則急ぎ出迎へ、「御著の日は御混雑を推量りて差控へ、昨日は御所へ御出のよし、今日御目見を願はんと、既に倅高直は、我より先にはや今曉、嵯峨の御館へ罷出でつ。思ひがけなき御來臨も、枯れし二葉の根を分けし、若君在する故ならんが、世に有難き事なり」ト、涙とともに言上する、その中に妻小手毬、夕霧丸をいと清う、粧ひたてて當吉中垣、其外大勢此所の館を、退散らず御見知の、腰元女御目見ながら、傳きまゐらせ立出づれば、若君は手をつかへ、「父上には御機嫌能う、御歸り遊し御目出たう、存じまする」も舌まはらぬ、いたいけ盛り愛さかり。光氏にこくく打笑ひ、「袴の著なし衣紋つき、とりなり行儀政則夫婦の、躰の顯れ感心せり」ト、是を初に何や彼や、物語したまへば、夫婦はかゝる喜に、つけても例の二葉の上の、御事をのみ言出でて、涙はてしのあ

らざれば、ともに萎れて光氏も、思はず時刻を移しよが、思ひ直して座を立上り、高直は嵯峨に在りとや、己が歸りを待ちつらん。さあらば」とて立出でたまひ、又乗物を急がせて、館に戻らせたまひけるに、赤松高直のみならず、石堂の馬之丞、遊佐河原之進國助はじめ、忠義無二の者は更なり、心の底には此君を、さまで慕はぬ輩まで、東山の名だたる御愛子、再び都へ歸らせたまへば、人より先にまめくしき、志を見せまらせ、それを便に己が身を、なりいでんと思ふより、諸士の面々雲の如く、嵯峨の廣間に居ながれたり。是は光氏歸京の日、室町より數多の人を、出さるよにつき其外の、出迎は無用なりと、豫て觸置きたまひし故、今日を待つて來れるなり。それくくに對面し、皆歸し遣りたまひ、國助と高直の、兩人を留置き、奥へ招きてまづ國助に、打向ひて宣ふやう、「我室町へ願あり、其趣を認めて、唯今汝に渡すべし。可相成は夕暮までに、御聞濟の御返書を、乞受けて來るべし。若し東山へ伺ひて、其上にてとの仰あらば、わが願書を汝直様、父上の御覽に入れ、事濟むやうに計ふべし」と、何事やらんさらくくと書認めて、「急ぎの用ぞ、能く心得よ」と仰に國助、「畏り候」と引退くその跡へ、かの宗入より御送に、これまで参りし侍頭、御暇を賜らんと、申す由を訴へければ、「それ暫時留置け」と、手箱より文取出し、其者に密に逢ひ、「汝明石へ歸るとや、その歸る波につけ、

かき集めたる此藻屑、人に知らせず届けよ」と、殊更に引隠し、細やかに書置きたる、文の端に筆を染め、

朝霧や明石の浦を思ふ哉

くれぐれも見るめなき、浦にて渡せと件の文を、投遣りて立歸り、「諸高直にいふべきは、昨日御所へ出でたる處、富徴の前の御病氣、善しとも悪しとも御沙汰なし。彼方は何と思すとも、此方に隔つる心はなし。汝の妻は御ゆかりの、者にてあれば是より内々、御對面ある様に、申上けてはくれまじや」と問はせたまへば聲を潜め、「此頃はなほ御惱、重く在します由なれば、昨日夕暮方よりして、愚妻篠喜代御容體を、伺ひに罷出で、私今朝出仕の處へ、罷歸つて啣くには、夜半ばかりに義尙公、奥殿へ渡らせられ、善人を佞人の、嫉むは常の事にてあり、その讒言を實と思ひ、弟ながらも罪なき者を、沈めおかば物の報、ありぬべく思ひし故、呼返して只今まで、しめくとの物語、心障を拂ひし故か、心地すゞしくなり侍りぬ。時々發りて惱みたる、目も爽ぎ候べしと、宣へば富徴様の、水の泡とは消えもせて、また立かへる浦の波、あら姦しやと打臥して、心やましき御有様、恐れながら頑ましき、御心なりとの物語。御對面あるべき事は、覺束なく候」と、申上ぐれば光氏は、しばく吐息をつきたまひ、「さあらば折

を見合さん、宅へ歸つて休息せよ」ト、暇を取らせ又伊勢へ、喜代之助が迎には、誰をか遣らんと打案じ、かうやうの事につき、なほ種々に暇なく、かの木屋町に今は住む、花郷へは文ばかり、遣して置き給ふにぞ、浪路隔てて住むうちは、諦めもすれ同じ都に、今は歸りて在しなから、つれなき君やとなかく、恨めしけなりとなん。

作者謹しみて申す。明石の巻此所に終り、滯漂の巻に移るべけれど、例の横縦入亂れて、書取り難き事のあれば、まづ蓬生の巻を引上げ、元へ歸りて、光氏須磨へ移りし頃の事より記す。文は走り繪の遅るよは、あれ館の繪のうるさきまで續くを厭ふが故なり。

須磨の浦に、藻汐たれつと侘び給ひし、その頃、は都にも、さまざま、歎く人多かり。まづ嵯峨の内君は、幼き時より馴睦み、片時離れぬ御中なれば、別は苦しけなりしかど、家は廣く財は多く、父國助は近くに住み、かしづき数多あるなれば、御留守ものどやかに、かの浦邊の御住家を、度々人して尋ねたまひ、御小袖御帷子、時々につけ物ずきなるを、參らせなんどし給へば、少しは心の慰めにも、なりたまはんが人にも知られず、光氏のみを頼として、世を経しもの今更に、心を碎くも數多あり。其中にもかの稻舟姫の、御身の上こそ痛ましけれ。義勝公いと果敢なく、夫せさせ給ひし其後は、只僅なる田畑を、譲られしのみはかゝしき、後見の

人もなく、いみじう心細かりしを、思ひがけなく光氏の、密に來りて、某が、思ふ仔細のあんなれば、此所へ通ふと沙汰あるべし、顔をかしけなる腰元は、紅と名を呼ぶとやらん、山名三郎統清を、欺くまでは御身と彼と、姿をかへて居たまへと、彼義政の愛子なれば、そのいかめしき勢にて、館も其所此所造り改め、若やかなる腰元女を、送りて絶えず此所を訪ひ、賑しくなしたりしに、山名音川確執より、かゝる世の騷出來、光氏須磨へ赴くまでも、此上不由をあらせじとて、此所の館を賄ひの、事ども遊佐國助へ、頼み置かせ給ひけれど、敵兵糺の道を取切り、往來自由ならざる故、かくては道に背けりと、思ひながらに國助より、貢の物もまるらせず、光氏はまた宜き様に、彼が計ふなるべしと、國助を頼として、わざと文にて尋ねもせず、夫も是も便、絶果て、心細さは限なし。此頃には山名統清、合戦にのみ心を入れ、糺を窺ふ體もなければ、かの假の稻舟姫は、元の名の紅に、かへりて腰元女となり、暫しの間紅と、呼んだる眞の稻舟姫へ、早百合を初め日外より、此所へ預け置かれたる、村萩などがかしづきて、兎角慰めまるらすれど、物事うちはお心細き生にて在すれば、ぐよく思ひ煩ひて、その當座は泣くくも、兎角過し給ひしが、日を経るに従ひて、あはれに寂しき有様なり。

此水無月は夕立の、しげく降りて風荒く、加茂川の水溢れ、館の庭は海となりぬ。程無く水はひきたれど、元よりの古館を假に繕ひ置きたるなれば、半年たつやたよざるに、又昔の様にへり、殊更秋の物寂しさ、推量り思ふべし。爰に畠山鞆負丞重篤が女房に、佐賀輪といへる者のあり、彼が素性をいかにといふに、輕き武士の娘なりしが、なほ零落れて富徴の前に、仕ふる女の婢となり、米を炊ぎ水を汲み、下が下の者なるを、いかなる間にかかの重篤、見そめて頓て妾となし、男女の子數多舉げぬ。その中に先妻の、死去の跡へいつとなく、押直して奥方と、今は人にも呼ばするなり。元より卑しく育ちし女、幸ありて多くの人に、崇めらるゝ身となれば、思ひあがるは常なれど、殊更佐賀輪は畠山の、内君とかしづかるゝを、女御更衣に備はりし、思ひをなして我に及ぶ、者はあらじと心に慢じ、ある日取分け綺羅を飾り、好き乗物に打乗りて、別に一挺の駕籠を釣らせ、面持氣色ほこりかに、彼方此方を打眺め、物思なけなる様して、この糺の館へ來り、頓て門を開けさするに、右左の戸もよろほひ倒れ、道を塞げば男ども、立騒いで引起す。兎角して乗物の、儘にて佐賀輪は内に入り、荒れたる宿にも門の道、井の道、三ツの道は、必ず分けたる跡あるに、夫さへ能くは見分け難し、あら淋しき家かなと、まづ見下して南向の、遠侍とも思しき所へ、乗物を寄せさするに、姫君ならん琴を弾いて、

在したるがあからさまに、見入れられたりければ、〔直ち下〕

二十二編 下

彼方^{あなた}にてもゆくりなく、人の來^{くる}るを見つけし體^{てい}にて、あさましう煤^{すす}けたる、屏風^{びやうぶ}を急ぎ引廻^{ひきめぐら}し、出來^{いできた}る腰元^{こしもち}女^をを、佐賀輪^{さがわ}つくづく打見^{うちみ}るに、物思^{ものおも}ふ故^{ゆゑ}ならん、形^{かたち}などは衰^{おとろ}へながら、なほ物清^{ものきよ}けに賤^{いや}しからず。御顔^{おんかほ}の醜^{みにく}しと、噂^{うはさ}の高き姫上^{ひめうへ}と、恐れながら取換^{とりか}へなば、よからましと心^{こゝろ}をかしく、夫^{をつと}の姓名^{せいめい}わが名^なを名乗^{なの}り、村萩^{むらぎ}殿^{どの}に用事^{ようじ}あれば、逢^あひたき由^{よし}をぞ言入^{こと}れける。この取^{とり}次^{つぎ}に出^ででたる女^をは、早百合^{さひやく}にてありけるが、御前^{おんまへ}に走り歸^{かへ}り、「畠山^{はたけやま}重篤^{じゆうとく}の女房^{にようばう}、佐賀輪^{さがわ}と申^{まを}す者^{もの}、ぶしつけをも顧^{かへり}みず、御立^{おんたて}關^{かん}まで駕籠^{かご}を乗付^{のりつ}け」斯様^{かやう}々々^{々々}と言上^{いひあ}ぐれば、稻舟^{いなぶね}は琴押^{ことおし}遣^やり、村萩^{むらぎ}の方^{かた}を見かへり、「その佐賀輪^{さがわ}といふ女子^{をなご}は、其方^{そなた}の身寄^{みやり}か近付^{ちかづ}か」ト問^とはれて少し進出^{すすみ}で、「身寄^{みやり}どころか遂^{つひ}に一度^{いちど}、逢^あふた事もござりませぬが、噂^{うはさ}は聞いて居^ゐります。その佐賀輪^{さがわ}は若い時^{わか}、富徴^{とみしき}様の下婢^{おはした}を、勤^{つと}めたとやらそれ故^{ゆゑ}か、夫^{をつと}や子供^{こども}が光氏^{みつぢ}様^{さま}を、お譽^ほめ申^{まを}すと意地^{いぢ}を張^はり、なほ悪^あしく言^いひなして、高慢^{かうまん}者^{もの}ぢやといふ取沙汰^{とりさた}。何^{なん}の用^{よう}かは知らねども、ならう事^{こと}なら逢^あひたうも、ござりませぬ」ト村萩^{むらぎ}が、語^{かた}るを聞いて稻舟^{いなぶね}姫^{ひめ}、「其方^{そなた}の行方^{ゆくへ}を統清^{ひねきよ}が、尋^{たづ}ねて

居^ゐるは知^しれた事^{こと}、迂濶^{うくわつ}に人^{ひと}に逢^あはするなと、良清^{よしきよ}へ御言傳^{おんごんづて}、山名^{やまな}の廻者^{まはしもの}ではないか。其方^{そなた}は次^{つぎ}で聞^きいて居^ゐるや。早うく」ト村萩^{むらぎ}を、忍^{しの}ばせたまふ表^{おもて}には、いつまで斯^かくて待^{まち}たすると、心焦^{こゝろあ}られ、「物申^{ものまを}さん、案内^{あんない}乞^こはん」ト再^{ふた}び言^いはせ、「良清^{よしきよ}殿^{どの}のたつての頼^{たの}み、村萩^{むらぎ}殿^{どの}を誘^{よそ}ひたてんの、心^{こゝろ}にて參^{まを}つたり、妾^{わらは}の用^{よう}には侍^{はんべ}らず。御取^{おんとり}込^こもはんべらば、畠山^{はたけやま}の屋敷^{やしき}まで、村萩^{むらぎ}殿^{どの}に來^こらるよやう、傳^たへたまへ」ト言^いひければ、早百合^{さひやく}は會釋^{あひやく}し、「何か^{なに}は知らず、姫君^{ひめぎみ}御逢^{おんあ}ひなされんとて、あの奥^{おく}の間に御待^{おんまち}ち」ト聞^きいては流石^{さすが}に立破^{たちやぶ}り、歸^{かへ}りもならず打通^{うちとほ}り、まづ初^{はじ}めて御目見^{おんめみ}の、事^{こと}を述^のべて膝^{ひざ}を進^{すす}め、「此度^{このたび}夫^{をつと}重篤^{じゆうとく}事^{こと}、仰^{おほせ}を受けて妻子^{むすこ}を引連^{ひきつ}れ、本國^{ほんこく}讚岐^{さぬき}へ下^{くだ}るべき、用意^{ようい}を致^{いた}しよ其處^{そのところ}へ、仁木^{にぎ}良清^{よしきよ}密^{ひそ}に來^きり、糺^{ただ}河原^{がはら}の御館^{おんやかた}へ、忍^{しの}ばせ置^おきたる妹^{いもうと}の村萩^{むらぎ}、同道^{どうだう}なして伊豫^{いよ}の領地^{りやうち}へ、下^{くだ}るべき段光^{だんみつ}氏^ぢ君^{ぎみ}の、御内意^{おんないい}に候^{まを}ところ、山名^{やまな}へ餘類^{よるる}の者^{もの}多く、彼^かが尋^{たづ}ねる村萩^{むらぎ}を、我^{われ}のみにては連退^{つれの}き難^{がた}し、幸^{さいは}ひ御身^{おんみ}は嫁娘^{よめ}、多^{おほ}くの女^をを引連^{ひきつ}れて、船^{ふね}にて下^{くだ}るの由^{よし}なれば、その腰元^{こしもち}の中^{うち}に加^{くは}へ、給^{たま}はれといふ餘儀^{よぎ}なき頼^{たの}み、夫^{をつと}重篤^{じゆうとく}早速^{さくそく}承引^{じやういん}、然^{しか}るに敵兵^{てきへい}この糺^{ただ}の、道^{みち}を取^とり往來^{わうらい}は、自由^{じゆう}ならずといひながら、物詣^{ものまうで}の女^をなんどは、咎^{とが}むる者^{もの}なく候^{まを}間^ま、乗物^{のりもの}も別^{べつ}に釣^つらせ、妾^{わらは}が迎^{むか}へに參^{まを}りたり。證據^{しやうこ}には此手紙^{このてがみ}、良清^{よしきよ}殿^{どの}の手跡^{てしせき}なれば、村萩^{むらぎ}殿^{どの}の見覺^{みおぼえ}あらん」ト一通^{いっとう}を差出^{さしだ}せば、稻舟^{いなぶね}は腰元^{こしもち}の、耳^{みみ}に口寄^{くちよ}せ、「兄^{あに}の手^てに、相違^{さうゐ}なくば佐賀輪^{さがわ}に逢^あひ、連立^{つれだ}つて行^い

くがよいと、村萩に密にいや」ト宣ふ内、佐賀輪は邊を見廻し、館は荒れて物果敢なく、垢づくまでにはあらざれども、いとなよやかなる皆練の、單衣を著なして姫君の、心苦しき御有様を、例の思ひあがりたる、心より見侮り、村萩と諸共に、この姫上をも連下り、娘どもの使人と、なし参らせば方便なく、かくて在すに遙にまさり、素性宜しき人なれば、子供もそれを見習ひて、悪しうはあらじ。今まで噂に聞きしに違ひ、御顔容の麗しきこそ、幸ひなれと、身の程をも願ず、早百合を次の一間へ招き、「今御琴を遊ばしたるを、参りがけにうけたまはれば、世に類なき御音色、娘どもにも聞かせたし。田舎などはむづかしき、ものの様に姫君は、思遣り給はんが、一向に頑なる、人ばかり住むものでもなし。分聞け給ひて諸共に、讃岐へ御下り遊ばさば、よも疎略には待遇さじ。斯くてうかく、在しても、又萌出づる春に何時、逢ひたまはんか程も知れず。世の憂き事は見えぬ山路を、尋ねるとかいふ歌もあり。お勧め申したまはれ」ト生憎氣なる詞ども、聞いて早百合は膝に手を上げ、「御男子なれば世を治め、たまふ御身といふ事は、いはすと知れし稻舟様を、娘の友達同様に、連下らんとは餘りの法外。尤も都は戦の中、事鎮まるまで讃岐へ御座を、移さんといふ願なら、重篤殿より室町御所へ、申上ぐべき筈の處、あまりといへば輕々しい、女の差出たおつしやりかた」ト言へば佐賀輪はにこ

にこ打笑み、「いかにも道理は左様なれど、夫は皆義勝公の、世に在せし時の了簡、世につるよといふ事を、思し知るのが御身のため。光氏君をうかくと、頼にされるは大空の、星の光を盪の水に、映して眺る様なもの、御身の上が遙に違ふ。かくむくつけき御住居も、光氏君の御歸り有りて、造り磨かせ給ひなば、今見し様には引かへて、玉の臺になりもせん、いと頼もしき事ながら、只今は國助の、娘の外には御心を、移さるゝ方もなく、昔よりして折に觸れ、通ひたまひし所々、みな忘果て給ひたり。ましてやかよる物果敢なき、藪原に貞節を、守りて暮し給ふとも、我のみ頼む有様の、不便と心付かせられ、尋ね給ふは覺束なし」ト言ひしらするを漏聞く稻舟、光氏君の仁義を守り、今まで我をみつがれし、とは知らずして添臥を、したる女とひとつらに、思ふがをかしく顔に袖、笑を隠して居たまふを、佐賀輪は見上げてつくくと、泣き給へると心に點頭き、「夫を譽むるやうなれど、重篤を御頼みあらば、御身の落付宜き様に、計ひて参らせん。良清殿が妹御を、腰元に使うてくれと、言はれても勢は、知れた事ぢや」ト言はせも果てず、早百合は膝を突懸けて、「仁木も伊豫に領地廣く、畠山に劣らぬ大名、村萩様を奉公に、何の頼まう今山名に、尋ねられる御身のゑ、女中のなかへ打交せて、連下つて給はれと、言はれしといふ事は、ちよつと聞いても知れてある。それがあなたはわがらすか」

ト故主最眞の腹立聲。此方の一間に聞居る村萩、早百合が言葉は道理ながら、我身彼處へ下りなば、須磨へ立寄り若し君に、逢ひまゐらす事もやと、立出でて彼方此方を、押宥め押鎮め、「物騒しき都より、田舎なれどもお心の、安い所へ姫君の、お供をせんと佐賀輪殿の、言はるゝのは皆もつとも、早百合のいふも聞えてあれど、中に見て居る心苦しさ、推量しや」もひそひそ聲。稻舟姫は遙に見やり、「世につるよといふ事を、能く知るからに物果敢なき、かゝる住家も苦にはせぬ。光氏君とは一方ならぬ、契もあれば浦吹く風の、つてにてもこの憂身の有様、聞付けたまはゞ使を立て、かならず音づれ給ふべし。若し其事もないならば、斯うながらこそ朽ちもうせめと、心を定めて居るなれば、妾が事は捨置け」ト、助くべうもあらざれば、佐賀輪は言はん詞なく、「さらば村萩殿ばかりを、日暮るよまよにはやく」ト急げは心あわたしく、姫君に打向ひ、「私方へ参りし書状、兄の手跡に紛れなく、君の仰に侍れば、背くべき謂もなし。とはいへ傳き参らす、人も少きこの御殿を、心の外に出立つが、いと苦しう侍る」とて、歎けば姫の御眼も潤み、「御身にさへも捨てられて、心細さは彌増せど、止めん方も浪路の上、平に著きし便を待つ」ト、涙隠して、餞に、それか是かとさまぐに、思ひ給へどなれ衣の、汐なれたるは、傍に、佐賀輪が見る目もはづかしく、わが髪毛の落ちたりけるを、取

集めて髪に作りし、清らなるが有りければ、をかしけなる箱に入れ、衣に留めよと香一つほを、添へて下し給ふにぞ、村萩は押戴き、涙に咽びて詞もなし。姫も今更名残の惜まれ、立寄りたまふを隔つる佐賀輪、「暇取中にあの様に、暗うなりぬ」ト、咄きつよ、心も空なる村萩が、手を引き駕籠に押入れて、「早く」ト差圖を心得、急ぎ館を立出づれば、只かへり見のみせられけり。姫君も稍見送り、むづかり給ふをさまぐに、諫め宥め参らする、早百合を初めまめしき、腰元どもには引換へて、物も知らざる下司などは、此所の住居に倦果てて、佐賀輪とやらんの詞に任せ、下りたまふ方こそ宜からめ。御開運もあるまじき、御身をいかに思はるか、此所を守りて在するならん。うかく仕ふる所にあらずと、おのれくが身寄を考へ、縁につき主人を變へ、此所には止るまじう思ふ事どもを、口さがなくなぐ咄く者もありしとぞ。上の巻にいふ如く、物語前に戻り、此所は三年前、光氏須磨へ下りし年の、七月のするか、八月のはじめつかたか、その程の事なり。斯くて後都には、いよく合戦止む時なし。されば遊佐の國助より、この館を賄ひの、それかれを送る事、全く絶えしといふにはあらねど、此騒動の隙を計ひ、たまさかならでは其事なし。故によろづ乏しくて、あるに詮なき御有様、村萩須磨へ下りなば、この趣を光氏君へ、聞え

上げて御力を、添へらるゝ事もあらんと、夫を便に秋もたち、冬にもなれど音信なし。是は前にも記し如く、光氏 愼深くして、村萩に對面せず、兎角いふ間も荒磯を、引立てられて村萩は、其儘過ぎし故なりと、いふは白髪に腰屈り、古く仕へし女ばら、疎き目元をしばつかせ、「盛んなる者は必ず、衰ふるが世の常ながら、あゝ姫君の御運の悪さ。思ひがけなく神佛の、現れたまひて應驗利益を、施したまふ様なりし、世に有難き光氏様は、遠く在して近くは戰、頼む方なき御有様。いたはしさよ」ト吐き歎く。實に義勝卒去の後、絶えて訪ふ人なかりし頃は、それに目馴れて淋しとも、さまで思はず過したるを、なか／＼に出入も繁く、召仕ふ男女の數も、増して少しは賑しく、なりたるが又元の様に、復りし故に猶堪へ難く、思ひ歎くも道理なり。多くは此所に仕ふる者、かの光氏が勢を、藉りて我身を立てんと思ひ、實の心あらざれば、此頃の體を見て、暇を乞ふあり走るあり、月日のたつに従ひて、上下の人少くなりぬ。もとより荒れたる館の内、狐なんどの住處となり、木靈などいふけしからぬ、怪しきものまで人目なければ、所得顔に形を現し、琵琶琴の音に引變り、朝夕耳に馴らるゝものは、茂り次第に疎ましき、庭の木立にのりすれと、梟の鳴く聲のみにて、物わびしき事數知らず。姫上もねなき勝に、いとど思し沈みたるを、紅は見奉り、愚なる心にも、御いたはしと思ひけん。

聲うちあけて泣臥したるは、かの山猿が赤き木實、ひとつを顔に打當てて、放たぬ様に見えたりけり。口さがなき様なれば、詳しくは茲に記さず。此頃都の戰を怖れ、洛東の靜なる、所を尋ねて妻子を引連れ、隠れ住む其中に、有徳なる町人ども、寮と名づけて下屋敷の、面白き家作、好む者等が此館の、池も木立も古びたるを、心につけて放ちたまはゞ、好き價に買はんなど、便を求めていふも有り。例の道を辨へず、心の賤しき女どもは、彼等が望にまかせられ、狭く綺麗にこの様な、怖しからぬ御住居へ、移り給はゞ御心の、少しは安まり侍るべし。御側に候ふ者も、此様にては堪へ難しと、勧めても聽入れたまはず、「人も聞かんに靜に言や。妾が命のある中は、此所をば立去らじ。斯く荒れぬれど父の御影、まざ／＼とまる心地する、古き住家と思へばこそ、夫に心も慰むれ」ト、袖を押當て打泣きつゝ、家を賣りて他へ移る、事は思しもかけ給はず。又此館の道具ども、いと古代になりたるが、昔様に麗しきを、此頃はやる生茶人、義勝君の好にて、何は誰にせさせ給ひ、それは彼が造る處と、尋ね聞きて是も亦、黄金に換へんと自から、かゝる貧しきあたりと思ひ、悔りて言ひ來るを、例の辨へ知らぬ腰元、不用の物を黄金に換へるは、世の常にある事なり、目の前の見苦しき、所を夫にて繕はんと、姫君には取隠し、賣らんするを見咎めたまひ、「父君の

妾に見よ、もてあそべ用に立てよと、仕置かせ給ひし手道具ども、など軽々しき人の家の、飾に譲り與へんや。亡き父上の御本意に、違はん事こそ恐しけれ」ト、叱り懲して一品も、さる業はせさせ給はず。霜月ばかりになりぬれば、雪霰間なく打散り、外には消ゆる間もあるを、木立も草も我儘に、繁りて朝日夕日をふせぎ、いと深う積りたるは、越の白山思ひやらる。今は更に訪ひ聞ゆる、人もなき御身にて、たゞ室町の水原ばかりぞ、綾浮が御恩を受けたる、姫上なりとて里へ下る、その折々は御機嫌を、伺ひに出づれども、是もふるめき人なれば、御慰めになるべき程の、浮世語は思ひも寄らず、御いたはしき御有様を、見上げては只泣くのみなり。既に前にも記しと如く、下部も次第に散行けば、誰あつて庭の草を、搔掃はんとする者なし。かゝるまゝに浅茅は、庭の面も見えず茂り、蓬は軒を争ひて追登る。葎は西東の門を閉籠め、弛く氣色の見えざるのみは、門をさしたるよりも、頼もしく思はるれど、崩れがちな圍の垣を、踏平して路をつけ、春夏は童ども、馬牛を牽來り、草を飼ふぞ目覺しき。八月の嵐荒き年、廊下どもも倒伏し、臺所の屋根なども、はかなき板葺なりし所は、骨ばかり僅に残り、此所には止る下司だになく、朝夕の煙絶えて、あはれにいみじき事多かり。盗人などいふ横道者、さては戦に打負けて、引剝なす雑兵も、取るべき財のあるまじと、この館をば見侮り、

踏過ぎて來ざりければ、用心もなき野ら敷なれども、流石に姫の住みたまふ、一間の内はむかし、の儘に、そのしつらへ露變らず、搔掃などする人もなければ、机手筆筒すべての調度も、据置きたる所にありて、塵ばみながら失せもやらず、外になすべき事もなければ、古めきたる御厨子を開け、骸守、藐姑射の刀自、赫耶姫などいふ、繪にかきたる物語を、まさぐり物としたまひて、明し暮したまふ程に、やうく都の合戦も、音川勝利と聞えし頃、遊佐の國助罷出で、敵に道を遮られ、無據今までの、怠を深く詫び、荒れたる館を取繕ふ、それまでには至らねども、是より萬取賄ひ、國助嵯峨へ出でたる時、この事を聞えければ、紫の上驚きたまひ、稻舟姫を等閑に、捨置きたまふは恐れながら、義正君の御過と、つねく夫の御物語、今までかゝる御艱難を、知らで過ぎしぞ愚なる。まづ取敢ず時の衣服を、まるらせんとて言の葉を、御使に立てさせられ、稻舟姫はそれかれに、力を得つと少し心の、をさまり給ふ程もなく、義正公の御勘氣許り、播摩よりして光氏君、都に歸り給ふとて、上下の男女歡び騒ぐを、姫上も聞付けたまひ、ありしよりは家居も荒れ、淺まじけれど心を配り、はかなき調度を取失はず、待ちに待ちたる詮こそあれと、いと頼もしくぞ思されける。

此所より七册八葉め、(本書四十二頁)國助に命じて、室町へ願を出し給ひし物語のつど

光氏は願の趣、室町殿にて聞濟まるよや、否やを案じて在しけるが、其日は暮れて燈火を、掲ぐる頃に遊佐の國助、道を急ぎて來りけん、しとよ汗に濡れたるを、拭ひもあへず御前に出で、「まづ御心安かるべし、御願の趣を、室町御所にて早速御許容、其事即ち東山へも、言上に及びし處、光氏が取計、神妙なりとてこよなき御機嫌。義尙公の御墨附、御請取下さるべし」と、差出せばはつとばかりに、身を謹みて押戴き、三寶に載せ給ひ、「漸く是にて安堵せり。彼方此方と隔たる道、嘿かし今日は疲れたらん。さて序ながら問ふべきは、今在京の大小名、昨日よりして追々に、わが此館を訪ひて、大方逢はざる者はなし。たゞ青葉琵琶之助、彼のみ未だ使者さへ越さず、いかなる故ぞ」と光氏の、仰に國助目をしばたよき、琵琶之助は當春より、病に冒され六月の、下旬にあへなく世を逝りぬ、たしか明日七七日に、相當るとか承はる。馬之丞御目見に、罷出でたる其時に、申上けんと存せしかど、久し振にて尊顔を、拜して目出たき折からには、何とやらんいまはしく、差控へ候とて、御次にての物語。存生に候はど、眞先かけて參上し、私どもと同様に、喜ぶべきを」と言さして、差俯けば光氏は、一方ならず打驚き、「知らざりし知らざりし。桂樹はさぞ愁傷、あはれに果敢なき事にてあり。明日は母花桐の、菩提のた

めに法華八講、執行はんと鳥部野の、蓮臺寺へはや先刻、申遣し置きたるが、たしかに青葉の菩提所も、かの寺なる由豫て聞く七七日に琵琶之助が、當るも不思議の縁とやいはん、序ながら墓へまゐり、對面せん」と宣へば、國助いよく、涙に搔暮れ、「そは勿體なき事ながら、未來において嘸大慶。とかく申上ぐるうち、日も暮果てて候へば、御暇たまはらん」と、退出づれば光氏は、頓て衣服を脱ぎ更め、稻舟姫を音づれて、聞ゆる事のある由を、紫へ密に言置き、小門口より出でたまふに、日和癖なる村雨の、今宵も少し打そよぎ、をかしきほどに月出でたり。そのむかし六條の、廓通ひせし折の、道すがらの事なんど、思出でて行く程に、川合の社もはや、過ぎたりと覺しき頃、駕籠の中より不圖見れば、形もなく荒れたる家の、木立は森の様に繁り、大きな松に蔭の、纏ひ懸りて葉に置く露の、月影にきらめきて、風にさと靡きたるは、藤ならねどもいとをかし。見し心地する木立かなと、思すははや此館なり。それよと駕籠を停めさせ給ひ、例の忍び歩きには、いつも外れぬ惟吉を、近々と召寄せて、「此所は糺の館ぞかし。今宵わざと訪ふ由は、最前いひきけ置いたるに、側に附添ひありながら、うか／＼と乗物を、何所まで昇かするぞ」と、咎めたまへば惟吉は、邊をつく／＼打眺め、「そのむかしより荒れたりし、御館には候ひしが、此所は正しく藪原にて、其所とは思ひも寄らず。人の住まざるあき家へ、門違し

て御入あらば、御供の者も笑ふべし。某ひとり尋寄り、いよくそれが音づれて、試み候それまでは、此所にて待せたまふべし」ト、言ひつゝ門の内に入り、人の音する方やあると、本草の繁き廣庭を廻りくゝて尋ねれども、聊に人氣もせず。さればこそ表より、見入れし如くあき家なれ、人の住みけも無きものをと、歸り出でんとする折に、村雲散りて月明く、さし出でたるに能く見れば、雨戸を二間ばかり開けて、簾の動く氣色なり。僅に人の住めるを見つけ、人氣の無きと思ひしより、却つてぞつと怖氣立ち、恐しくさへ覺ゆれど、立寄りて「物問はん」ト、言ひつゝ内を窺へば、彼方にも此方を怪しく、思ふ様にて出でもやらず、老女と思しき聲音にて、まづ苦しげに打咳き、「さいふは誰ぞ、何人ぞ」ト、問はれてさすが姫君の、御館は是なるかと、尋ねんも憚なれば、今花郷は木屋町に、住むと知りつゝ試みに、彼が事を問ひて見んと、戸の隙間より差覗き、「某はやんごとなき御館に仕ふる者なるが、綾浮殿と聞えし女中に、対面したし」ト言ひければ、「それは他へ移られたれど、早百合といふお腰元が、何かの事を此頃は、心得て居らるれば、御用があらば其人へ、言入れたまへ」トいふ聲も、打わなよくは光氏の、侍なりとは思ひもかけず、近頃見馴れぬ若男、忍びやかにもてなして、馴々しげに言なすは、かならず狐の變化にて、誑すなるべしと、思ひ違へて恐ろしく、身の打慄ふ故にてあり。

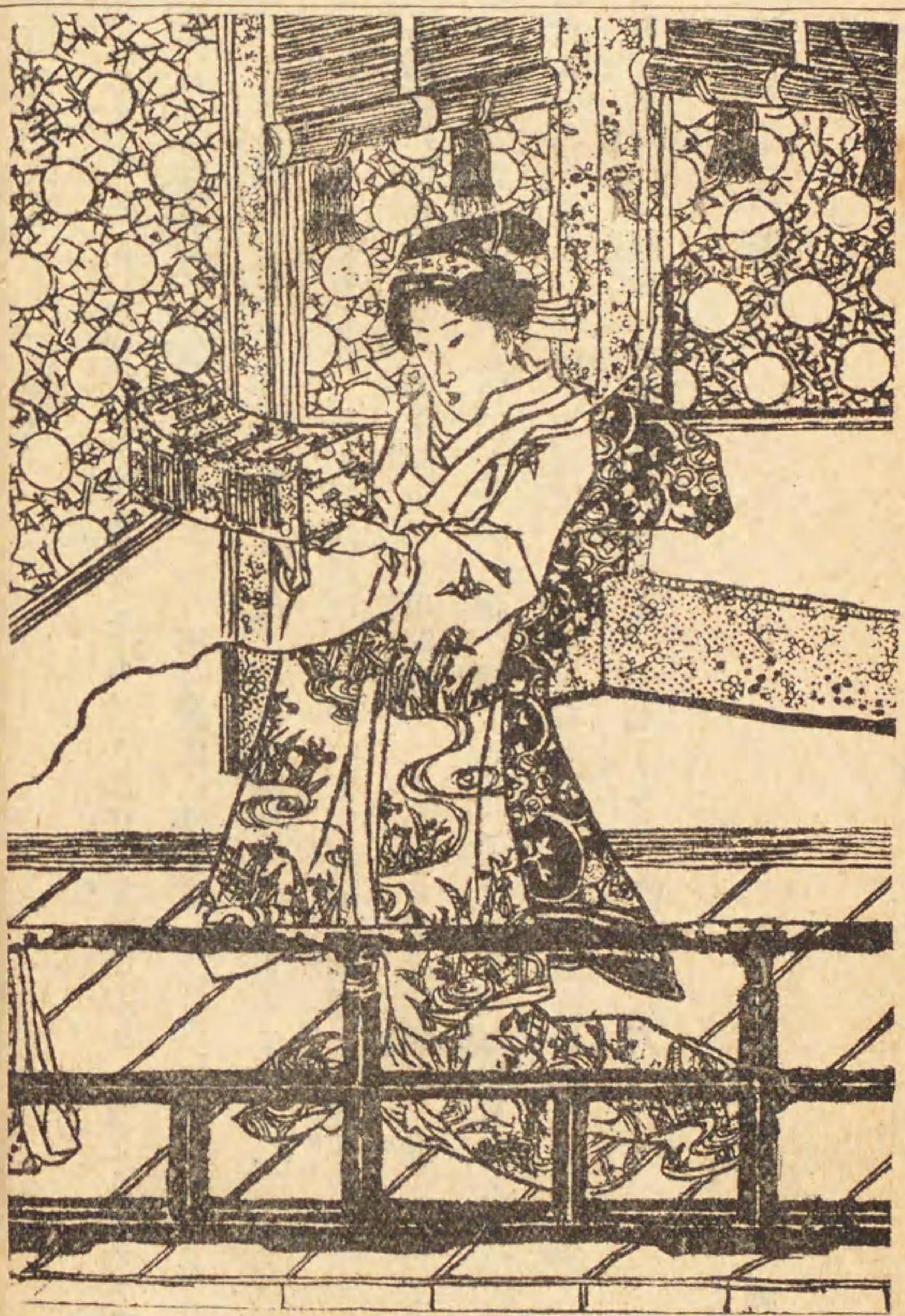
さては君の仰の通り、御館にて有りけるかと、惟吉は近う寄り、「今宵密に光氏君、姫上に申させ給ふ、御事ありとて御乗物を、あれに停めて待ちたまへり。變らせ給はぬ御有様に、侍るならば此趣、申上げさせ給へかし」ト、聞いてやうく心落付き、打笑ひつゝ女ども、縁先まで出來り、「變らせ給ふ事あらば、此様な淺茅が原を、移ひたまはで在すべきか。御機嫌は宜けれども、見るから知れた今までの、御艱難の事どもは、たゞ推量りて光氏君へ、聞上げさせ給へかし。若い時から久しい間、御奉公申したが、此様に珍しい、憂目を見たる事はなし。敵が道を取切つて、往來がならぬとやら」ト打くつろいで問はず語も、しつべき様のむづかしさに、「よし、君へまづ斯くなん、聞上げん」ト出來れば、光氏は待兼で、「何としてかは暇どりし。むかし分けたる跡だにも、見えぬ蓬の繁さかな」ト宣へば惟吉は、「しかくくに申し寄り、様子を尋ね候處、姫君には御安泰、早百合も變らず居るよしなり」ト、ありし事ども聞ゆるにぞ、しばし吐息をつき給ひ、「斯く草深きその中に、何心地して過しけん。國を隔てて住むとても、斯くも知りなば使を立て、仕様模様もあるべきを、あゝ情なき振舞と、今まで我を恨みつらん。その怠を詫びんとすれば、人の非を擧るに似たり。あゝ如何にせん」ト、歎息してこそ居たまひけれ。

修紫田舎源氏第二十三編叙

楠くすのき死しんで太平たいへい記き、花はな和わ尚しやう悟ごつて水すい滂ほう傳でん。そもく、源げん氏しも須す磨ま明めい石せきの、月つきにかよれる薄うす雲ぐもの、卷まきあたりは讀よ者ものの、眠ね氣けのさす所ところ多おほし。田でん舎しや源げん氏しは殊こと更さらに、婦ふ女ぢよ子しに見みする冊さうし子しなれば、そこらそこらをば書かき漏もらし、玉たま葛かづらの卷まきあたりへ、飛とんだらば御ご見けん物ぶつの、厭あきがこぬでよからんなどと、無いら用ざる世せ話わをややく者ものありしが、さまでは思おもひきりかねて、此こ編へんは濔しみ標めいと、蓬よもぎ生ふの打うてがへ、關せきや屋やも縁えん語ごに聞きえながら、碁ごを圍かこみしを垣かき間ま見みの、そのり程ほどは空うつ蟬せみに、逢あひ給たまひてもをかしからず、書かきもらせよといひし人の、詞ことばの是ぜなるをこと知り、唯たゞ松まつ風かぜのさらくと、おほむねのみを綴つづりしかば、更さらに興きようなく風ふう情せいもなし。されども前後くさうりの鎖くさりなれば、御おもとめなされて歌うた川がはの、繪ゑ合あばかりも見たみたまへと、かしくまりて記しるすになん。

天保丁酉開端

柳亭種彦誌



二十三編 上

光氏は思ひ直し、「返らぬ愚痴に隙取りし、片時も早く稻舟姫に、對面せん」と宣ふを、惟吉暫しと押留め、「あれ／＼蓬のあの露けさ。まづ少し拂はせて、其後分入り給ふべし」と、申上ぐれば打笑みつと、

露時雨深きよもぎや路もなし

「我こそ分けめ」ト乗物より、猶下りたまへば御先の、露を鞭にて拂ひつと、やう／＼にして入れ奉る。實に宮城野にあらねども、木の下露は雨にも勝り、御傘を奉らんと、立騒ぐばかりなれば、御袴の裾なんども、甚う露に濡れしなるべし。むかしだに有るか無きかの、中門なんどは跡もなく、入れば入るほど荒館、何の爲にかかゝる所へ、おはせしならんと見咎むる、人もなければ心安く、惟吉を先に立て、再び案内を乞はせけり。

此館の姫君も、今日は朝より村雨の、折々に降りければ、一入心の結ほれて、さまざま物を打案じ、心氣疲れし故ならん、眠るともなき晝寢の夢に、衣冠正しくまだ若き、人の親しく側に寄り來、「我こそ早く此世を去りし、御身の父の義勝なれ。庭の葎は霜に枯れ、花咲く宿となりぬべし。あれ見よく」との詞に驚き、稻舟邊を顧れば、けに／＼今まで荒果てしも、玉を磨き黄金を展べ、輝くばかりの館の結構。それより日頃懐しき、父を親しく見し嬉しさ。逢ひたかりしと取絶ると、思へばその儘夢覺めて、いと／＼名残悲しう思し、かの村雨の其所此所漏りて、濡れたる縁を押しはせ、褥を敷き屏風を廻らし、取整はせつ欄干に、打凭れ暮行く空を、打眺めつと寝もやらず。

さなきだに濡るゝ袂へ秋の雨

古き軒端を見上ぐるも、心苦しき程になん。早百合は忙しく駈來り、「光氏君の御出に、侍るなり」ト告げければ、さればこそ都にだに、歸り給はゞ捨置かるゝ、事にはあらじと待ちたりし、詮こそあれと嬉しけれど、いと恥かしき有様にて、對面せんも心苦しく、思す氣色の見えければ、早百合をはじめ腰元ども、唐櫃を持來り、かの紫の上よりして、今様染の帷子など、去頃贈りたまひしが、數多あれども塵積る、館に綺羅のみ飾りても、何かせんとて今日までは、見もしたまはで置きたるを、取出したりけるに、この唐櫃は炷物を、多く籠置きたまひしゆゑ、懐しき香の移りたるを、いざまづ是をと召換へさせ、かの煤けたる屏風を隔に、引廻す

程もなく、光氏は入來り、絶えて久しき事どもを、代るく述べをはり、さて光氏は近く進み、「年頃隔てて住みながら、心ばかりは更に變らず、糺の館はいかにぞと、忘るゝ隙は無かりしかど、わが手配の行届かず、敵の道を塞ぎし事は、驚かし聞ゆる者、なかりし故に斯くばかり、見るもいふせき草隠れに、過し給ひし年月の、あはれなりしをゆめく知らず。我生存へてあらん程は、絶えず貢を進らせんと、言ひしに違ひし罪は更に、脱るべき道もなし。今より後は御心に、叶ふ様に取計はん。今宵わざく來りしに、めんじられて年頃の、怠は幾重にも、思し容させたまへかし」ト 従弟どちにはありながら、伯父の嫡女にあんなれば、身を謙り懇に、罪を謝びつと膝指寄せ、屏風を少し搔遣りて、稻舟の體を見るに、いとつとましけに差俯伏き、頓には答も聞え給はず。やとありて顔を上げ、「分入りたまふ叢の、いと淺からぬ御志、むかしより能く知るからに、何とて恨み侍るべき」ト 仄に聞え給ひければ、光氏は猶邊を眺め、「小高かりし松が枝も、雪にや折れけんむかし見し、その庭面ともおもほえず。此所のみならず都の中、變りにける事いと多く、さまく哀れにむかしより、過來し方の年月を、かぞへて見ればこよなう積り、夢の様なる我身の有様、御身はなほさら父君母君、早く此世を去りたまひ、花を眺めず月を愛でず、たゞ埋れて暮し難き、その折々の事どもを、誰にか語り慰め

給はん。返すくも宗全を、あつまり勢と見侮り、須磨へ下りしその後にて、防の人数の足らざりしは、わが一生の過失なり」ト、うらなく語り給ふ時、早百合は靜に御前へ出で、「只今も姫君の、仰の通りにあなたをお恨み、遊ばすなどといふ様な、御心はさらく無し。御艱難のその中に、何やかやと御側から、申上けても取上げ給はず、今暫く辛抱せよ、光氏君のお歸りあらば、よしなに計ひ給はらんと、宣ひながら御胸の中には、お心細う思召すか、御涙の隙はなし。さればとて光氏君は、情なしとも辛しとも、神かけて仰せられた、事はなけれど唯お心に、かよるとおほしく玉兎の鏡は、父の形見にあるものを、御手に入らばなど此方へ、返しては給はらぬと、折節の御物語」ト言ふに光氏打點き、「尤もなる事ながら、かの鏡、小烏丸、勅筆の短冊は、武家の三種といふべき寶。さる故に室町の、寶藏に籠置きたり、御用の節は取出さん、暫くそのまゝ差置かれよ。その代にといふにもあらねど、進らする物あり」とて、恭しく袱紗包を取出して渡したまへば、稻舟姫は押戴き、燈火の下に開き、「男文字にて讀め難し、是は何ぞ」ト問ひ給ふ。其時光氏進出で、「此度滅びし山名親子が、今まで領せし所々、取集めて二ヶ國あまり、稻舟姫の化粧料に、附けられんといふ義尙公の、御墨附に候なり。明日よりして蓬を拂はせ、この圍の見苦しき、あたりは假に板垣を、打固めて繕ひ置き、遠からぬうち館

の結構、元の如くに建改めん」ト、聞いて人々安堵の思。稻舟姫は晝寐の夢に、告げ給ひたる父の詞、違はぬにつけ戀しさの、なほ彌増して顔をも上げず。光氏衣紋搔整ひ、「須磨や明石の浦人に、立交りつゝ衰へたる、浮世語は又重ねて、ゆるく聞え盡さん」ト、別を告げたまふ頃は、夜もはや更けて涙渡る、月は南の方に廻り、雨戸の開きし所より、さばるべき廊下なんども、皆打崩れて軒の端も、残りければ華やかに、さし入りたるにあたりく、能く見渡せば厨子黒棚、屏風衝立脇息褥、すべて内のしつらひは、しのぶ草に窶れたる、外の見る目に引かへて、何とやらん床しけなれば、光氏心の中に感じ、むかしくの子供話に、未來の爲とて親の建てたる、阿彌陀堂をその子は毀ち、芥子畑になしよとか。それを今は言違へ、堂の園へ芥子植ゑてと、手毬唄には謠ふめり。かゝる不孝に引かへて、稱舟姫はこの如く、物凄じく荒れたれども、父の住居を改めず、同じ様にて年ふりしは、一世に有難き孝子なり。たとひ詞に出さずとも、浦曲に隔てて住みける中は、つらき仕方と思ひつらん。あといとほしき事かなと、思ひながらに立出でて、嵯峨の館へ歸りけり。

地水火風の四ツの緒の、呉敢なく絶えし琵琶之助、空に歸るは水無月、文月、葉月と夢の間に、七七日になりければ、石堂夫婦打連立ち、蓮臺寺へ詣でけるが、此日は主人光氏君、亡き母上

の御爲とて、法華八講したまふにぞ、京洛外は更にもいはず、近き田舎の者までも、その有様を拜まんと、ゆすりて参詣夥しく、寺内の混雜おほかたならず。やうく群集の人を、拂ひ退けさせかの夫婦は、琵琶之助の墓に詣で、光氏の居たまふ座敷と、引離れたる靜なる、一間を借受け衣服を改め、休息しつゝ馬之丞、つくぐと桂樹が、有様を打見るに、そのむかし蓮葉にて、あだめきたりし姿に引かへ、心細けに世の中を、思ひ歎けるその風情、いとくあはれと思ふより、「御身の父はまだ積る、年にもあらねど果敢なく失せ、母方の伯母君なる、富徽の前は日に添ひて、御惱重らせ給ふ。夫のみならずわが妻と、なりしを憎み給ふならん。今は御身の母にさへ、親しくは語ひ給はず。されば便のなき身ぞと、思ふも道理さりながら、われも末に逢見たる、一方ならぬ夫婦の中、御身はたとひ石堂づれが、女房と呼ぶるよを、不足と思ひ給ふとも、我は只々いとほしう、思ふを力とし給へかし。よしや望のその人に、添ひ給ふともあなたには、妾側室の數多あり。されば情を懸けたまふ、暇のなくて眞實は、よも我ほどには盡されじと、思ふも心苦し」とて、不圖いひ出したれば、顔はいと赦く、匂ひ溢るよばかりの愛敬にて、涙落せば倍氣より、心變りのしたるなど、そのむかしの萬の罪、忘れて可愛く思ひけん、猶も親しく側に居寄り、「など子をば生みまたはぬ。かの契深き人と、添



ひなば最早今頃は、這纏るよ子もあらんと、思へば夫が口惜しよ。知つての通り義尙公、光氏君の御二人ながら、御本妻に御男子あり、さすればたとへ本意協ひ、男の子を擧けても、夫ははや二男なり。顔形も人柄も、遙に劣れどわが胤を、宿せば嫡子にあんなれば、家を譲りてわが亡き後も、御身は安く世を過ぎん」ト、行末の事をさへ、語るに桂樹差俯き、いと恥しうも悲しうも、おほえて何と答さへ、波を畫きし後の襖、手づから開けて光氏の、糸路ひとり供に連れ、打通りたまひければ、桂樹は更にもいはず、馬之丞も驚き恐れ、「是に御座を存じながら、御目見に出でざる罪の、申譯には似たれども、某は舅の事、忌服は受けねど桂樹は、父没して明日が、漸くに五十日、同道致し参りしを、憚り存じて此一間に、夫婦潜みて候ひしを、いかにしてか知召され、勿體なき事なり」ト、申上ぐれば笑はせ給ひ、「今日は琵琶之助が、七七日に當る由、國助に昨日聞けり。八講果てて廟參の、序ながら琵琶之助が、墓に詣でて戻り道、糸路に逢うて其方達夫婦は、小座敷に在りと聞き、召連れし者にも語らず、糸路のみに案内を、せさせて此所の襖越、聞いたでもなし聞かぬでも、ないしよ話に限なき、わが深切を現して、女もうらなく語ふ様に、言なすはまだ夫婦に、ならぬ以前の密會には、誰々もある事ながら、おしはれて婚禮した、中には愚痴の様に聞えて、夫から口説を引出し、櫻の枝で

打つて懸かる、伏籠で受けるといふ様な、騒動が出来ては悪い。過去つた事はさりと、水に流して置くが宜い。桂樹さうは思はぬか」ト、仰にいよく、面目なく、櫻の宴のその夜さり、かの白糸に勧められ、朧月夜も身の慾に、暗みて危く細殿で、操を捨てんとしたる事を、今更思ひ出すにぞ、などわが心いと若く、わきまへなしに其頃は、さがなき人の言葉に乗り、あだし浮名を世に流し、夫のみならず此君の、須磨へうつろひ給ひしも、其夜思はず取換へたる、扇よりして起るとか。さすれば斯かる世の騒を、引出しよもみづからの、過失なりと心の中に、深く悔ゆるは年増して、前後を辨へおのづから、心の静まる故なるべし。

光氏は心の底に、曇なければ石堂の、妻となりてもむかしに變らず、何やかやといと親しく、語ひ給へど桂樹は、憂きに懲りてむかしの様にも、あひしらひ聞え上げず。馬之丞は殊更に、恐入つて居たりしかば、やうなき所へ來りたる、心地せられて光氏は、其所を立出でたまふ頃は、日もはや疾くに暮果てて、例の村雨ひととほり、過ぎたるあとは雲もなく、いと静なる夜なりしかば、惟吉を顧たまひ、「いかどすべき今はわざと、忍び歩きに出でんのも、人目を思へばいと難く、かゝる序にあらざれば、立寄る便もあるまじく、かの木屋町の花の郷、その名にも似ず眺むる人の、なくて淋しく住みつらん。是より彼所を訪ふべきか」ト、仰に惟吉かしこ

まり、「然るべく候はん」ト、御請をなしければ、さらばとて乗物を、其方に向けさせ渡り給へり。道の程は遙なれど、急ぐに程なく星月と、書いたる門の目標に、紛ふべき方もなく、やがて駕籠より下立ちて、まづ内の様を見たまふに、むかしよりしてあざやかに、今めきし家ならねど、いよく其所此所荒れまさり、物凄けには見えながら、かの蓬生を見し故か、さまでに草の目にも懸らず、庭も座敷もいと狭きが、なかくに頼もしよ。元より門守る人もなき、柴折戸にはありながら、ふと立入らんもつよましよ、さればとて案内を、乞はんも軽忽なるべしと、イみて在しけるが、此家の隣の門を開け、光氏を月影に、透し眺むる女あり。はやくも心付かせられ、振返らせ給ふに驚き、かの女は礎と戸を、引立て内に入りけるを、心得ずとや思しけん、打案じてこそ在しけれ。

花郷がこの星月、壽庵の家に住みつる初は、花郷が姉千景の方へ、光氏よりして打頼み、繁々通ふといふにもあらねど、旦暮につけ萬の賄、光氏の心付け、贈りたまふを頼みとし、且此家の主、壽庵は、千景の方の養ひ親といふばかりにて深き因縁の、有るにもあらねど情ある、者なるが故花郷も、心安く過しよが、光氏都を去りてより、此所に合戦彼所に夜討、隠れ忍んで聞くにさへ、心細き事のみ多く、やうくにして騒動鎮り、君にも御歸洛ましましたながら、まだ

尋ねても給はらねば、しづ心なく花郷は、案じ侘びつゝ燈火の、下にて又も光氏の、文線返し打眺め、ひとり寂しく居る處へ、晝の頃より用ありとて、立出でたるあるじの壽庵、忙はしけに歸り来る、姿を見れば袈裟衣、手に水晶の珠數を持てり。これはと花郷驚けば、さもあらんとて座に直り、「今日はかの光氏君、亡き母上の御爲とて、御八講したまふ間、蓮臺寺へ詣りしなり。貴賤をいはず參詣は、勝手次第と觸れられたれば、我もくつとどひ集り、たやすくは近寄り難し、是を親しく拜まんには、姿を變へて僧となり、燈明の油を注添へ、香を盛換へなんどして、御注席に立交る、方こそよけれと豫て親しき、彼所の寺僧が袈裟衣を、此の通り貸したる故、思ふまゝに拜したるが、經だに讀めば頭數に、それもこれも呼集むる、法事とは事變り、學問に長け才智勝れ、行にしみ尊き僧のみ、撰人にて集めたまひ、向ふに目ばゆき莊嚴の、佛前に列りし、其様物に喩へなば、當麻寺の曼陀羅が、生きて出でしに異ならず。音樂の音の澄渡り、さながら欄間の天人も、舞出づるかと怪しまる。かく嚴しう面白き、物の限を爲たまへる、光氏君は佛菩薩の、變化の身にこそ在すらめ。五の濁深きといふ、此世へなどて生れ出で、給ひしならんと我も人も、涙に暮れて拜みたり。是らの事を少しも早く、物語らんと思ふから、この袈裟衣を返すのも、忘れてそのまゝ歸りし」ト、言へば花郷吐息をつき、「佛の變化

の御身とや。さればこそ紫の、雲を西へ迎取られ、その餘の者は爪弾き、花の降るのは嵯峨ばかり。かゝる拙き有様を、あはれやどうして暮したと、音づれもて給はらぬ、さても邪怪な佛菩薩ト、ひとりひざるを洩聞きたまひ、「さいふは慈悲ある佛に縁を、結びかへたる故ならん」ト、言ひつゝ障子押開き、悠々として入來る光氏。花郷そのまゝ取縋り、泣くより外に言葉もなく、壽庵は醫者に似もつかぬ、姿を恥ぢてや逃入りけり。光氏靜に座に直り、「まづ言ふべきは調太夫、此度召連れ上るべきが、山名の殘黨猶あらば、彼が爲に悪しからんと、そのまゝ須磨に止め置く。堅固にあるぞ安堵せよ」ト、仰に花郷涙を拭ひ、「君の明石へ移らせ給ひし、御留守に調太夫が、侍るよしは彼所より、手卷の歸りて物語。されば父の身の上は、さまで心にかゝらねど、たゞ旦暮に都より、他をばさらに知召さぬ、御身を聞くも恐しき、高潮とやら津波とやら、寄するほどなる荒磯へ、寄せさせたまひて御過誤の、ありもやせんと案じわび、袖の干る間はなかりし」ト、言ひつゝ又も打泣けば、光氏は身を近く寄せ、「人少なにていと寂しく、深き因縁もなき家に、年頃歸りを待侘びたる、御身の辛苦我とても、なぞ疎略に思ふべき。縁を結びかへしならんと、疑はしげに言ひたるは、只一時の戯なり、心にな懸けたまひそ」ト、宣へば花郷は、やうく顔を上へ、「雲によそへて内

君を、兎や角と申しなし、邪怪な御方とあてつけて、私の言うたも戯言。御佩刀を竊取り、死なんと覺悟極めたる、命を助けたまはりて、長の年月過しよも、みな御情に侍れば、たとへ此儘捨果てたまひ、御音信のないとても、何とて恨みまらすべき」ト、いよく涙にあやもなし。光氏わざと打笑ひ、「歸りしも無事、待付けし、その身も無事にてめでたき對面、それに何ぞや不吉の涙、あまり歎くと赤松の、館で別れし其折の、事を今更思ひ出し、己までが悲しうなる。母の水原も息災なる、様子は聞けどまだ逢はぬ。其方が琵琶を初めて聞きしは、もう何年になるであらう。昨日今日のやうなれど、相馴れてはや久しき中、恨みそ我も恨みはせじ。疑ひたまふな疑はじ」ト、是より例の何所にて、習ひ給ひし言の葉か、眞實見えて媚かず、花郷が胸あくばかりに、語ひ慰めたまふ程に、夜も更けぬらむ月影は、西の戸口へさし入りて、かの村雨の名残かや、春ならねどもおほる影、いとど艶なる光氏が、立振舞に花郷は、今宵おはすと知らざれば、丸寝せんとて著替へたる、寢卷の裾も亂れ髪、取上げもせぬわが姿の、なほ恥しう思へども、端近う立出でて、俱に眺めて居たる様、二葉の上の腰元にて、立廻りたる時には引かへ、何となうのどやかにて、厚く粧ひしむかしより、飾はざるが却て見やすし。光氏は不圖垣を隔てて、目さめたる子を賺すならん、唄うたふ聲を聞付け、「若くをかしき聲なるか

な。あれにて思ひ出したり、某これへ來りし時、あの近隣の門なるべし、一人の娘顔差出し、我を見て打驚き、戸を立て内へ入りたるが、彼はたしかに藤の方の、御腰元の司なり。一昨日の夜東山へ、上りし時に茶を點てて、持出でたるが何として、この隣には居るならむ。わが辟目にて面影の、似たる女かまづ隣家は、何人の住居ぞ」と、尋ねたまへば花郷は、心づきて膝を打ち、「我身の事に取紛れ、頼まれながら申上げず。隣の主人は宮内の、宰左衛門と申す者、義正公に仕へしが、病氣に因りて御暇たまはり、浪人して後妻は失せ、今は二人の娘のみ。妹が即ちその司、姉の名は葦野とて、まだ若く柔和な生。貧しき男を夫に持ち、子を一人産みて程なく、隣の父の許へ歸り、誰が告げてやら私の、身の上を能く知りて、折節此所へ訪おとづれ。かの女の申すには、妹の司は藤の方へ、小い時から御奉公、私もどうぞと思つても、嬰兒を抱へてせん方なし。光氏様の御歸浴ありて、御乳付でも入る様な、目出たい御沙汰があつたら、願うてくれと御覽の如く、此所の住居になほまして、人知れぬ破屋に、旦暮眺め暮すのが、心細く妹の話しに、東山や嵯峨の御殿の、ときめき給ふ事を聞き、其様な賑かな、所に居たいと思ふ様子。久しぶりにて姉に逢ひたい、願を立てて昨日の夕暮、司も隣へ宿下りと、承はつたばかりにて、まだ近付にも侍らねば、つい尋ねも致しませぬ」と、事細やかにぞ語りける。

二十三編 下

光氏は是を聞き、「さては司に違ひなく、隣は彼が家なりしか。浪人の身に孫を持つて、娘を家に引取りて、育み置くはさり難き、故こそあらめ夫はともあれ、母もなく妹とも、引離れて暮しなば、心細く思ふべし。折もあらば呼寄せて、腰元に仕うてくれん。兎角いふ間に夜明けなば、人の目立ちて悪しからん、然あらば」とて立上り、嵯峨へ歸らせたまひしが、是よりしても猶さまなく、暇なきその中にも、稻舟姫の御事は、等閑にし給はず、親しき人に命じつよ、下部など遣して、茂き蓬を刈拂はせ、土を運び砂を盛り、石は御影、檜の木は木曾山、匠は飛弾の國人と、上なき物上なき上手を、撰びて館を造り改め、結構むかしに復りければ、今までは只本草の葉の、哀れに凄く見えたりしも、遣水をかき流し、面白き岩どもを、組上げなんどせし程に、庭の景色の清しうなり。側仕にはよろしき童、よき女を求め出し、送り遣し給ふにより、雪霜に埋もれたる、花の梢の春に逢ひ、匂ひ出づるに異ならず、館の内やうくに、人多くなりけるにぞ、見蔑りて暇を乞ひ、散失せし者どもは、今更に後悔し、今まで怪し

き蓬の下に、年を経たる女ばらは、嵯峨の館の方を向きて、伏拜みつと歡びけり。
 秋暮れ冬に變りし頃、仁木良清村荻を、引連れて伊豫より歸り、かの川次郎出奔の、其後は荒廢
 てて、上屋敷は殊に廣く、取繕ふに日數も經べし、野の宮の隣なる、下屋敷にまづ當分、住は
 んとは存ずれども、父の勘氣の未だ許りず、如何あらん」ト伺へば、光氏機嫌麗しく、「須磨よ
 り明石の浦渡ひ、片時も忠義怠らず、都へ上り伊豫へ下り、我ゆるに今までの、苦心の事ども
 語りなば、喜代之助の心は釋けん。彼伊勢路より歸りし時、宜しく計ひ得さすべし、心置なく
 下屋敷の、塵を拂ひて落付くべし。村荻は寶劍を、取返したる功あれども、我も不興を受けた
 る身を、慎しむ故に須磨にては、つれなく對面せざりしが、今は憚る所もなし、折もあらば音
 づれん」と、懇に宣ひつ。嵯峨の住居糺の館、赤松の館などに、光氏が歸京を待ち、退散
 らぬ者どもを、あはれなる者に思し、數多物どもを賜りつ。或は又似合しき、所へ縁付けたま
 ふ程に、幸ひ人多くなりぬ。是のみならず御年の、加はり給ふ故なるか、猶むかしより思遣、
 深うならせ給ふにぞ、諸人はいよく、靡き從ひ、東山室町の、御おほえもいと目出度、日に添
 ひて華やきたまひ、兎角する間に年改まりぬ。睦月は儀式の事繁く、如月もいつか過ぎ、彌生
 朔日やうやくに、光氏隙を得たりしかば、村荻を訪はんと思ひ、八ツさがりより館を立出で、まづ

野の宮へ參詣し、仁木の裏の小門口、音づれんとて立寄りながら、何心なく見返れば、惟吉の
 女房手卷、是も此所へ詣でしならん、歸來るを不圖見付け、「あら珍らしや」ト宣へば、此方も
 驚き土に手を支き、「久しぶりなる御目見、いつも御機嫌麗しく」ト恐入れば、「其方も變らず
 目出度く。丁度よき所で逢ひし」ト邊を眺め、茶屋の床几のありけるを、是幸ひと腰打懸け、
 供の者をば皆遠ざけ、手卷を膝元近く招き、光氏は聲を潛め、「我明石へ移りてより、入道が深
 切なる志に絆されて、彼が娘の朝霧と、假寢の夢を結びしが、圖らずも水無月より、胸苦し
 けなりし事は、いかにと思ひ片時も、忘るゝ間はあらざれど、室町へ出仕繁く、館に在る日も
 それかれの、事どもに取紛れ、思ふまゝには問ひもせず。その水無月より數ふれば、はや此頃
 やと思遣るに、人知れずあはれにて、誰をか使に遣るべしと、思ふ處に彼地の様子、知りしは
 御身の他になし。遙々の道ながら、彼所へ下りてくれまじや」ト、仰に手卷はにつこと打笑み、
 「人も多きにその御使、仰付けられ下さらば、惟吉もさぞ喜び。お初産は延びるもの、とはい
 へお當月なれば、少しも早く播磨へ下り、宗入館に逗留致し、御喜のあるならば、直に上り
 て申上げん。御心安く思召せ」ト、いふに光氏打點き、「人の知らざる事にてあり、惟吉の外ゆ
 め漏らすな。やがて目出度便を待つ」ト、言流して仁木の屋敷へ、入り給へば手卷は急ぎ、家に

歸りて惟吉に、此事どもを物語り、急に仕度を整へつ。さきに下りし簀笠の、やつし姿に引かへて、縫箔の小袖を打重ね、供人を數多隨へ、彌生三日の朝まだきに、都をこそは打立ちけり。

光氏は播磨の便を、心もとなく待つ程に、十九日の朝、「只今歸り侍るなり」とて、手卷は直に御前に罷出で、深く包ませ給ふなれば、御側に侍ふ人を遠ざけ、其身は御膝の許まで摺寄り、「十六日になんいと平に、姫君の御誕生、御血心もあらせられず、御二人ながら健かに、渡らせ給ふ」ト告聞ゆ。男子は一人もちたれど、女の子はいと珍らしと、光氏よろこび大方ならず、京に迎へて産ませざりしを、今更に口惜く、道の疲を休めよとて、手卷には暇を取らせ、心の中に思ふやう、過つる年の春の夜の、夢におはして母上の、明石の浦に移りなば、磯山櫻咲出でんと、仰ありしは小櫻を、擧ぐる知らせにありけるか。いやしくも我胤にてあれば、其子は必ず高貴人の、妻とならんは必定せり、然る時には入道が、今まで娘を深く憐み、諸士が娶らんと、望むを辭みて傳きたる、本意も茲に叶ふと言はんか。夫といふも親子の者、年頃日頃信仰せし、かの住吉の神の導に、圖らず契を籠めたるにて、假寢の夢と思ひの外、宿世よりして朝霧とは、深き縁の有りしなるべし。たましく擧げし女子なるを、あやしき浦邊に産せしこそ、

返すくも口惜けれ。糺の館の東へ、住むべき所を造らせて、頼てそれへ迎へんと、急ぎ其事命じたまひ、且はかくしき人もあらば、彼地へ乳母に下さんと、思ひ廻らし給ひしが、不圖去年の秋花郷が、斯様々に申しよと、まなび聞えし葦野の、事を思出でたまひ、彼には未だ逢はざれど、妹の司は藤の方に、いと幼き時より仕へ、其父宮内宰左衛門も、侍の果なれば、葦野とてもさまで卑しき、女にてあるべからず。明石の姫の乳母には、彼を下すに如くべからず。とは思へども故郷を、離るゝ事にてあんなれば、其事を承引くか、否やを問はんと物の序に、いみじう忍び夜に紛れ、かの木屋町なる宮内が家に、案内もなくおはしたり。宰左衛門は他行なし、葦野一人ありけるが、大方ならず打驚き、隣へ渡らせたまひし折、垣間見なして御顔を、よく知るからに名乗りたまふも、待たず上座へまづ進め、「花と茨と軒竝び、御門違に侍るや」ト、伺ひ申せばその言葉を、をかしとや思しけん、光氏も打笑みつと、「三年以前に須磨へさすらへ、夫より明石へ船出して、不圖蟹の子に馴染めて、都へ歸る其時に、連立たんとも思ひしが、磯の海松布を憚りて、岩打つ浪の打別れ、跡に飜れし子安貝、拾取るにも我儘には、彼所へ再び下り難し。せめて明石へ人がましき、乳母を出し立てんものと、思ふに幸ひ御身は去る年、初子を擧げて奉公を、我に望むと花郷を、訪ひたる時の物語。それ故わざく音づれ

し「ト、これを詞の初めにて、朝霧が平産の、事の有様詳しく語り、「都を離れ遙々と、播磨へ下りたまへとは、思遣なきやうなれど、我も彼所へさすらへて、侘しき住居はしたれども、今立歸りて心安く、世を経る例を思ひよそへ、呼迎へんも暫がうちと、知らぬ國知らぬ家に、辛抱してはくれまじきや」ト、いと親しげにぞ宣ひける。葦野は嵯峨の館に、仕へたきよし花郷に、去年の秋はいひながら、行儀正しき館の奉公、若し勤め得ぬ其時は、妹にさへも笑はるべし、此所に埋れて暮さんかと、とつおいつして今までは、更に心の定らず。今宵わざと光氏の、訪はせ給ひし有難さに、萬の事も打忘れ、殊には斯くまで懇に、宣ひければ忽ちに、かの浮きたりし心も定り、はつと額を疊に摺付け、「君の仰に侍らば、播磨はおるか唐高麗、言葉のわからぬ國なりとも、厭ふ心は少しもなし。父もかねく私を、お宮仕に上げたき願、さすれば否とは申すまじ。今度の御用は不束な、此身に餘りし事ながら、仰付けられ下さりませ」ト、聞いて光氏打悦び、「明後日はよろしき日なり、父に此由物語り、いよく承引なすにおいては、明日は急ぎて此方にも、何かの用意をすべきなり。衣服その外旅の支度は、人して送越すべし」ト、宣ひながら其所らあたりを、つくづくと見廻らすに、實に花郷が言ひし如く、家の様は荒れまどひ、流石に大きなる處の、木立なんども疎ましく、いかで過しつらんと見ゆ。斯く淺ましき住居に引かへ、女の様は若やかに、顔麗しく姿優しく、立振舞もしとやかなれば、不圖過ぎ去りし黄昏が、事を思出でたまひ、彼がながらへ年まさらば、かよる様にやならまじと、目も離たずに打まもり、「御身の夫はいかにして、父の家には歸りしぞ、此世を去りしかたどし又睦しきより口説して、別れしなんどといふ様な、事にもあらば又元へ、結合はする仲立せん」ト宣へば顔打赧め、「此子の父は六條の、遊女に馴染を重ね、遂にはそれを連れて駈落、拙い此身は捨てられながら、此子は正しく父親の、有るゆる若しや御乳付の、御用もあらばと豫ての願、折好く明石に御平産。他心ある夫に繋かれ、辛苦に引かへ此子も仕合。とはいへ此方は親と親、許して一生連添ふ中、あなたは假の一夜妻、見かへられたが面目なく、人には包む事ながら、其方の夫は此世を去り、それ故里へ歸りしかと、問はせ給へば若し其事が。お宮仕の妨げに、なりもやせんと有の儘、申上げ待る」ト、差俯けば點き給ひ、「それよ夫の死したる子持は、乳母には忌むものなり。律の宿の垣根には、咲出でながら懐しき、葦を此所に摘棄てて、いかなる花と散行きけん、心強き人なるかな。初めて逢ひたる我さへも、乳母に抱へて遠き國へ、遣らんは本意なき様にてあり。

ちぎらざる中にも惜しやわかれ霜

今止めずに下しなば、取返しつべき心地して、慕ひやせまし」などとて、兎角戯れ宣へば、葦野は羞笑ひて、「私風情へうちつけに、別の惜しくと宣ふは、言はずと知れたかこつけ事、君の實を明石の姫君、お慕ひ遊ばす御心とは、ほのく御顔に現れし、朝霧様を御呼迎へ、遊ばす時に御供して、頓て目出度御目見。御心安く思召せ」ト、剛聞ゆるをざればみたる、言なしなりと聞流し、立出でたまふ後影、つくくまもる葦野が、心の中は遙々と、遠く行くより同じくは、君の御側に仕へなば、今まで積る身の憂さを、忘れなましと思ふなるべし。光氏は嗟峨に歸り、まづ朝霧が許へ送る、文を書くその中にも、孫は子よりもかはゆきと、世の諺にも言ふなれば、かの入道が此程より、いかに姫をいとほしみ、傳くならんとその有様、思遣るにも人知れず、微笑まるゝ事いと多く、我も斯くまで姫の事、心に懸るは遠く離れ、殊には女子を珍らしく、思ふが故にてあらんずらん、とまれかくまれ浅からぬ、事にこそはありけれど、思ひながらに認めたり、葦野に差添へて、下すべきその者は、心利きて殊に親しき、人を撰みて召出し、深く包む事なれば、必ずともにゆめほども、漏すまじと口固め、守刀宮詣の、小袖やうの物を初め、残るくまなく取揃へ、乳母にも有難う、細やかなる御勞、賜物多く有りけるとぞ。

葦野は乗物にて、京の程は行離れ、津の國までは舟にて、夫より彼方は鈴付けし、馬にて急ぎ著きにけり。先走にてこの趣、告遣りければ宗入は、端近くまで出迎へ、待受けて奥へ伴ひ、「賤しき己が娘ながら、御子を産みたる忝なき、遙々の田舎まで、乳母を下し給ふ事、家の面目世の聞え、此上や有るべき」ト、限なく打喜び、都の方を伏拜み、「斯く有難き御心ばへを、思ふに此度御誕生の、姫御子は更にもいはず、いよく娘も大切の、身にこそあなれ」ト腰元どもが、聲打潜めし話さへ、あなかしましと押鎮め、葦野を産屋の内へ、誘ひければ朝霧も、心地好けに打見やり、「遠き路をも厭はずして、下りし事の嬉しさよ」ト、聞え給へば此方は平伏し、まづは初めて御目見の、事どもを述べたり、君の御文を捧げまるらせ、さて彼の乳兒を抱き上ぐるに、實に玉の如くにて、美しき事類なし。さればや君のいと畏き、御身にて乳母の事まで、御心に懸けたまひ、さまふの進らせ物、疎略ならず仕たまふも、道理なりと見上ぐるに、都を離れ見も知らぬ、怪しき道に出立ちて、今まで夢の心地なりしが、忽ち歎も醒めにけり。子持の君も光氏の、歸洛の後は力なく、月頃物を思ひ沈み、いと弱れる心から、生存へてあらんとも、覺えざりしが此度の、取扱ひに物思ひも、少し慰めらるゝにぞ、頭擡けて隔なき、志を現しつ、物語りし給へば、如何あらんと案じたる、葦野は心安く、「私」と諸共に、そ

の御文を持参りし、御使の者御次まで、罷越して侍るが、斯く健かなる御有様、早く戻りて我君へ、申上げんと心のせかれ、苦しがりて居る様子、御返事を急がせられて」ト、願ふに朝霧硯を取寄せ、光氏より贈りし文には、

磯に實生の姫小松、波を避け風を防ぎ、おろかに待遇したまふまじと、返すくも教へ諭して、

うちかけん霞の袖を雛鶴にと有りければ、朝霧も思ふ事ども、少しばかり聞え續けて、

おほふ影を松の緑や鶴の雛

と書いて賜ひければ、使は急ぎ京へ歸り、密にこれを奉る。光氏つくづく打ながめ、猶怪しきまで心に懸り、床しう思し給ふにつき、さまざまに打案じ、まだ紫へ明石にて、女子平産の事はさらなり、妊りしといふ事だに聞えず、もしほかくより聞出ださば、快からず思ふべしと、ある夜人も静りて、静やかなる折言葉に現し、「かうくいふ事こそあんなれ、儘ならざるが浮世の中、いつかはと待ちに待ち、神にまで祈りたる、御身にはさる氣色もなく、苦を敷寝の楨枕、たゞ一時の戯に、思の外の事ありしが、今更に口惜しよ。女なればその儘捨置き、尋

ね知らでもありぬべき、事にはあれど親心、さまでは思切り難し。呼びに遣りて頓て見せん。其時憎み給ふな」ト、聞えたまへば紫は、さつと面の打敷み、「折々に其様な、心にも無き事どもを、仰あるこそ怨めしけれ。物憎みとかいふ事は、習ひし事もなきものを」ト、打怨みたまふにぞ、此方は最よく打笑みて、「御身も我が心より、外なる事を思遣り、先繰とかして怨みたまふ、それは誰がならはしにか。幼き時より側に置き、左様の筋はゆめほども、教へし事はなきものを。此度明石へ乳母を下し、心を配りて言問ふは、全く色香に迷ふにあらず、生れし姫を迎へし上にて、思ふ仔細の有る事ながら、其時に到らずして、斯様々と物語らば、又ひが心得したまふべし」ト、まづ其事は言ひさしつ。都の花の霞には、劣りし浦の朝霧も、所がらにや珍らしく、身を憂き波によそへつと、俱にかへらむ口ずさみ、うちつけならねど物によそへ、事に喩へてほの見し形、かの琴の音の媚きし、それかれ聞えたまへる風情、かの朝霧に光氏の、心の留れる様なれば、心の中に紫は、すぎこし方の事どもを、繰返し、我は都に棄てられて、悲しさに類なく、泣かぬ日とは無かりしが、その歎には引かへて、君は明石のうら寂しき、御慰めとはいひながら、あだし女子に御心を、分け給ひしこそたどならねと、さまざま思ひ續けられ、背差向けて居たりしが、「哀れなる世の有様や」ト、獨言に打歎けば、光氏

は吐息をつき、「我も涙に浮沈み、消えんとしたる命を生存へ、世を海山に行廻り、再び歸り來りしも、御身の此所に在る故なり。人に恨を受けまじと、思ふも此身を健かに、友白髪まで添ひ遂げん、爲とは知らせ給はずや。心の中が竹ならば、割りて見せんと諡ふなる、小唄も我身の上なり」ト、宣ひながら琴引寄せ、さらりと調子を掻合せ、勧めたまへど紫は、かの朝霧が琴の音の、媚かしかりしなんど、今聞えたまひしを、妬く思ふか手も觸れず、おほやうに美しく、たをやかなれど何所やらに、はや此頃は針を持ち、怨めしけなる様なるが、なか／＼に愛敬づき、腹立ちたるも見所ありて、をかしと君は思すなるべし。

夢の間に春も暮れぬ。むかしは平産なしてより、五十日目を五日といひて、とりわけ祝ふ習慣なるが、五月五日節旬の日ぞ、かの五日に當るらんと、人知れず光氏は、數へて床しうあはれに思ひ、都にて生れなば、心の儘に待遇して、一入嬉しからましを、片田舎にて擧げしこそ、返す返すも口惜しけれと、兎角につけて此事を、心に懸くるは健かに、成長なさは室町へ、參りする事もやと、男子よりも却つて女子を、嬉しと思す故にして、都に亂の起りしも、彼所へ下りて此子を擧ぐる、宿世の定めによりけるかと、心の中に思ひつゝ、五月朔日二日の頃、明石へ使を出し立てらる。「必ず其日違へず、罷著け」ト宣へば、御使は畏まり、五日に彼所へ到

著きぬ。その日の儀式に使ふべき、道具なんどの類まで、目出度様にしつらはせ、有難うまめまめしき、御訪にて御文には、

茸くやいかに緑の影の軒菖蒲

誠に思ひあくがれて、過し難き程になん。されば迎を下しよ時は、必ず思ひ立ち給ひね。京へ移りたまふとも、侮る人はよも。

とばかり、詞を残して書きたまへり。入道例のよろこび泣に、目をすりては繰返し、物をも言はず居たりけり。實にかゝる折にこそ、生ける詮もつくりいでしは、道理なりと見ゆるなるべし。此館にも今日の壽、衣服調度萬の物、座敷も廣間も所狭く、飾設けたりければ、都に斯くと知る人なく、闇の夜の錦にて、暮れぬべしと人々も、殘多く思ひし處へ、この御使ありければ、立浪、千鳥、はじめとし、打擧りてぞ喜びける。

菖野はたど朝霧の、情あるを頼みとして、やう／＼に住馴れつ、元より此所にも姫君の、誕生あらざる前よりして、待受けの乳母なんど、抱へしが數多ありて、その中には氏素性の、賤しからぬも無きにはあらねど、運拙く流浪して、かゝる田舎に落留れる、者のみなれば年もふけ、朝霧が語ひ人と、すべき女は更になし。この菖野は若やかにて、都の事は更にもいはず、妹の司

の話にて、御所の様をも能く知れば、聞所ある浮世語、光氏君の御有様、世にかしづかれ御勢の、有ることを口に任せ、語り盡せば朝霧も、斯くやんごとなき御方と、添臥したるのみならず、子まで擧げし身の譽、冥加に叶ひし事なりと、今まで思ひ弱りぬる、心もやうくと打けくなりぬ。今日もお側に葦野は、附添ひまるらせ嗟峨よりの、御文を諸共に、つくくと打眺め、姫御子誕生ありし故、思ひの外に斯く目出度、幸を得給へる、人さへ有るに子を持ちしが、猶煩しと捨てられし、世に憂きものは我身にこそと、心の中に不仕合を、さまぐ思ひ續けしが、乳母の事はいかになど、文の端に心づけ、問ひ給ひたる忝なさに、萬の事も慰めけり。

朝霧の返には、

いかにと問ふ人もなつ野や草隠れ

果敢なき命もたまさかの、御慰めに繋ぐになん。萬の事は御心に、推量らせたまへかし。砂に交る白玉は、拾取りて御手の内に、据置きたまふ事もかな

と、まめやかに書きたまへり。

使歸りて光氏は、此文を打返し見給ひつよ、「あはれの事ぞ」ト長やかに、吐息と共に宣ふ

を、紫は尻目に懸け、「浦より遠に漕ぐ舟の」ト忍びやかに獨言ち、ながめ給へば光氏は、振り返りて打笑ひ、「その古歌の下の句は、我をばよそに隔てつるかな。思ひもかけぬ事を聞く。あはれと言ひしはかの浦の、都に變りていと寂しき、所の様など知る故に、いかに淋しく住むらんと、思遣りたる獨言、聞過し給はずして、怨みたまふが怨めし」など、聞えながらにかの文の上包ばかりを取り、此方へ向けて見せ給ふに、都の人も恥づるばかり、手などいと美しければ、君の打捨てたまはぬも、かよればなめりと紫は、心の中に思ふなるべし。

まことや前に記すべきを、事に紛れて漏したり。去る三月なかばの頃、畠山靱負之丞、妻子を引連れ都へ歸りぬ。のどやかなる日の事なりしが、上岡崎の下屋敷へ、摘草に行かんとて、娘どもに、唆され、佐賀輪は屋敷を立出でつ、供を多く従へて、乗物にては興なしとて、町の女に姿をやつし、はかなき駕籠を唯一挺、遠く後に釣らせしなど、皆娘らの物ずきなり。長き日の事にしあれば、下屋敷にも遊び飽きて、吉田の社、眞如堂、來所此所を打廻り、保科寺より糺の橋を、打渡りつよ不圖見れば、みつばよつばの殿造、その結構室町にも、をさぐ劣らぬ御所のあり。四年以前讚岐へ下る、その前までは此所も、度々通行なしたるが、遂に見もせず聞きもせず。抑何人の館ならんと、佐賀輪は近く立寄りて、打眺めて居る折から、美々しき女

乗物の、門の内より出来るにぞ、家來に言付け彼の供に、「是は如何なる御方の、住ませ給へる御館ぞ」ト、問はせければ件の供、「此所を知らざる田舎者に、言ふも無益」ト嘲笑ひ、行過ぎんとなしたる時、「乗物暫し」ト止めさせ、戸を開いて立出づるは、今咲く花より麗しき、縫箔の小袖に時ならぬ、雪の白無垢肌著に重ね、粧ひ飾りし氣高き女、いと静やかに歩み寄り、「お久しや佐賀輪様」ト、言はれていよく不審晴れず、「さ宜ふは何方ぞ」ト、その有様にや吞まれけん、常の我慢に引かへて、ねんごろにこそ尋ねけれ。

修紫田舎源氏第二十四編序

是第廿四編を、歌舞伎の根本に譬はど、口明は潞標の、續きにて作り物、住吉の社の景に、橋掛り一面の松竝木、其縁子を明石より、連れてはるく宮参り、岸には浪の音高く、陸は初知入行列を、遠見に袖もぬるよなる、田蓑の島や難波江に、道具かはりて口明の、詰は六條田甫の假住、隣家の琴の鳴物に、幕ひらくとは櫻の縁語、是は紅葉にあふ坂山、石山詣もかたからぬ、驛路の鈴に田舎歌、關屋をちよつと二ツ目へ、さしこみ帯の寢所を、駕籠にかへたる世話場を轉じて、時代蒔繪の東山、大紋素袍の諸士の大詰、いづれもおたちの打出しは、又みをつくしにたち戻り、關屋のするは後日に残しつ。

天保丁酉解凍

柳亭種彦記

二十四編 上

其時女は打笑ひ、「數にもあらぬ者なれば、御見忘れは御道理、村萩殿をお迎へに、是へ渡らせたまひし折、御取次を致したる、早百合と申す者なり」と、言はれて佐賀輪は打驚き、よくよく視れば姫君を、連下らんとしたる時、打腹立ちて兎や角と、言争ひし女なり。むかしの姿に引かへて、打上りたる有様に、威を奪はれしか腰を屈め、膝過ぐるまで手を下けて、「年老いぬれば目も疎く、覺も悪く御顔を、見忘れたるは容させたまへ。さて此所が稻舟様の、御館に侍りしか」と、なほ訝しげに見渡すを、早百合は心に小氣味よく、「此御殿には、足利先生義兼君とて、室町御所と、連なる枝の御契約、實は世に知る堂上の、御二男ながら武家好み、弓馬に精しく其上に、殿御ぶりがよい故に、稻舟様の婿君には、丁度宜いとて光氏様の、御仲立にて御婚禮、目出度濟みしは、睦月、山名親子が今までの、領地を残らず賜りて、まことに豊かな御身の上。今日もけふとて稻舟様の、私を御側に召され、畠山の女房佐賀輪、此頃上りし噂を聞く、彼は妾が艱難を、見るに忍びず深切に、連下らんと言ひし者、逢うて禮が言ひたいと、

お噂も御座つた處、御目に掛るも不思議の御縁、お連は定めて御息女方、困しからずは御一緒に、姫君へ御對面。いざ御案内致しませう」と、さいつ年に姫君を、見蔑りたる意趣返し、佐賀輪を蹴りて遊ばんと、宣ひもせぬ事をさへ、取繕うて勸むれば、佐賀輪はうぢく、答もせず。娘どもは打喜び、「この様に結構な、御殿を拜した事は無い。左様ならば宜い様に、御執成を遊して」と、言ひつと早百合と連立つにぞ、佐賀輪も是非なく、後につき、門の内へ入らんとするを、早百合は押し止め、「見ますれば、御乗物も御座る様子、佐賀輪様はそれに召して、表門より遠侍の、御式臺へ著けさせたまへ。御駕籠是へ」と招くに驚き、「何としてかは乗物にて、御門内へ通るべき、恐れ多や」と身を縮る、佐賀輪が顔を打まもり、「四年以前に乗打を、されたる様に覺しが、あなたでは無かつたか。覺も悪しといふ程に、私はまだ年も積まず、異つた事や」と片頬に笑み、皆々を誘引ひて、數多の座敷を打通り、とある一間に控へさせ、早百合は奥へ入りけるが、此由を通じけん、暫くありて側仕と、おほしく是も麗しき、女四五人出來り、あれへ」と言ひて佐賀輪を先に、三人の娘ども、上段の下に坐せしめ、向ふの唐紙右左に、押開いたる眞中に、錦の袴打重ね、いとのだやかに脇息へ、打凭れ給ひたる、稻舟姫の御有様、むかし娘の使ひ人にと、思ひし折には似もつかず、氣高う見えさせ給ひければ、思はず佐

賀輪は平伏して、謹み敬ひ奉る。此時御側に控へし早百合、姫君の方に向ひ、「畠山鞆負之丞重篤が妻佐賀輪、久々にての御目見、御詞を下さるべし」ト申上ぐればにこやかに、「いつも變らず健かで、目出たいく。三人は定めて其方の娘であらう、名は何と呼びつる」ト、問はせ給へば姉嬢、恐るく顔を上げ、「私の名は松枝、次は小櫻、末は八重梅」「オ、打揃うて美しい器量」ト、仰に早百合進出で、「お心に叶ひなば、三人俱に留置かれ、御腰元に召使はるよに、何か障の侍らん。佐賀輪殿、只今も申す通り、室町御所にかはらざる、此御殿の御奉公を、よもや否とは言はれまじ。世に連るよといふ事を、御存じあるが御身の徳」ト尻目に掛けてにこにこ顔。佐賀輪は快からねど、今更言はん詞もなく、はつとばかりに平伏して、溜息吐いてぞ居たりける。母の心は露知らぬ、娘どもは勇み立ち、「有難い御目見をするのみならず不束な、私どもを御召仕ひ、下されんは上もなき、此身の仕合父重篤の、承らば嘸喜び、母様御禮をおつしやつて」ト、勧められて、「有難う御座りまする」も溢々に、申上ぐるを早百合はをかしと、心の底に思ひしなるべし。

この佐賀輪が身の上には、いま少し問はず語も、せまほしき事あれども、頭痛う懶ければ大方にして筆をとどむ、又も序あらん折に、思出でて聞ゆべし。抑此稻舟姫、父の道を改めざる、孝行の徳に因りて、かくの如く世に榮え、佐賀輪がみだりに人を侮り、身を高ぶりし報は忽ち、早百合に恥を見せられたり。元より果敢なき繪草紙なれば、名も事も違ひながら、其意は源氏に倣ひて作れり。かの物語は人情を、盡して書きたるものなれば、人の教になれるといふ、先達の説あるは、實に宜なるか。蓬生の巻の全く茲に終り、又濔標の巻へ復る。

幼き時より光氏は、神佛を深く敬ひ、彼方を拜み此方を拜す、その中にも取分けて、津の國の住吉と、近江の國なる石山の、觀世音を信仰ありしが、須磨に假住なし頃、かの雨風の烈しかりしに、いよく數の願籠を、なし給ひたる加護にや因りけん、其身は更なり人々にも、あやまちなくて戻りしかば、願解きにも思ひたれど、歸路にて心急がれ、惟吉を代參にて、其身は都へ入りて後も、何やかやに取紛れ、その秋漸く暇を得、夕霧丸を同道して、まづ住吉に詣で給ふ。むかしに勝りし光氏の、勢にてあんなれば、我もくと御供に、加はる者いと多く、實に厳しき有様なり。

折しもかの明石の朝霧、この御社へ年毎に、必ず詣づる例なりしが、去年の春は光氏に、離れて出立つ心もなく、兎角する中妊りて、この春平産なしよかば、一昨年のもよ怠りたる、詫を神へも申上げ、姫の初めて宮まるり、それや彼や取重ね、おもひ立浪、千鳥、葦野、數多の女

多くの士、供人美々しく大船に、帆を引あけて詣でたり。此船は濔標を、立てたる邊にとどめ置き、供人おほかた此所に残り、親しく使ふ者ばかり、遠浅なれば小舟に乗換へ、頓て岸にさし著けさせ、向ふの方を不圖見れば、誰かは知らずのよしりて、詣で給ふ人の氣色、渚に満ちて美しき、瓶子土器幣みてぐら、神寶の棒物、侍どもが持てつどけ、數多の樂人形を撰び、装束を整へたり。「なみくならぬ御方の、御參詣と見受たり、疎忽に舟より上るな」ト、朝霧は供を制し、誰が詣で給へるぞと、人に言付け問はすれば、嵯峨の君の御願解きに、詣で給ふを世は廣し、知らぬ人もありけりとて、果敢なき程の下衆だにも、心地よけに打笑ふ。朝霧聞くに淺ましく、月日も多きに今日もけふ、思はず參り會せしは、懸はなれざる縁とはいへ、今朝笑ひて行過ぎし、下部でさへも物思、なけにて君に仕うるを、世間の聞えを憚れば、愬にこの有様を、遙に見奉りながら、此所に在りとは言ひかぬる、我身の程こそ口惜しけれ。いかなる罪を作りてか、心にかけて君の事、思ひながらにかよりける、御ひどきをも露知らで、立出でつらんと心の中に、さまざま思ひ續くれれば、いと悲しくて人知らず、涙は襟を傳ひけり。岸邊に續く松原の、深緑なるその中に、花と紅葉をこき散す、大紋素袍の濃き薄き、數も知らず袖を列ね、肩を交へて警固する、中にも目立つに木良清、家紋の結び雁金を、霞のうちに

ぞ染めたりける。千鳥はひらりと渚に下立ち、「あれ手を翳してこなたの方を、眺めて立ちしは惟吉殿、遠目に能くはわからねど、その傍に控へたる、是も立派の殿御ぶり、素袍の紋に對雀、切竹染めしは誰ならん」ト、言ふに葦野伸上り、「司の所へ折見舞、東山へたびく上り、名だたる御方の御紋所、御面までも私は、おほかた覺えて居ります。あれは赤松高直殿、二葉の上の御兄君、たしか須磨まで一度は、お下りなされた尊の御方、その後に押並びし、舞鷲の紋は小櫛、獅子に牡丹は多田萩谷、堅綱は二階堂、立鼓に手毬は内藤家、菊水は楠藥師寺、鹿は富樫、團扇は兒玉」ト、事細やかに語りけり。此等は皆光氏が、昵近の者どもなれば、人より殊に物思、なき氣色にてかひなくしく、股立姿も清けなり。すべて明石に見し人々、其時の様には引かへ、いと華やかに誰々も、皆若やぎて我もくと、いどみ争ひ太刀刀、馬鞍などまで飾を調べ、磨立てたるその風情、いみじき見物にこそあれと、田舎人は思へども、朝霧のみは御乗物を、遙に見遣ればなかくに、心やましく氣のむすほれ、戀しき御影を見もやらず。陸にはあとより又一群、夕霧丸を限りなく、粧ひ立てて土佐駒の、いと小きに召させまるらせ、その馬添の童の年頃、丈恰好まで皆作り、合せし様に若君に、似合しきを撰びつと、紫裾濃花の丸、思ひくの染上下、いと愛らしき今様姿、めでたく見ゆれば朝霧は、葦野より姫御子

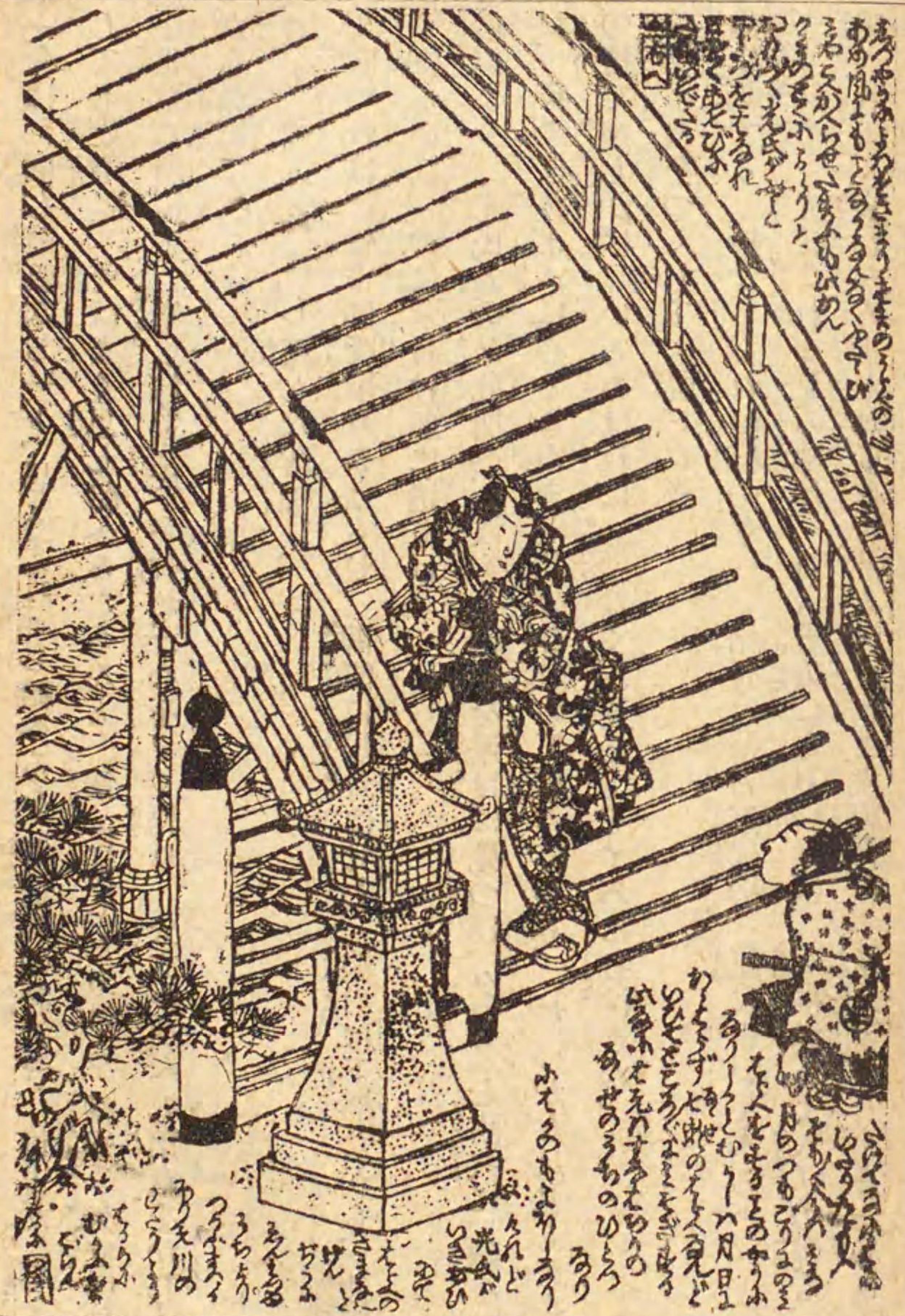
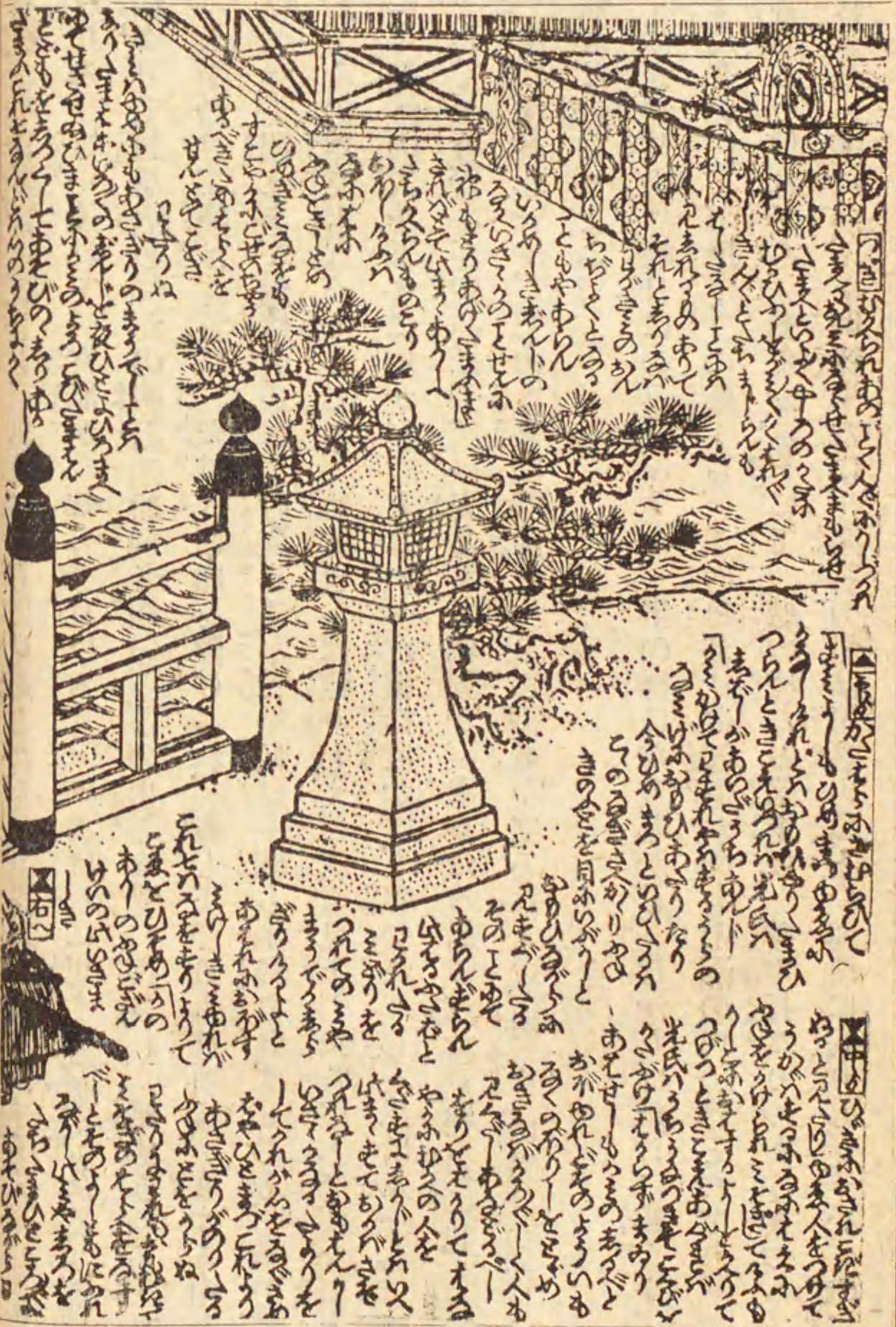
を、抱取りて舟より下立ち、そなたの方を打眺め、問はずと知れし彼こそは、逝去りたまひし二葉の上の、残置かれし若君なるべし。さて清らなる御姿を、見上けるにつけ心の中に、數にもあらぬ妾が腹に、生れ出でさせ給へども、此姫君も御胤は、あの公達に異はなし。頓て都へ迎へられ、あの如く人々に、傳かれ給へる御身に、ならせ給へ守らせ給へと、いよく社の方に向ひ、伏拜みく、斯く晴々しき人々と、立交らんもはしたなし。殊には見知れる者ありて、それと知りなば我君の、御恥辱となる事もやあらん、厳しき神事の中へ、いさよかの事せんに、神も取上げ給ふまじ。さればとて此儘明石へ、立歸らんも残多し。今日は難波に船をさし留め、姫君なほも健かに、御成長あるべきため、祓をせんとて漕渡りぬ。

君は夢にも朝霧の、詣でし事は知り給はず、いろくの神事を夜一夜、廣前にて爲させたまひ、眞に神の喜びたまはん、事どもを爲盡して、遊びのよしり明したまふ。惟吉などは心の中に、斯く静やかに世は治り、須磨の浦邊の雨風にも、事なく難なく再び都へ、還らせたまふも此御神の、徳に因れりと思ふく、光氏が不圖社を離れ、遠く遊びに立出でたる、傍に侍ひて、「住吉も姫松ゆるに悲しけれ、とは思遣りたまひつらん」ト、聞え出づれば光氏は、暫しが間打案じ、「神かけて忘れやはする浦の浪、實に思ひあたりたり。今姫松と言ひたるは、此所の渚へ

かより船、昨日遠目に訝しと、思ひながらに見過したる、其事にてあらんすらん。この春二葉と別れたる、縁を連れての宮詣が、知らざりけるよ」トあはれに思す、御氣色見ゆれば惟吉は、なほ摺寄りて聲を潜め、「かの明石の船御參詣の、この勇しき響に押され、漕過ぎぬると見たりし故、人をつけて窺はするに、難波江に船を繋げられ、禊して今日も彼所に、在する由を歸りて告げつ」ト聞えあぐれば光氏は、打點きて小首を傾け、「圖らず参り合はせしも、神の導と覺ゆれど、その用意もなく上りしを、留置きなば軽々しく、人も見下し侮るべし。折を計りて華やかに、迎への人を下すに如かじ。とはいへ此儘捨置かば、嘸つれなしと思はんかし。聊かなる便をして、彼が心を慰めばや。一先是より朝霧が、乗りたる船に遠からぬ、邊に我も赴きて、禊祓をなすべし」ト、その旨供に觸流し、この御社を立ちたまひ、所々に遊びながら、日閑けて難波に到りたまふ。

抑今は水無月の、晦日にのみ祓をする、事の様になりしかど、むかしは月日に關らず、七瀬の祓などいひて、所々に禊する、この難波江は即ちかの、七瀬の内の一とつなり。

俄の催なりけれども、光氏が勢にて、祓の様など嚴重に、神主打寄りつかうまつる、堀江川の邊より、遙に向ふを御覽するに、明石の船は田叢の島といふ所に繋りしが、いと幽に見え



ければ、「今はた同じ難波なる」ト、思はず打誦し給へるを、御駕籠の許近き、惟吉が承り、みをつくしても姫君に、逢はまく思し給へるならんと、懐に持ちたりける、軸短き矢立の筆を、御駕籠を止むる所にて、奉れば光氏も、彼わが心を早く悟り、矢立を與へし用意をかしと、おもひながら鼻紙に、

めぐりあふえにし深しな潑標

と書いて賜へれば、惟吉は受取りまらせ、御側に居合はせし、浪内は下部ながら、彼所の案内をよく知るゆゑ、彼に言付け船に遣りけり。

朝霧も最前より、光氏君の又此所へ、渡らせ給ふを遠目に見つけ、夕霧丸と諸共に、駒を竝べ駕籠を列ね、打過ぎたまふに心ときめき、其方を眺めて居る時しも、わづかなれども此書捨を、使の者の持て来しかば、いとあはれに忝なく、覺えてそごろに打泣きぬ。

思ひ初めみをつくしても詮ぞなき

田叢の島に禊する、折からなれば麻の葉へ、結付けたる形代の、紙に書いて奉る。

浪内急ぎ立歸り、光氏これを見る頃は、日も暮方になりゆけば、夕潮満ちて入江の鶴も、聲を惜まず鳴つれて、哀れなる折なればにや、人目も包まず朝霧に、逢見まほしくさへ思さる。

袖濡れぬ田叢の島の名には似ず

と人知れず吐かれ、立歸る途すがらも、興ある遊に人々は、のよしり合へど御心には、猶かの船を忘れやらず、さまざま思ひ續くる折節、此邊の遊女ども、打群れ來れば若やかなる、御供の士は、目をとどむれど光氏は、そのむかし六條の、廓に遊びて誠少き、遊女の情を知るからに、目にも懸けず心もとどめず。とは知らずして遊女は、能き客なりと附従ひ、面々思ひつかれんと、なまめきあひて色つくるを、猶疎ましく思しけり。

朝霧は光氏を、遣過して又船を、住吉に漕戻させ、その次の日もよき日なれば、社に神樂を奉り、身の程に應じたる、願ども數々神にまうし、追風嬉しく十分に、帆を引上げて明石へ歸り、ありし次第を父母に聞え、又なか／＼に物思ひ、添はりて旦暮口惜しき、我身の程を歎きつよ、今や京に光氏君の、おはし著き給ふならんと、思ふ日數もまだ經ざるに、嗟峨よりの御使あり、遠からぬうち迎へんと、御文に書き給ひけり。數ならぬ身を斯くまでに、いと頼もしく宣ふは、嬉しき事にはありながら、住馴れたりし此島を、いざとて遠く漕離れ、身は浮雲の寄邊なく、心細き事やあらんと、心の中に朝霧が、さまざま思ひ煩へば、入道も御文を拜し、「御身を都へ離遣らば、心もとなく案じわび、必定己は病を發し、終には命に關るべし。さればとて姫君

もろとも、かよる田舎に埋れて、過させんのも口惜しよ、御身を何卒貴人高位に、添はせんと
 思ひたる、わが願のなかくに、叶ひし故にむかしにまさる、心盡しもするなり」ト、父の歎
 を見るに悲しう、御返は此方よりと、まづ御使は都へ戻し、腰元千鳥が今一度、都へ上りて打
 絶えたる、それやかれやの知人に、逢ひたき由を折々に、願ひし事のあるれば、此使には彼
 こそ宜けれと、御返は事短く、田舎者は何事も、不束なれば都の人に、立交らんは恥しう、迎
 へを下し給ふとも、出立ち難しと書認め、千鳥に人を差添へて、都へ上せけりとなん。
 ある日光氏室町より、嵯峨の館に立戻り、打寛がんとする時に、言の葉御前に手を支へ、「明石
 よりの御使に、千鳥と申す御腰元、罷上りて御目見を、願ひたしと申入れ、先程より御歸を、あ
 れに待ちて侍る」ト、言ふに光氏、「珍らしや、その女此方へ」ト、人無き座敷へ呼入るよ。千
 鳥も久しく宗入の、館に仕馴れたれば、行儀を見習ひ詞も正しく、機嫌を伺ひ朝霧の、返の文
 を差上ぐる。光氏取つてさらりと讀み、心に何と思ひけん、たゞ打笑みて側に置き、「千鳥近う」
 ト膝元へ、招寄せて聲打潜め、「阿古木は磯菜の事に託け、仁木喜代之助夫婦もろとも、伊勢國
 度會の、陣屋に遣し置きつるが、はや彼の陣屋に喜代之助、用無き間さいつ頃、迎への人を下
 しと處、春の頃より阿古木は病氣、日に添ひて惱まさり、本復すべくも覺えねば、都へ戻りて

磯菜の事を、某に頼置き、その上死なん願にて、喜代之助よりまづ彼が、磯菜を連れて先に上
 りぬ。よりに二人は野の宮の、仁木の屋敷へまづ假に、住ませつれども彼所には、喜代之助が男
 女の子、良清村萩あんなれば、磯菜とふたり心安く、暮したしとの願なるを、いかにしてかは
 其方もむかし、奉公したる三筋町の、二見屋の主が聞付け、勤せし頃徳分を、多く己に得させ
 たる、阿古木に恩をおくらんと、廓を離れて遠からぬ、六條の古家を、いと清らかに繕ひて、此
 頃よりそれに住ませぬ。萬の賄ひ召仕ふ、男女の事は、某が、心をつけて送り遣し、變らぬ様に
 何事も、訪ひ聞え情は盡せど、其身は鞍馬の籠なる、野中の里に在りながら、魂ははるく赤
 松の、館へ通ひし有様を、思ひ出づるも恐ろしく、自ら行きたる事はなし。病に臥して苦しま
 ば、例の執ねき心や起らん。御身は久しく仕馴れ、阿古木の心を知れる者、今上りしこそ幸ひ
 なれ、彼所に赴き懇に、介抱なして阿古木の心を、和らぐ様にしたまへよ。さりがたき事
 ありて、千鳥は此所へ留置くと、我より明石へ言ひやらん。磯菜は利發の生れにて、顔も清ら
 にありければ、はや此程は丈も伸び、娘づくりしたらんと、是のみ床しく思ふ」など、細やか
 に宣へば、千鳥は驚顔に現れ、「阿古木様は御病氣とや、御心細う思すべし。むかしお世話を
 懸けたる御方、此方より願うてなりと、御看病に參るが道、殊には仰是より直に、まづ御様子

を伺はん」ト、急ぎ御前を下りけり。

二十四編 下

蟬の蛻の空衣は、去る年に阿古木を誘ひ、その名に因む伊勢の國へ、夫ともふ下りて後、
 君も都を引離れ、須磨の浦邊の御旅居も、遙に聞きて人知らず、思ふ事のなきにしも、あらね
 ど聞えん便もなし。一度は弟の君吉、阿古木の使に下りしが、彼が思はん事を恥ぢ、その時と
 ても聊の、傳へだになく徒に、年月を経る鈴鹿山、吹越す風の人ならば、言傳遣らんと歎
 つのみ。さればかの光氏君の、須磨や明石の御旅寢は、いつまでと限りたる、事にもあらねど
 去年の秋、都に還り住みたまひ、喜代之助にも上京せよと、御使を賜りつ。既に阿古木は病
 に因り、先立ちて上りしかば、空衣夫婦は心安う、ゆるやかに仕度を整へ、秋の末にぞ立出で
 ける。草津に宿り逢坂の、關入る日しも光氏君の、石山の觀音へ、御願解きに詣でたまふ。喜
 代之助が宿へも、この事早く聞えければ、老の心の忙しなく、さらば必ず道の程も、騒しかり
 なん御通行の、妨げにならざるやうと、まだ曉より急ぎけれど、空衣が召仕ふ、女ども多け
 れば、やつれ姿をそのまゝに、都へ入らんも恥しう、髪をとりあげ化粧しつ、兎角障取り日は

闌けぬ。大津打出の濱など、打過ぐる頃君ははや、粟田山越えたまふとて、御先を拂ふ人、道去りあへず聞えぬれば、仁木方の侍は、馬乗物より皆下立ち、女どもは駕籠のまよ、此所彼所の杉の下に、昇下させて木隠れに、おのく潜み遣過し、奉らんと控へたり。下づかへの女などは、先立ちて遣りたれど、なほ腰元に親しく仕ふ、女も數多あんなれば、鉦打乗物十挺ばかり、簾を洩る衣の色合、田舎めかす今様なるは、かの空衣が風流を、見習ひし故なるべし。

世も治りて遊びがてらの、御願解きにおはすれば、數も知らざる御先の、者さへ心のどやかに、祭などを見る如く、皆駕籠に目をとどめたり。此日は九月晦日なれば、紅葉の色々扱交せて、はや霜枯の草のむらく、花咲く頃よりをかしう見ゆ。石山までは遠からぬ、道にはあれど御供は、皆一様の旅装、關屋をさと外れ出づるを、駕籠の内より空衣を、眺遣りて人知れず、むかしの事ども忘れねば、思ひかへして哀れけに、

清水よりせきとめがたき涙哉

斯くとは知らせ給ふまじと、心に思ひいと悲し。

光氏は乗物の、簾下して行過ぎんと、したまひしが喜代之助が、控へたるを御覽じて、下立ち

たまへば此方はいよく、恐入りて額を砂に、摺付けく手をつかへ、「何をか先に聞えあけん、まづ健かに渡らせたまひ、此上の喜びや候べき」と、言出づればいと機嫌よく、「汝も無事で歸洛めでたし。今までの辛苦は追つて、ゆるく謝すべし。餘の事は差措いて、まづ言ふべきは其方の嫡子、川次郎が敵に與し、事あらはれて身退き、淀川に落ちて失せたり。さすれば家を嗣ぐ子あるまじ。よつて須磨の供に下り、いと能く仕へし者の中、とりわけて志、神妙なるを取立てて、汝が養子にせさせんと、其事はまだ其方の許へ言遣らざれども野の宮の、屋敷に此程住ませて置きつ。わが仲立を否とは言ふまじ。途中ながら初めての、親子の對面なすべし」と、良清を召寄せて、逢はせたまへば有難涙、押拭ひく、「赤松左衛門政則より、事細やかに申越し、疾くに承知仕る。憎きは川次郎、生の子よりも勞りし、わが恩を打忘れ、君に刃向ふ大罪人。その御咎はさまでになく、遊里に戯れ酒に亂れ、我儘に身を持なしたる、良清が心を改め、僅に君へ仕へしを、賞したまはる寛仁大度。彼に家だに嗣がせなば、死すとも思置く事なし。わが君の洪恩を、おろそかに思ひそ」と、良清を誡めて、俱に御前に平伏しけり。光氏は打笑ひ、「夫にて我も安堵せり。久しぶりなる面會に、物語る事聞く事あらん、良清は石山へ、供に及ばず父と連立ち、是より都へ歸るべし。その外の仁木の侍、心急かんにはや行け」と、

皆々に暇を賜ひ、駕籠にも乗らず色づく梢を、打眺めつよかの木蔭に、昇下したる女駕籠、數ある中に珍らしき、純子にて張りたるが、特に自立ちて空衣の、乗りたるも著るれば、靜に歩み寄りたまひ、「まことや旅の送迎は、關を限りて行く習慣、唐土にさへ有るとやらん。されば今日の關迎へ、思捨てざる印なるを、此所に隠れて逢ひもせず、わがもの顔の關守を、さも目ざましく羨しと、思ひし故に良清と、ともに先へ立たせたり。都へ戻る日をりもをり、此所で逢ひしは不思議の縁。とは思はずや」ト乗物の、屋根に凭れて、

かひなしや初潮ならぬ海近み

と打戯れて宣ふを、少し後れて來懸りし、君吉が不圖認め、今はおほし忘れぬべきを、心長くもおはするかな、いと忝なき事なるを、なぜ御請を姉上は、聞えあけずおしだまり、おはするならんと思ひながら、御前に跪き、「去る年須磨へ下りし時、いと有難き御懇の、上意を數々受けながら、其後罷下らざる、罪は今更申開かん、詞も之なく候」ト、恐入りてぞ申しける。抑この君吉は、むかし童なりし頃、光氏深く憐みを、懸け給ひしかば其身も誠の、心を盡して仕へまるらせ、須磨へ下りし其時も、阿古木への御返を、持歸りて又引返し、君に附添ひまるらせん、心なりしが富徴の前、あまりなるまで光氏君を、憎ませたまふ世の騒を、恐れ

再び出立たず。光氏これを能く知れば、快からずこの年頃、思しけれども色にも出さず、むかしの様にこそあらね、なほも親しき家人の、うちに末には數入れ、吉名は幼けなりとてか、君一郎とぞ召されける。此時はまづ打絶えて、逢ひ給はざる事どもを、言流して後「さて汝は、姉の嫁したる其後に、仁木の家に來りしなれば、喜代之助が勘當せし、良清にはまだ一度も、面會なしたる事はあるまじ。彼は元より仁義の道を、知る者ながら唯遊里に、通ひし若氣の過失を、物固き喜代之助が、見るに忍びず追放てど、さまでの罪は無き者なり。其後密に我に仕へ、久しく忠義怠らねば、おのれ詞を添へし處、喜代之助が心も解け、打連立ちて關を越えぬ。汝が爲には甥とも言はん、縁にはあれど此後は、兄とも彼を頼むべし。まづ早く行きて逢へ」ト、是も追立て遣りたまひ、駕籠の簾に耳を寄せ、内の様子を窺ふに、人氣なければ訝しと、戸を引開けて見たまへば、いつ迂り出でたりけん、空衣はあらずして、散過ぎたる紅葉の枝に、鼻紙を結付け、今の脇とおほしくて、

歎きの中を關の秋風

懐の紅筆にて、しどけなく書捨てたり。心悪しとそこら邊を、見廻したまへば腰元女の、後に隠れて蹲居たり。光氏は打笑ひ、「今更に初々しき、その振舞こそ心得ね。年頃跡絶えて逢

はざれど、我は心にいつとなく、かの方違の夜の事さへも、昨日今日の心地して、しのばしき事いと多し。その假寝には一向に、村萩なりと思ひし故、すきくしげに憎まるよ、事をも聞え續けしが、花守ありと知りてより、みだりに手折らん心はなし。思捨てざる印とは、たゞ一時の戯なり。喜代之助を打頼み、御身を伊豫國よりして、呼上せたる其時は、親しく語り、早百合と許り、人目の多き赤松の、館へさへも来りしが、むかしにかへりて蛻のから駕籠、同じ様なるすさみ事、すべきと我を疑ひてか「ト少し怨みて宣へば、空衣は面をあかめ、「仰の通り阿古木様の、事については御側近く、侍りて仰を受け、又憚りをもかへりみず、直に聞えあけたる事の、なきにもあらねど其頃は、村萩山名の家に住み、かねく君が御約束の、ありし事を露知らねば、心のおかれざりしかど、今の程は野の宮に、戻りて折々渡らせ給ふ、御噂も聞き侍る。むかし蛻のその夜の事、もし村萩がそら寝にて、聞いて居たなら口へ出して、言ひこそはせね疑ひの、晴れざる上に御詞を、親しく妾へ懸けらるよを、彼もし見もし聞きもせば、ゆめく覺なき事に、義理ある娘の恨を受くるも、今はまして恥しう、此所にて御目見致したは、夢の様におほえながら、駕籠に隠れて侍りし」ト言ふに光氏いよく笑ひ、「遠慮なすにも程のあり、君吉にしるべさせ、碁を打つ様を見たりしは、我前髪を拂ひし當座、むかしの事を

心にとめ、おほえて居る程静まりし、村萩が氣質にあらず。殊に此所は逢阪山、遙に隔ちし野の宮の「ト宣ひかくる折も折、京の方より昇來る乗物、側に下させ立出る村萩。母の迎へに來りしかと、光氏見れども知らず顔、つくりてそこく、駕籠に打乗り、「急ぎ參れ」ト供を急ぎ立て、石山さしてぞおはしける。

さる頃よりして阿古木の住める、六條の假家は、はるくくと田面を見渡し、物寂しき様なれど、三筋町へ近ければ、藝子などいふ媚かしき、女の集ひ所にて、隣にては琴を弾き、向ひにては鼓を調ぶ、それらを聞いて憂さを晴し、且光氏の心をつけ、送越したまひたる、千鳥はむかしの片貝にて、久しく仕馴れたる者、心安く打語り、磯菜は稀なる孝子にて、晝を能く描くに心を慰め、日を送りしが阿古木は俄に、煩重くなり行きて、此世に久しくあるべきとも、思はざるにや尼になりぬ。

光氏は聞き給ひ、黄昏が最期の折、二葉が惱みし時といひ、ふたよび三たび怪しげなる、事を見しより疎しく、伊勢へ下し今都へ、立歸りても音づれず、過せしかども叔母渦浪の、形見と見るは彼のみなるを、逢はで果てなば口惜しからんと、驚きながら渡り給へり。夕暮なれどはや閉したる、戸を敲いて案内を乞はせ、しかくくと宣はすれば、千鳥は急ぎ出迎へ、病の床の見苦しきを、隠さむとてか葭屏風、引廻らして隔とし、その枕近き程に、請じ申せば光氏は、未だ著座もするやせ

ず、「世を黒髪と諸共に、思ひきり給ひし由。などて斯くまで心弱き、まだ若き身の養生を、加へて早く本復あれ。磯菜は不便と思さずや」ト、宣ふ聲も打濕み、實に思ひ入りし様に、もてなし給へば女には、似氣なく猛き心なりしも、久しき病によわくと、なり行く故にや實と聞なし、「斯くまで心に懸け給ふ、とは知らずして此頃中、更に音づれ給はぬを、怨みし事の愚さよ」ト、萬哀れに思ひしみ、いと苦しげに、脇息に、押凭りて此方に向ひ、「色香も失せて散りて行く、身は芥ともならばなれ、残す蒼が心の障、他に頼まん人もなし、恐れ多き事ながら、俄に背丈の伸びたる娘を、擧げ給ひし御心に、なりて見捨てて給はるな。世にも人にも憎まれて、あるに詮なき身ながらも、今暫くは世に生存へ、せめて蒼の綻びて、咲出づるのを見んものと、思ひし事も夢見草、親木は霜に枯れて行く、心を推し給はれ」ト、消入りつよぞ泣きにける。光氏さすがに胸潰れ、「其事なくとも磯菜は血筋、見捨つべき謂はなし。ましてや御身の頼と云ひ、わが心の及ばん限りは、何事をも後見せん、心にな懸けたまひそ」など聞えたまへば打點き、「此子の父の前齋を、兄君なりとさいつ年、仰ありしは妾が心を、安めん爲の偽と、知れどもそれを幸ひに、且暮磯菜に打向ひ、父も氏ある御方ぞと、身を謹みてかりそめにも、賤しき事な見習ひそと、教へ諭すを彼も聞入れ、蓮葉な事は更になし。まことや後に打頼む、父親のある者さへ

も、まづ母親に離れぬるは、いとあはれなるものなるを、ましてや是は此後に、力と頼むは人の、心を惱し給ひし君。そのかたぐが磯菜の事を、聞き給ひなば我知らぬ、怨も受けん彼方此方へ、心のおかるゝ事もあらん。まことの御子と思召し、情をかけて其方の、情はかけて給はるな。わが身の上をつくくと、思ふに女といふものは、身に應ぜざる御方と、縁を結べばそれよりして、思ひの外の物思ひを、添へて悲しき事のあり。返すくもあだくしき、事は離れて後見を、して給はれ」ト心安う、思ひし様に苦しき中にも、笑ひを含み言ひければ、光氏却つて形を正し、「我は愚の生ながら、年長けたれば道をも知れり。むかし廓に遊びたる、そのすき心のまだありと、思ひて言ふこそ恨なれ。よし／＼遂にはわが誠も、おのづから現るべし、心長く見たまへ」ト、不興氣なれば千鳥は差寄り、「磯菜様を久しぶりて、あなたが御覽なされたら、御心が變らうかと、阿古木様があの方に、御苦勞なさるも御道理。私が是へ上り、驚いたのは磯菜様、はや物々しくならせられ、その美しさ清らかさ、御噂ばかりでまだ嵯峨の、内君様へは御目見を、致した事はなけれども、恐らく夫にも劣るまいと、思はると御人柄。阿古木様の只今も、仰の通に御素性、正しき方の御胤と、御教訓ありし故か、お行儀正しく御手は素より、御繪までを能く遊され、その上に御孝行、お腹を摩り御足をひねり、晝夜御側の御

介抱は、私どもが如何様に、心を盡して仕へても、彼方には及びもない。いづれへ御縁が定るとも、御行末は榮えたまひ、目出たき御身になりたまはんと、とりふく申して居ります」ト物語るうち日は暮れぬ。外の方は暗うなり、内は燈火ほのかにて、かの葭屏風より透徹るを、磯菜も若しや居るやらんと、光氏やをら進み寄り、つらく透し見給ふに、かの幽なる燈火に、顔を背けし阿古木の様、いとをかしけなる黒髪を、華やかに削ぎたるが、繪に描きたらん様に見え、美しきが猶あはれなり。後の方に寄居たるぞ、かの磯菜ならんかし、頬杖ついて物悲しと、おほえたる様なるが、何となう清らかにて、髪のかより衣紋つき、むかしの禿姿に引かへ、いと嬋妍に氣高きものから、さすが多くの人馴れし、化粧もしるく愛敬づき、親は答と言ひしかど、はや盛ならんと見ゆ。これより我子に等しき娘と、床しう思せどかの阿古木が、思ひ過して云ひたる事の、心に浮みて詞も懸けず、靜に坐して居給ふ中に、惱烈しくなりたりけん、阿古木はしばく吐息を吐き、「このいと苦しき有様を、見せ奉るも恐多し。はやく還らせ給へ」とて、磯菜に搔伏せられたりけり。光氏は猶立ちもやらず、「たましく來りしその效に、快といふならば、なんほう嬉しかるべきを、心苦しき事を聞く。いかなる心地するやらん」ト、覗き給ふ氣色なれば、阿古木は夜著を引被ぎ、「いと怖しき姿ぞや。亂れ心地に今は早、此世

の名残と思ふ折、君の渡らせ給へるは、實に深き縁なりと、思ひ取りて少しなりと、磯菜の事を聞えしに、いと頼もしき仰を受け、心弛みし故ならん、ありしより猶身も弱り、物聞ゆるもむづかし」ト、言ふのもいと苦しけなれば、光氏は立上り、「おのれ齡は積みぬれど、たゞ子は二人あるのみにて、夫さへ一人はいと遠く、隔てて住めば淋しきに、慰め草を得たりしと、磯菜にも能く我心を、言ひ知らせ給へ」など、聞え置きて歸り給ひぬ。それより屢人をして、訪ひ給ひしが七八日、ありて阿古木は失せにけり。又他には頼もしき、人も無ければ萬の事、光氏が取賄ひ、それづくに言付けて、まづ彼所に人を遣り、おのれもある夜密に行き、まづ磯菜が愁傷を、察し入る由言入れさせ、様子を窺ひ見たまふに、さまでに此所は廣からぬ、住居なれども奥まりたる、一間に磯菜は引籠り、泣くづほれたる傍へ、腰元女が差寄つて、光氏君の御出と、仰の趣傳へければ、「たゞ何事も覺えずと、申してたべ」ト顔をも得上げず。光氏は之を聞き、世に亡母の某へ、言残したる事もあり、されば今より隔なく、思ひ給はど嬉しくなん」ト、聞えたまひて人々を、御前に召集め、まづ定まりし野邊送の、事は更なり後々の、事まで細に命じ給ひ、さて阿古木の遺骸は、桂川の邊なる、久遠寺に母渦浪の、石塔のありければ、その傍にかくしくれよと、豫ての願を千鳥が聞置き、しかじ

が聞えあけければ、その望に任せられ、立歸らせ給ひけるが、正しく従姉にあんなれば、三日の間は引籠り、それとはなしに精進にて、經など打誦み居給ひけり。

斯くて後に光氏の、つくづくと思ふ様、それ君子は其罪を、惡むのみにて其人を、惡まずといふ本文あり。心執ねく頑しき、阿古木が性にてありしかど、世に亡き人は殊更に、憎むべき謂もなく、其子には猶罪もなし、千鳥がいひしに違ひなく、磯菜は眞の孝子にて、才も勝れたらんには、取立てて猶よき人に、なさんと思してかの住居へ、まづ召仕ふ女どもを、多く送りて今までよりも、賑しくなし給ひ、その才を試んと、文など送り給へども、いと羞しとて腰元の、女に返事を書かせければ、光氏は心いられ、さきつ年朝霧に、初めて筆を執らせしも、千鳥が兎角嘯りし、故にてあれば彼こそ宜けれと、密に招きて斯うくと、事の由をさよやき置き、雪霰搔亂れ、風凄じく荒るゝ日に、磯菜へ又使あり、

歸り來やかひなき人のたま霞

折にあひたる空色の、打曇りたる様なる紙に、まだうらわかき人の目に、とどまるばかりに心を用ひ、御手の様も常とは變り、いと安らかに書きたまへり。磯菜は母に別れし悲しさ、忘るるとにはあらざれど、やうく此頃は、少し心も靜まりし、折からなれば御文を、目もあや

につくづく、眺めながらに御返は、妾には聞えにくし、誰を書きてよと見廻す、此方に侍る千鳥が差出で、「光氏が私へ、此頃御意遊ばすは、若しや磯菜をわが側に、使ふ事もあらうかと、阿古木も案じて遺言する、又世の人も疑ひて、居るその處を引違へ、心濟く彼を守立て、ゆくは室町御所へ、差上げんと思つて居る、手はどうぢや、琴は弾くかと、御懇に御噂のそれゆる度々御音信、御代筆ばかりでは、あなたに本意なく思されん。今日は是非々々御直にト、そのかし聞ゆれば、俱に附添ふ女子ども、「千鳥が申上げし通り、斯くまで厚き御志いと忝なき事なり」ト、料紙硯を取來り、勧められてせん方なく、母の忌中のうちなれば、華やかならぬ芳しき、紙を取上げ打案じ、

消えば消えよわが身それとも知らぬよに

濃きと薄きと墨付を、書きまぎらしておもはゆけに、傍に差置けば、千鳥は巻いて文箱に納め、御使にぞ渡しける。

室町將軍義尙公、御眼の惱は今年となり、いよくさわやぎ給ひながら、兎に角に御心地は、常の様に在しませず、打臥したまふ程にもあらねば、光氏君を常に召しあり、參りたまひて世の中の、事なんと隔なく、語ひたまふ其中は、義尙公の御機嫌も、いと麗しく見えたまへど、一

人籠りて居たまふ時は、久しく此世に在らんとも、思し給はず萬につけ、心細けの御有様は、側目にもしるければ、龍田の前を初めとして、御側に侍る人々、心を痛め居たりしが、義尙はいよいよ病の、烈しくなりし故ならん、更に世を思ひ離れ、かねての心構の如く、弟春若に家を譲り、わが嫡子の香壽丸は、又それが世嗣とせんと、その催俄なり。富徴の前は驚きあわて、若き身といひ殊には又、さまでに重き病にあらず、本復近きに有るべしと、藤の方の生み給ひし、春若丸に家を譲るを、快からず思はれけん、止め給へど常々の、孝心厚きに引かへて、母の詞を義尙用ひず、同じ構の内ながら、引離れて住まはんと、急に別殿を營みて、春若丸を改めて、義植と名付けけるが、山名滅びて執権は、勝元のみにて有りければ、幼き者には故實を知る、傳役なくてはあるべからずと、赤松左衛門政則に、執権たるべき仰あり。政則は打驚き、「若き時だに賢き事も、侍らざりし不肖の身、いよく老の積り添ひ、かゝる大役思ひも寄らず」ト、承引く氣色なかりしかば、光氏も詞を添へ、唐土にては世の亂れを、厭ひて深き山に入り、跡を隠しよ人だにも、治まれる世に再び出で、白髪も恥ぢず仕へしを、實の聖といひ傳ふ。御身は未だ仕を辭したる、身にもあらぬに折角の、仰を背かば我儘と、却つて人に誹られん。謙退も折に依れ」ト、言諭し給ふにぞ、政則は争ひ負け、其年六十三にして、音川の相役たり。

且義植公はまだ幼く、ましましながら室町御所と、既に成らせ給ひければ、御臺所なくては叶はじと、とりぐ評議ありけるが、赤松太郎高直は、續々に子數多あり、光氏常に羨ましき、事に思し給ひしかば、是こそは宜からめと、柏之助が次に生れし、初花と呼なす女子、清らかにして若將軍と、年も似合の程なるにぞ、祖父政則が養女にせさせ、藤の方の例に倣ひ、ある雲客の御胤と披露し、二葉の上死去の後、退で散らざる中垣吳竹、その外數多仕へ馴れたる、女を添へて奉り、初花といふ名を改め、富徴の前の一字をかたどり、富世の前と申しけるが、まだ稚なくましますせば、義植公は好き遊び、相手を得たりと思したまひ、いと睦じく押並びて、在しましたる御有様、内裏雛に異ならず、目出度見えさせ給ひけり。めでたしく〜。

修紫田舎源氏第二十五編序

偽紫のなか／＼に、およばぬ筆に寫し繪も、いけぬ汀と近隣の、小女が歌ふも我身のう
 へに、よく相老の松の齡、幾萬代もかはらぬためし、鶴屋が梓に彫めて、をこがましくも
 九年、それは昔の志賀山風流、これも近江の石山に、綴りし源氏のおもかけにて、三ツイ
 の香の圖は、殊更に因あり。偕是編は秋好む、中宮に比たる、磯菜を懸想て義尙が、妾に
 ほしいとのぞまれて、水原がエイ／＼六條へ、えつちらおつちらわたられても、其意に隨
 せず義植へ、縁をさだんの日を撰み、送る荷物は何々ぞ、瑠璃の手筈に珊瑚の櫛笥、玉を
 のべたる長持の、長物語に手を盡せど、仕立ばえせぬ田舎織も、錦と見なす御取立を、願
 うて鶉の眞似鳥飛、天の岩戸の神樂月より、春の新板賣初て、とつばひとへに打かより、
 つもり／＼て是編は、第廿五の三番叟、菘の種蒔種彦が、ようがましくも彼歌の、詞をか
 りて、序めきたる事をこゝに記すになん。

二十五編 上

亡きたまあられの其後にも、光氏たびく文を通はせ、磯菜が返を取りて見るに、書誤らじと謹みて、書きたるなれば思ふ様には、筆のまはらぬ様ながら、自然と墨付うちあがり、文章氣高くとくなくしき、ことを省きて言ふべき義理は、能く聞ゆるにその才の、自らに現れければ、行末の頼もしく、おのれ多くの子を持たで、淋しかりし慰めに、好き者得たりと思したまひ、折に人目を忍び、彼所へ渡らせ給へども、磯菜は母の思ひ過ぐして、言ひし事ども聞取りて、若し光氏の恥しき、事を宣ひ出でんかと、思ふ故にや何時ととも、一間に隠れて對面せず、千鳥を初め光氏が、此所へ送りし腰元女、更科十六宵などいふ、浮世に慣れし者どもが、「是よりしては父君とも、頼みたまへる御方に、恥らひたまふ事はなし。斯くては御身の爲ならず」と、さまざまに勸むれど、磯菜は更に聽入れず、皆々も慰めわび、光氏の前に出で、あからさまにも言ひ難く、「磯菜様は此程より、御癪氣にてすやくくと、御寝りて在する」など、取繕へば光氏笑ひて、「阿古木が我に言ひ置きし、事どももあんなれば、是より後は隔なく、思はど嬉しかる

べしと、磯菜が眠さめて後、傳へよ「なんと言流し、本意なげに立歸り、給へる様を腰元ども、見送りて吐息をつき、御腹を御立ち遊ばして、最早御出は有るまい」など、案ずるには引かへて、いとまめやかに懇に、猶音づれて物詣の、序などに差覗き、給へど磯菜は心を置き、ほのかに聲を聞かするさへ、たまさかなれば光氏も、せん方盡きて千鳥を招き、磯菜が心をうら問はんと、思す折節花の御所、若木に移るひどきにて、暇なければ其儘に、磯菜の事は捨置き

て、兎角する間に春に移りぬ。

作者まうす 以下は榊の巻の中なる、桐壺帝崩御の條なり。應仁の亂は義正在世なるが故

に、わざと前には書漏して、其事を茲に收む。

義正公は去年よりして、御心地例ならざりけるが、睦月になりてはいと重く在します。世の中惜み聞えぬ人なし。義尙も思し歎き、急ぎ東山へ渡りたまへり。義正は病疲れ、心地や弱くなりにけん、常よりも猶義植の、行末の事どもを、返すくも聞えたまひ、さて次には光氏の、御身の上の事に移り、「我若し此世を去るとても、在りしに變らず光氏と、睦まじやかに隔なく、大事小事に關らず、何事をも後見と、思ひて語合ひたまへ。彼は年の程よりも、思慮ある生にあんなれば、足利の世を譲るとも、をさくく憚あるまじう、必ず人に敬はると、相ある者と

思ふ故、國司ともなさずして、嗟峨に住まはせ置きつるは、事有る時は義植の、力とさせん爲にてあり。必ずともわが心、違へさせ給ふな」ト、なほ哀れなる御遺言も、多かりけれど人の知る、事にも有らねばおしあてに、その片端を記すだに、いとをこがましき事にこそ。義尙公はいと悲しう、「仰をいかで背くべき、御心に懸けたまはず、御養生こそ願はしけれ」ト、返すくも宣へば、義正は打笑みて、「オ、嬉し頼もしよ。最早此所には用のなし、疾く立戻り義植に、心を添へて室町の、館を守るが肝要ぞ」ト、宣ひ捨てて其後は、更に語もあらざれば、御心に逆はじと、急ぎ還らせ給ふにも、なほ御顔の目に残り、跡に心のひかされて、夢路を辿る御心なるべし。

義植も今日俱にと、思召し給ひしが、騒がしきにより日をかへて、光氏君と渡り給へり。はや足利の世を治め、給ふ故にや御年の、程よりはおとなび給ひ、美しき御様にて、今は離れて住み給へば、いと戀しさの積りく、嬉しながらに窶れさせ、給へるが又悲しくて、見上げ給ひし御氣色、いと哀れなりければ、藤の方は涙に沈み、兎角の事も宣はず。義正も此體を見て、さまざまに心亂れ、思ふ事ども多けれど、氣を取直して萬の事を、義植に聞え知らせ、光氏にもなほ義植の、後見なして家を守り、世を治めさすべき事ども、かすく宣ふ其中に、夜も更けければ又こそとて、名残惜しけに出で給ひぬ。

匏かぬ程にてしをくと、還らせ給ふを義正も、あはれと思し病の床より、つくづく見送り給ひけり。

富徴の前も参り給はん、催しはありながら、斯く藤の方御側に、添ひおはするに心おかれ、ためらひ給ふ其中に、さまで激しく惱み給ふ、體にもあらでかくれ給ひぬ。足を空に思ひ惑ふ、人多かるその中に、藤の方光氏君、まして勝れて人心も、覺えぬまでに歎き沈み、七日々々の御わざなど、まめくしく執行ひ、給へるはさあるべき、道理ながら世の人の、哀と見奉りけり。

四十九日に當らせ給ふ、其日までは在すが如く、御座所を設け置き、皆打集ひて附従ひ、それ過ぎぬればちりくりに、出行くが此頃の、世の習慣にてありけるが、夢の間に七七日の、御法筈も過ぎしかば、皆他々へと出行きぬ。折しも空の打曇り、晴ると間のなき胸の中、藤の方はとりわけて、富徴の前の心をも、能く知り給へば此後に、住み憂き事の出来んかと、悲しき事限りなく、義正公の睦まじう、語り聞え給ひたる、御面影を忘れかね、館を離れ難けれど、斯くて何時まで在すべき、例ならざれば音川の、屋敷へ行かんと出で給ふ。御迎へには勝元自身

に、参りて表に控へたり。雨降出でて風烈しう、空の氣色の物凄さ、更に春ともおもほえず。光氏も來あひ給ひ、むかしの事ども語出で、哀れなる事多けれど、廻らぬ筆に書續けんは、いといと難くて皆省きつ、されば殊に義正の、寵愛厚き藤の方、片時も傍を放ち給はず、この年頃東山に、住馴れし身にありければ、今は却つて音川の、屋敷は旅の心地せられ、其夜は更に日も合はず、明し給ひけりとなん。

かよる後は世の中に、今めかき事もなく、打濕りて静なり。光氏は世の定めに倍し、百日の喪に籠り、廟參の外他出せず、程なく忌は解けながら、猶深く身を慎み、忍び歩きは思ひ絶え、たゞ明石へ使を立て、父君かくれ給ひし事を、その當座に告げしのみ、その外へは文だにも、書交し給はねば、心もとなく其所所に、案じ侘びつゝ人知れず、心を痛むる者多かり。それにつけてはかの磯菜が、腰元使の女まで、更に心の安からず、その故を如何にといふに、初の程は光氏君、親めきて磯菜を兎角、あつかひ給ふは人ぎきの、宜からん爲にてその恩に、懐きて磯菜が心も解けん、しかして後は光氏の、通ひ所と此所もなり、次第々々に賑しき、館とならんと思ひしには、うつてかはりて磯菜は兎角、物恥しつゝ光氏の、渡らせ給へば一間に隠れ、姿を見せしことも無し、斯くては君の思捨て、給ふならんと案ずるうちに、かよる世の騒

出来、更に音づれ給はねば、いと寂しく心細き、事のみまさるに頼なく、次第々々に暇を乞ひ、おほかた此家を散行きて、僅に十六宵、更級、千鳥、その外に二三人、こよろばせ有る者どものみ、やうくに残り留り、阿古木の佛事を懇に、せさせ給へる光氏の、有難き御志を、語合ひつゝ喜びて、なほまめやかに仕ふれども、斯く人少なになり行きし、折も折とて秋も暮れ、いとど寂しき冬の空、心のしめる故ならん、近くに琴を調ふるは、耳にも入らず却つて遠き、野寺の鐘の聲々は、胸に響きて磯菜は兎角、袖の干る間はなかりけり。實にそれも道理なり、同じ親といふ中にも、俱に靡の憂き勤、はるく伊勢へ下るにも、誘はれつゝ片時の、間も立離れざりし身が、冥途の旅には捨てられて、是より頼む木の下に、雨もろともにわが浮名の、漏りもやせんと光氏の、底の心を疑へば、其方にも身は任せ難く、さればとて外にたよる、人もなければさまぐに、思ひ煩ひ悲しさの、更に類ぞなかりける。斯くてある日の事なるが、表に乗物昇据ゑさせ、内より出づるは一人の老女、案内を乞ひて御附の、女中に對面したきよし、言入れて控ゆれば、何かは知らねど座敷へ通し、千鳥更科立出でて、何の御用と尋ぬるに、まづ彼の老女禮儀を述べ、「私事は水原と申し、久しく御所に仕ふる者、御忌解の其後にも、兎に角に義尙君、引籠りてのみ在するとて、富徴様の御案じ遊ばし、御勤めなさ

れてやうくと、桂川へ忍びの御遊山、その途すがら此方の姫上、磯菜様を御覽遊ばし、御心に叶ひしや、あの女を側仕に、参らせよとある密の仰、それ故御跡に見え隠れ、人をつけて窺はするに、久遠寺へ御廟参、これ幸ひとお歸りの、其後に住僧に、御名をはじめ萬の事、委しく尋ねさせたる處、なみくならぬ御方の、忘形見に在するが、御親なども今はなく、光氏君の後見を、遊ばして此所に、御住ひとの物語、義尙公聞召され、弟君へはうちつけに、斯うくと宣ひかね、包みては在すれど、いつくしかりし御形、忘れ難う思召すか、折に觸れての御噂、富徴の前も其事を、聞召されて私を、今日御使は極密々々。御前方まで伺ひまするは、光氏君の御手懸けられしと、いふ様な事ではないか。若し夫なれば取繕ひ、義尙公には又申上げ様も御座りませう、包まず御話し遊ばしてト、聞いて千鳥は會釋なし、「仰の通り光氏君、萬の事を引受け給ひ、去年までは折々に、みづから渡らせ給ひしかど、磯菜様は一度も、御對面も遊ばされず。されども君は御懇に、はや年頃にもなりし磯菜、たとへば人が心懸け、言寄るとてもみだらな事の、無い様に氣を付けよとて、私どもへ御教訓。實の御子の御取扱ひ、御手懸けられしといふ様な、事はゆめくなくれども、御宮仕のその程はト言ひかけて更科と、顔見合すれば水原は點き、「それなればまづ何となく、水原が参りて磯菜様を、御所へ御上げ遊

ばす様に、申した由を折を見合せ、仰上げられ下されてト、なほこまなくと言置きて、立歸りたりければ、千鳥は暫し打案じ、「思懸なき御所の御使、磯菜様に申したとて、又例の顔打扱め、御答はなされまい。光氏君へというた處が、御忌にて籠らせ給ひし、其後は御出もなし。私は今から嵯峨へ上り、御目通の上この様子を、申上げて置かう程に、磯菜様が御尋ねなら、宜い様に更科どの、申して置いて下されト、いそがはしけに出行きけり。

作者まうす 富徴の前藤の方等は院號にかへて書くべき例なれども、今までおほえ給ひし名を新になさばお子様方の、かへつて讀みにくうおほさんかと其儘に記す。

東山のあき御殿へ、義尙公富徴の前、水無月はじめに移らせられ、藤の方は音川の、屋敷よりして室町の、むかし住馴れ給ひたる、館に移り給ひしが、今は御子の義植公、家を治め給ふにぞ、誰に憚る事もなく、紫の上もたびく、嵯峨より此所へ渡らせられ、國助も出仕の歸りは、いつとても罷出で、是より願ひて國助の、妻の梓も御伽と、なづけてしばく御前を出で、浮世語のその序に、かの繼娘の紫が、嵯峨の館にときめくを、いと羨しくわが生みし、娘の運の拙きことを、夫とはなしに物によそへ、ほのめかしたりければ、藤の方は其心を、あはれと思し且は又、姪ならざるその故に、胤はひとつの國助が、ほかの娘は捨置くと、思はれんも

恥しよ、まづ數多ある娘どもを、呼寄せて見給ふに、その末の子の薄雪と、呼べるが顔もいと清く、とりまはしも賢けに、まだわらはべの姿残り、いと愛らしく義植と、同じ程なる年なれば、せめてはこの薄雪を、わが傍に据置きて、ゆく／＼は義植の、側室となさんと遊佐夫婦に、この由を聞え給ひ、呼迎へられたるは、今年文月のはじめなり。秋暮れ冬もなかばごろ、ある日光氏申したき、事のありとて渡り給へり。この折に藤の方は、小春の空のうらよかなる、庭の景色を眺めんとて、人丸の社のこなたに、さる年造り設けられし、茶屋に遊びて在しければ、そのよし光氏聞き給ひ、さあらばとて司を引連れ、彼所に行きてまめやかに、機嫌を伺ひ茶を打飲み、この所は築山の、崖造りにてありければ、泉水を見下しながら、何か心に打案じ、暫しは物も宣はず。藤の方は髪を削ぎ、既に姿をかへ給ひ、光氏も年加はり、心の静まる様なれば、近頃は杉生も、疑解けて中を隔てず。されば今は心安く、藤の方は光氏の、物おもはしき氣色を悟り、傍の人をおほかた遠ざけ、「何事ありての御出か、早く様子を聞かせて」ト、言ふに光氏近々と、前に進みて聲を潛め、阿古木が事の始終を、落もなく聞え給ひ、「さてそれにつき密に申上げたき仔細はかの磯菜を、桂川にて義尙公、圖らずも見そめられ、召仕はれたき其由を、富徴の前も聞召され、水原が使に來りしと、彼所へ某附置きし、千鳥といへる腰

元女、嵯峨へ來りて密に告げつ。因りて思ふに彼が母、阿古木が持ちし勅筆の、短冊を手に入れたため、我に心を懸けしを幸ひ、わりなき様にもてなして、かの短冊を得て後は、次第々々に遠ざかり、遂に磯菜が事に託け、伊勢へ下して置きつれば、その恨の心解けず、阿古木は果敢なく失せたるが、そのいまはに臨みし時、くれ／＼磯菜の事を頼めり。母はともあれ子は罪なく、殊には従姉違女なり、見捨つべき道理はなし。彼を守立て得させなば、草葉の蔭にてかの恨も、忘らんものと思ふから、まづ其儘に住ませ置き、伊勢より歸りし其後は、まだ一度も逢はざれど、文を送りてその才を、試たるがまだ二十に、足らはぬ年に比べては、恥かしからぬ返の文體、館の女のまじらひを、せさせたりとも恥かしからず。されば此度兄上の、望を幸ひ差上げん、とは思へども難儀なり、後日若しや遊女の生みし、娘なりといふ事を、富徴の前も聞え給はど、素性賤き者なるを、夫ともいはず進ませたる、罪はおのれが身に及ばん。とありて今更斯うくと、聞上げなば光氏が、好みにて磯菜を惜む。偽なりと思されんか。つくづく思ひ廻らすに、かの水原より傳へし仰を、聞違へたる體にもてなし、この御所へ奉らん。義植公の御年には、七ツか八ツかまさりし磯菜、御伽にし給ふのみならば、更に障はあるべからず。紫にも此事を、申聞かせたりしかば、室町へ上りし時の、好き物語の相手なり、嬉し

き事やと彼も言ひつ。さりながらまづ孰とも、御心次第に定めん」ト、聞え給へば藤の方、「いと能く御心つかれたり、義尙君の思さん程も、憚なきにはあらざれど、知らず顔にて差上げたまへ。富世の前もまだ幼く、飯事遊びの様なれば、御側に少しは物心、知れる人の侍るも、御慰めには好かるべし。義尙公の不圖御目に、とまりし故に御使を、立てられたるもひと花にて、父君うせさせ給ひてより、經を讀み佛を拜み、行ひがちにて在すれば、言葉背きて義植に、磯菜を送りしなどいふ、深き咎はよもあらじ」ト、心安けに宣ふにぞ、「さあらば磯菜に更科、十六宵、二人の女を差添へて、近くにこれへ送るべし。まづ御側に差置かれ、萬の事を教へられ、其後に折を計り、義植公に差上げて、給はるべし」ト返すぐ、頼置きて暇を告げ、夕暮近く嵯峨へ歸り、門に入らんとする時に、不圖傍を顧れば、用ありけに乗物を、見懸けて這寄る武士のあり、何者なるかと目をとむるに、調太夫なりければ、駕籠を停めさせ近く呼寄せ、都はいよく治りて、山名の餘類會てなし。さる故に須磨を引取り、歸來たれと告遣りしは、夏の央とおほえしが、何として斯く暇取りし」ト、仰にいよく畏まり、「命に隨ひ須磨を立出で、直様上る筈の處、若し明石より申上げたき、事どもあらば好き序と、かの這渡る程なれば、宗入館へ赴きて、その由申入れしかば、入道大きに喜びて、何か都の物語、思はず日を

經り月を重ね、只今まで彼所に逗留。朝霧様の御文」ト差出して猶摺寄り、それにも記し給ひしならんが、眞柴も此頃髪を剃り、宗入もろとも三昧堂に、籠りて勤行怠なし。それより聞上ぐべきは、何かは知らず御用有りて、千鳥といへる腰元を、去年よりこれへ留置かれ、未だに還し給はぬ由、少しも早く」ト言ひかくるを、「オ、宜し」ト光氏點き、「還してくれと朝霧が、言ひしも道理都の噂、聞きたき事も多かるべし。さあらんと思ひし故、近きに磯菜を室町へ、まるらする其時の、傳には省きたり。是は汝の知らざる事、追つてゆるく物語らん。まづ供せよ」ト門内へ、引連れ入らせ給ひけり。
 藤の方はかの國助が、末の娘の薄雪を、義植に送らんと、かしづき騒ぎ給ひしが、磯菜が事の始末を聞き、薄雪は紫の、出世を嫉む梓の子なり、殊にはまた國助も、糺へ貢の怠りし、罪を咎め給はねど、快からず光氏の、思さん事も計り難く、兎角につけて斯うくとは、言出でかねて光氏が、かの薄雪を見知らぬを、幸ひとしておはせし時も、側に在りしが其事は、まづ包置き快く、磯菜の事を受合ひたまひ、光氏が送越すも、待たで迎ひの人を遣り、磯菜を呼びて見たまふに、實に人柄のうちあがり、國司の娘にも、劣るまじう年もはや、おとなしき程なりければ、いと嬉しくて朝な夕な、傍に侍らせ、義植君へ宮仕の、事ども聞え給ひしが、

藤の方のいと優しく、あつかひ給ふに心や解けけん、例の深く物恥する、氣色に引かへ兎も角も、仰は背き侍らじと、身を打任せ頼みしかば、さあらばとて其氣色、さきに在りし薄雪が、事は延して磯菜が館へ、まゐりの事を藤の方、心に入れて催したまへり。
 落標の巻をはり。蓬生、關屋のおも影はすでに前に記したれば、これより繪合の巻に移る。

二十五編 下

はかむしき後見の、磯菜に無きを光氏は、心許なくまづ嵯峨の、館に迎へ室町に、まゐらせんとも思ひしかど、兄義尙への聞えを憚り、此度は思し止り、藤の方に任せ置き、たゞ知らず顔にもてなせど、大方の事どもは、とりもちて何かにつけ、親めき聞え給ひけり。
 水原この由傳聞き、大に驚き義尙に、斯様々と告げければ、おのれが心を懸けたるを、光氏が横取して、義植に送れるを、いと口惜しと義尙は、思ひながらに表立ち、言争はど他聞の、悪かるべしと心にをさめ、音づれもせず在せしが、猶も密に詳しき様子、聞合せ給ひけん、藤の方より磯菜を送り、遣したまふ其日になりて、義尙わざ／＼使を立て、鏡、臺榭箱、亂箱、匂袋、匂玉懸香種々の炷物を、よのつねならぬ珍しき、壺に納め箱に入れ、又と類のなき様に、廣き座敷の外までも、いと遠く匂ふばかり、心殊に調へられ、持船とて今の世に、釣臺といふ物の類に、積重ねしは光氏君の、見たまふならんと豫てより、思設けし故なるべし。
 日柄も好くて珍しき、人を今日しも義植に、進らせたまふと確に聞けり。こは、錢の印にこそ

と、仰を傳へ御文を渡し、使は表に控へけり。

光氏もその折に、此所へ渡らせ給ふにぞ、斯うくと更科が、披露に及べばまづ櫛の、箱を取りて見たまふに、いと細やかに媚きて、珍しき様なりければ、つくくと思ひ廻らすに、おのれ播磨へ下りしは、かの宗入を押へのため、とは言ひながらひとつには、富徴の前の御振舞、心に叶はず世の中を、憂しと思ひし故にてあり。その心に比ぶれば、兄義尙もいと若きに、弟を子として家を譲り、今物静に在するは、世を恨めしと思したる、事のありしも圖り難し、御慰めになる人は、勧めてなりと此方より、進らすべきを彼方より、仰越されし御志を、遂げさせ申さず今かよる、たがひめ有るを如何に思して、わざとがましくこの品々、贈越し給ひしならん。我若し兄にてかよる事ども、弟がなさば捨置かじ。富徴の前の若し磯菜が、三筋町にて生育ちしを、聞出し給はんかと、思ひ過しの過より、よしなき事を仕出しよ。都を某出立つを、止め給はぬ其時は、頼もしからずと兄君を、恨みし事のなきにもあらねど、また其後に父上を、言宥められ富徴の前の、仰に背きて再び京へ、呼戻されし御志に、初め恨みしあやまりを、後悔なしてつかふる身が、返すくもいとほしき、事をなしよとさまぐくに、思ひ亂れて暫しが間、打ながめ給ひしが、この返は磯菜より、如何様に聞ゆるならん、又御文はいかどなど、問

ひ給へども御心を、計りかねてや更級が、袖に隠して義尙の、文は御前に取出です。此日も磯菜は次の間に、隠れて此所へ出でざれば、かの麗しき櫛箱を、御目に懸くるに託けて、更級は此方へ來り、此事詳しく告げまらせ、御文を差出せど、惱しけにて磯菜は筆を、執るべき體の會てなし。更級猶も側へ寄り、かく有難き御志を、嬉しと思し給はずや。御返なくては御使に、言ふべき詞も侍らずト、十六夜も詞を添へ、勧め煩ひ聞ゆる氣色、此方へ漏れて光氏も、隔の襖に身を措寄せ、腰元どもが言ふ如く、たどに見過したまはんは、いと有るまじき事にてあり、懶く思さばたど返の、知るよばかりも聞えさせ、たまへと宣ふ御聲に、なほ恥しく差俯き、不圖櫛箱を見るにつけ、伊勢路へ下るその時に、文に卷込め光氏より、贈りし櫛箱を喜びし、幼、心も唯今の、事の様に思はれて、其折には母上の、いと健かに在せしなど、取集めたる悲さに、兎角の事も覺えねど、せん方たなくて書きたる返は、言短にてありしなるべし。御使には藤の方より、さまぐくの賜物あり。光氏は磯菜の返、いかなる事をか書きたると、床しうは思せしかど、打出ては宣はず、又繰返して心の中に、義尙君ははや三十路を、越え給ひしかど、優かたなる、御顔にて御年より、いと若やかに見え給へば、この磯菜とは宜き程なる、御間にて似氣なからず、夫をまだ稚き、義植公に引違へ、何の故にか送りしと、人知ら

す此光氏を、憎きものとや思さんかと、胸潰るれど今日となり、思ひ止らん事にしも、あらねばそれかれ言置きて、館へ歸り給ひけり。

この磯菜が六條に、假住をなしし時、腰元使に好き女を、多く抱へて光氏より、送遣し給ひしが、既に前にも言ふ如く、頼みがたなき體を見て、皆ちりぐになりたるも、かよる磯菜が幸を、聞くより又も傳手を求め、大方此所に参り集ひ、いつきかしづきまばしきまで、粧ひ立てしを藤の方、つくぐと打ちながめ、あはれ阿古木の世に在らば、さぞ嬉しとや思はんを、果敢なく過ぎしいとほしさと、逢ひも見もせず今は早、世になき人の事をさへ、情深き心より、思遣りて人知れず、涙に暮れて居たりしが、氣を取直して杉生司、二人を傍近く呼び、「磯菜にかしづき静やかに、跡より参れ」ト云置きて、其身は先に御所へ起き、義植の前に出で、はや足利の主なれば、わが子ながらも禮儀厚く、「豫ても申上げたる通り、いと珍しき御伽の、おしつけ参り侍るなり。是ははや童と、言ふべき年にもあらず、根もない事におむづかり、笑はれ給ひそ行儀正しく、御目見仰付けられて」ト、聞召して義植は、常よりもいと美しく、小袖の衣紋搔合せ、心づかひし給ふ様、御年の程よりは、いみじうおとなび戲ばみ給へり。

兎角の事に暇どりけん、甚く夜更けて参りたる、磯菜の様を義植君、扇を顔に押當てて、骨の

隙より見たまふに、かほそき生なるが上、打恥らひて身を縮め、かしこまりたる其姿、小やかにてありければ、おとなは伽に恥しうや、あらんと初め御心に、案じたるには引かへて、をかしの人やと思しけり。

富世の前はまだ幼く、渡らせ給へど内君と、既に定り給ひければ、先頃まで富世の前、御座所に住みたまひ、磯菜は是よりそのむかし、桂樹が部屋となしよ、匂の局を賜りて、まめやかに仕へしが、兎に角に義植は、この日頃御覽じ馴れたる、富世の前は心安う、磯菜は人柄うちしめり、恥しけなる其上に、光氏君の子の如く、あつかひ給ふに御心置かれ、侮りにくと思しければ、夜の御伽には内君と、ひとしく参りて御身近く、侍るからに馴れ給ひし、様には見ゆれど打解けたる、童遊に晝などは、匂の局へかりそめにも、渡らせたまひし事はなく、富世の前の方にのみ、いと睦しく在しけり。

かよる程に年かはりぬ。稚きより義植は、繪を好ませ給ひけるが、すきこそ物の上手なれと、諺にも言ふ如く、はや此頃は繪師にも恥ぢず、いと好く描かせ給ひけるを、かの更級十六夜は、これ幸ひと磯菜を勧め、さまざまの繪をいとをかしう、描かせて御覽に入れければ、果して是に御心移り、匂の局に來り給ひ、繪を書交して遊びつよ、磯菜の様を見給ふに、この年頃

近習の武士が、いと拙き繪を描くさへも、興あるものと人より親しく、思したりしに是は猶遙に優りて描きし繪も、描ける姿も麗しく、筆うち休らひ机に凭れ、いと恥しげに打笑みたるに、御心や染みたりけん、是よりしばし渡らせ給ひ、今までよりも御思の、まされる様に見えたるを、富世の前はまだ幼く、渡らせ給へば心もとめず、却つて御側に附従ふ、吳竹中垣心を痛め、斯様々と赤松の館に行きて告げければ、政則高直これを聞き、光氏君のとりもちて、送られたまふ由なれど、かの磯菜はその素性、確ならざる者とやらん、富世の前とその女と、威を争ふは事をかし、何條彼に劣らんやと、勝れたる繪の上手どもを、おのれが屋敷に呼集め、「こは故ありて富世の前に、進らする繪にあんなれば、心を凝し、氣を練りて、又無き様に仕れ」ト、くれぐれも言ひこらし、又類なく麗しき、紙どもを撰調へ、義植公はまだ幼く、渡らせ給へば御耳馴れし、昔々の物語を、描きたるこそ御目に留らめ、同じうはありふれたる、十二月の繪も正月萬歳、二月初午三月雛と、子供遊のはや言にも、言ひ古したる事を省き、珍らしき型もあらんと、さまざまの繪を描かせたり。

斯くふた所の傳ども、おのれくが主を思ひ、争ふ由を遊佐國助、仄に聞いてわが娘、薄雪をまるらする事は、暫く思ひ止り、義植君の御年の、加はり給はば藤の方、御詞を添へられて、

送遣し給ふべし、されば君も等閑に、捨置き給ふべからずと、月日のたつをぞ待居たる。

斯くてある日嵯峨の館へ、更級來りて御目見を、願ひたき由言入れければ、光氏頓て前に呼び、何の用ぞと問ひける時、更級少しにじり出で、「豫ても知召す通り、室町様は何よりも、繪を御好み遊す故、磯菜様がいろくの、繪を此頃おしたよめ、君の御覽に入れられしが、御心に叶ひしやら、しばし渡らせ給ふのを、誰が告げけん赤松御父子、聞及ばれて今上手の、畫工どもに言付けて、見馴れぬ様の事を撰り、詞をも面白く、書續けさせ富世様へ、それを密にまゐらせられ、君の御出の其時は、一寸御目に觸れながら、あわてた様に押隠し、御側の女中がくちぐちに、我君様の御覽に入れると、磯菜様の御方へ、屹度お持ち遊ばします、彼方は御繪がお上手なれば、お笑草になるのは必定、めつたに御出し遊ばすなと、見せびらかしては御氣をもませ、意地くね悪う申すよし、富世様はまだ何にも、御存じないに悪智恵を、かふが憎さに宜い御智恵を、お借り申しに參りました」ト、聞いて光氏打笑ひ、「高直はまだ予が年に、多くも越えねば子の愛に、溺るよよりしてさる事も、なさんが夫を止めもせず、心を合せて取るにも足らぬ、磯菜を嫉む政則こそ、さて大人氣なき振舞なれ。さばかりの繪を調へながら、たやすくも御覽に入れず、君を惱し參らすは、いと目覺しき事にてあり。宜しく、我もそれに劣らぬ、

繪を數多く磯菜へ送り、彼より君の御慰みに、參らすべし」ト更級を、まづ歸し遣りたまひ、言の葉犬吉などに言付け、「古き繪は是にあり、新しき繪は夫にあり」ト、御厨子文車旅篋、總て繪どもを入置きし、調度を出させ押開き、紫と諸共に、「いづれが御目にとまるべき、今様なるこそ好からめ」ト、撰出し給ふ中に、かの長恨歌王昭君の、二卷の繪は面白く、哀れなれども長恨歌は、馬嵬が原にて楊貴妃の、失はれたる事を記載せ、昭君は胡國へ、圖らず送遣らるゝを、打歎きたる物語、事の初に思はしと、此二卷は撰殘し、此度は奉らず。かの須磨明石の旅日記の、箱をも取出でこの序に、見せさせ給へば紫は、數の繪どもを脇へ押遣り、つらつらと見給ふに、所々に繪をかき加へ、哀れさ言はん方もなし。たとへばこの光氏君の、御名をだにも聞知らぬ、人に初て見せたりとも、心有らん者ならば、更に涙は惜むまじ。ましてやはその夜の夢の、さむる折なき心には、昔の事を繰返し、悲しう思出でられて、「など浦住居の御時に、此繪を送りて賜らぬ。須磨や明石を君もろとも、眺めて暮す思して、少しは心の慰めに、なりもせんに」ト今日までも、見せ給はざる怨のかすく、聞えければ光氏も、あはれと屢目を押拭ひ、「さう宣ふも道理ながら、まだ其頃は合戦止まず、心に暇無かりし故、かき捨てしまゝ取出でず、都へ歸りし其後も、事に紛れて忘れたり。藤の御方ばかりには、御覽に入れて

も障なし。かき誤りて醜しきは、取除けたまへ」ト是をもまた、それかこれかと一綴づつ、浦の景色山の有様、さながら其所に遊ぶが如く、さやかに見ゆるを撰出でたまふ。その序にもかの明石の、家居の様の目にとまり、いかになしと心に浮むは、忘るゝ隙の無き故ならんか。斯く繪どもを光氏の、集めらるゝと傳聞き、政則いとど心を盡し、繪卷物の軸表紙、紐の飾に至るまで、いよく目立ちて珍しきを、さまざまに調へたり。頃は彌生の十日の程、空もいと麗かにて、人の心も暢やかに、物面白き折といひ、上巳は過ぎて端午には、遙に遠く儀式の日の、ひまにてあれば室町は、物靜にて斯様の事に、打かよらひつと遊び暮し、彼方此方とさまざま多かり。磯菜は元より自らも、繪を好みて能く描けば、人にあつらへ描かするにも、それづく心に用ひ、衣服調度を初とし、家居の様もむかしくの、物語にはその時世に、似つかはしけなる事を撰ませ、富世の前はまだ幼く、まします故にその御目に、とまる事を専として、今の浮世の流行物、新しく珍らしき、事の限りを傳の、女どもが繪師に言付け、いと美しく描かせければ、眞少く偽は、多きに似たれどかの古代を、寫しよよりも華やかなり。藤の方もむかしより、繪は嗜きたまふ事なれば、見捨て難く思しけん、何となく朝夕の、看經さへ怠りたまひ、義植の側にのみ、附添ひて在しまし、かの女どもが繪

を打廣げ、言争ふ口合の、いとをかしきを聞召し、「花も盛の折なるに、夫をば何とも言はずして、繪の善悪を論ずるを、其方達が此頃の、遊とするこそいとをかし。とてもものに右左と、方を分けなば一入に、面白からん」ト宣へば、御側に居合せし、更級吳竹詞を揃へ、「方を別けるとおつしやるは、いかなる事に侍る」ト、伺ひ申せば藤の方、「それならばまづ自らの、女子どもを其方達の、代に此所で繪合の、まなびをして見せう程に、更級も吳竹も、主人よりして預り置く、繪巻物のその中にて、わけて好いのを持つておぢや」ト、取寄せ給ひて邊を眺め、「富世の前は右の方、吳竹の代は司、磯菜は左、杉生は更級の名代に、その外の女ども、思ひ思ひに二つに別れ、物語の意味、繪の善悪、遠慮無しに言うて見や」ト、仰に心得杉生司、それか是かと繪を見分け、まづ御伽草紙の出来はじめ、鉢かつぎ姫鹽賣文正、是を合せて言争ふ。右の方より出しよが、鉢かつぎなりければ、司は少し進出で、「寶を籠めて母御前の、戴かせ給ひたる、鉢の淺くは見給ふな、繼子繼母の教には、これに上こそ話はなし。かの後添の讒言を、實と父君思召し、更に罪無き鉢かつぎを、又歸來ぬ呪に、四ツ辻へこそ捨てられけれ。姫上途方に暮れたまひ、せん方涙もろともに、とある川へ身を投げた、身は沈む、鉢は浮いてぞ流れける。そこで殿御のお心に、あはれと思し取上げて、連歸りしは山蔭の、三位中將殿にて

あり、世に比類なき不具の女、せん方なくや思はれけん、湯殿の火焚に仕はれしを、その殿の四番目の、御子宰相殿といふが、かの姫上を見初られ」ト言ひかくるを左の方の、女どもが押し止め、「被ぎし鉢の深ければ、口元ばかり出て居るは、此繪を見ても知れてある、肝心の目元鼻つき、知れもせぬに何所を取柄に、見初られた事ぢややら、ても物好きな御方ぢや」ト、笑へば司頭を振り、「心で見ると見るが心見る、目ばかりで見ると見る物ではなし。是はものごしじんじやうに、歌を詠み笛を吹き、何事も優かたなに、思ひしみての忍合。父君母君聞召し、世に淺ましき事なるかな、嫁比べせば鉢かつぎの、恥らひておのづからに、出行くべしと其事あり。果してかかる不具にて、など其席に列らんと、走出でんとする時に、これこの様に鉢が落ち、中より數の寶物、みつなり、橘けんほの梨、十二重の御小袖。この繪の様を發句に言はど、
緋の袴 黄金亂れて散り椿
このまア美事にかいた事は。兄君達の嫁御寮、鉢かつぎが來たならば、おもいれ嫺りて笑はんと、羽繕ひして待つ處へ、ほのかに出でんとする月に、雲の懸れる風情にて、檜扇を差翳し、立出でたまふこの粧、動く様に描きなしたる、繪も物語も一對に、目出度巻に侍る」ト、言流すを又左より、その詞の先を折り、「仇を恩で返すが、眞の道と言ひならはす、その鉢かつぎは長

谷寺で、世に零落れたる父君に、廻りあひても母上は、いかにならせ給ひしかと、問ひもやらずに捨置きしは、その物語の瑕となりト口やかましく言消ちたり。この一卷の繪は光興、手は連歌師の能阿が書き、倭の紙に唐土の、薄絹を以て裏打し、赤紫の表紙かけ、軸は紫檀よのつねに、ありふれたりし粧なり。

左の方の杉生は、年も長けて心憎き、事知りなれば先の繪に、何にも言はず文正の、巻物すらりと押開き、「常陸國の角岡に、黄金の花が咲いたり」と、童謡にも昔より、唄ふは即ち此事なり。文正初は文太と呼び、かの國に隠れなき、鹿島の神の大宮司の、下人なりしが角岡に、移りて鹽を焼きて賣る。この鹽を食する者は、老も若や病もなほり、良薬にも優りしとて、買ふ者前後を争ひて、俄に大福長者となり、鹿島の神にまうし子して、花とも月とも喩へ難き、二人の娘を舉げしにト、詞の中より右かたの、女一人差出でて、「天子の御子中將殿、その娘の麗しき、噂を聞召してより、見ぬ戀にあこがれ給ひ、小間物吳服などを賣る、商人に姿をやつされ、僅ばかりの供を連れ、京からはるく、常陸まで、下らるゝ途すがら、乗物にも召さぬ様子、御顔は玉の様にもせよ、お足は定めて胼胝、娘の肌へさらついた、踵が觸つてお笑止やト言ふに杉生打微笑み、「變つた事が心懸り、かの鉢かつぎの姫上も、一旦は湯殿に奉公、水

を汲んだり柴折つたり、其時の爪はづれば、中將殿の道中を、なされた御足と同じ事、あらびて居たに違はない。して見れば夫は五分々々。そんな事は捨置いて、姉娘は中將殿、妹は天子の后にそなはり、かの角岡の鹽屋の煙、雲井へ近く立昇り、文正にも官位を賜り、始より終まで、悲しき事は更になし。それ故に一名を、祝草紙と呼慣し、正月女子が物の本の、讀初めに必ずこれを、見るのが古き習慣ぞや。

文正の書にあやかれ姫小松

季のなき様に聞ゆれど、かの讀初めの草紙ゆるゑ、これ初春の發句にて、ある女の口吟。その鉢かつぎにこの様な、目出度事はよもあらじ。又繪の様も大内と、賤が伏屋を取並べ、描現して見所多し。湯殿の焚火は汐風に、吹消されて影もないト言離ちしが藤の方の、御氣色をはかりかね、「さはさりながら此二卷、彼方は長谷の觀世音、此方は鹿島大明神、應驗利益神佛同體、優劣は更になし。司が只今申し發句、緋の袴とは椿の名、句の黄なるを黄金に擬へ、をかしき見立に侍るト、申直して退きけり。此繪は此頃唐土より、歸來りし雪舟が、筆を揮ひて手は名高き、宗祇法師の走書、白き色紙に青き表紙、黄なる玉の軸なれば、目も輝くまで見えにけり。

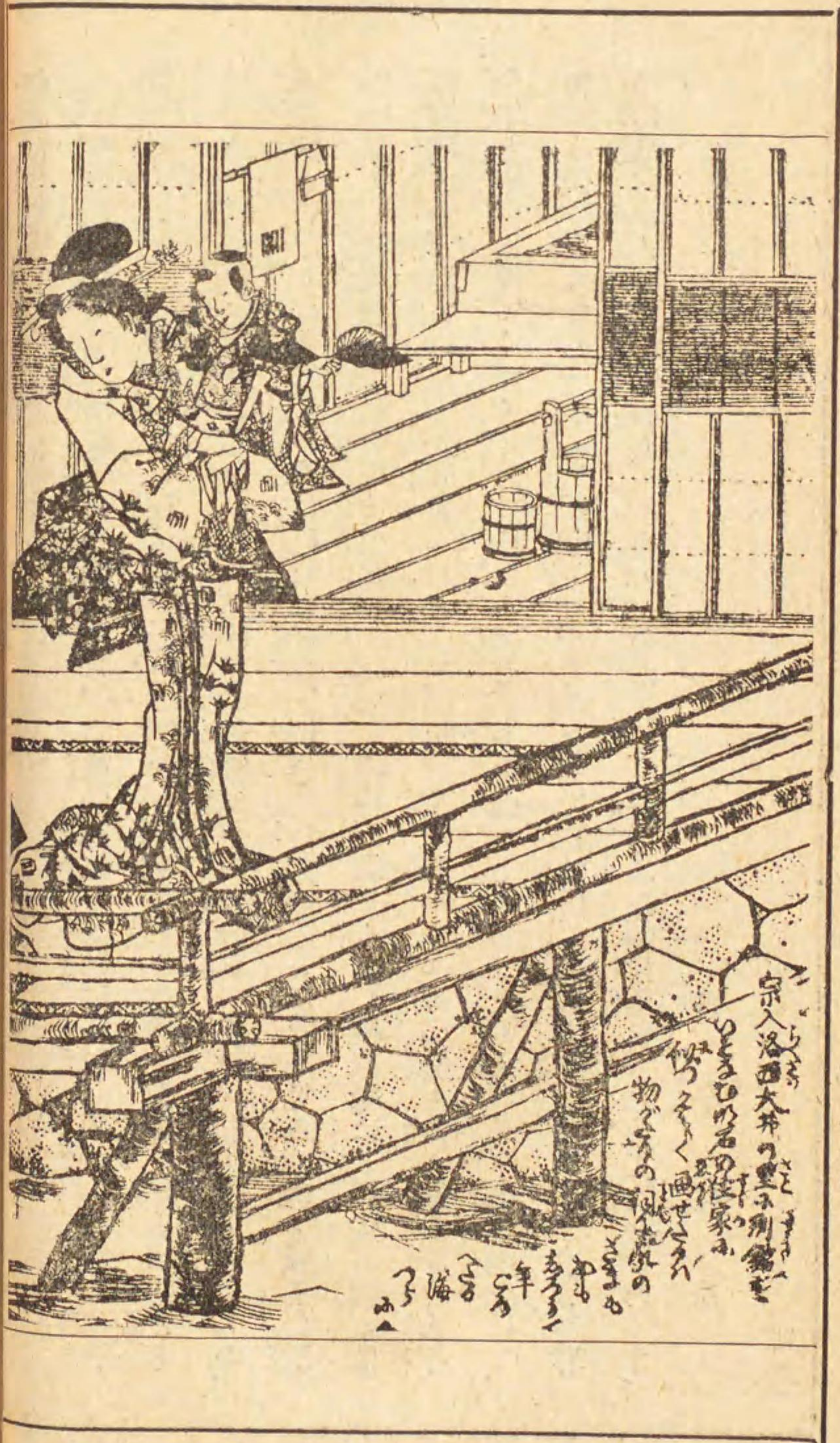
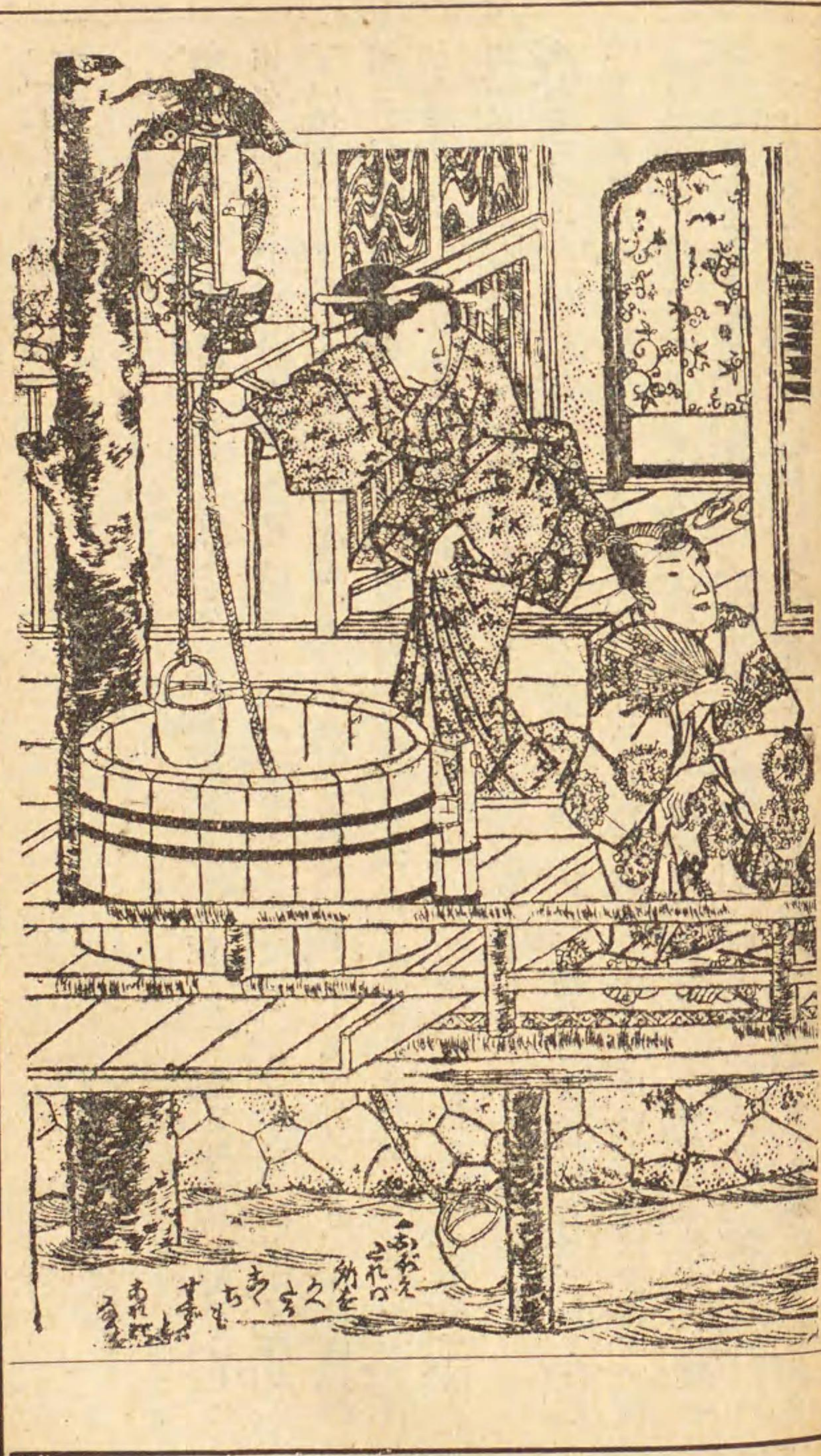
義植公の、御前において此勝負、定めて御目に懸くべし」ト、其日は是にて終りけり。めでたしめでたしく。

修紫田舎源氏第二十六編序

小紋組を袴に仕立て、仙臺平を羽織にする、古戦の記録で説法は賑ひ、祖師一代記で軍書讀は入をとる。三階からおかるが中二階から勘平を勤むる類、人奇を好めば造化も又、それにひかれて己が名を、忘れて咲くや黄鶏頭、河骨の岡に生ひ、薊の水に開きしを、不思議といひしは昔にて、今は牡丹に鈴蟲が鳴き、時雨の降るに櫻を見る。春と秋との取かへばや、絲鬢奴の豆藝者、文金島田の陰子の振袖、最長々しく繪草紙に、源氏を綴るは淨瑠璃本を、和文に直しよ表裏なれど、彼の組の袴の類にて、袴の筋も倍と通らず、去年今年と古めく程、くだくしきに自も倦じ、ちと強りと書いて見ると、又平晒の羽織にて、和かみが少しもなし。畢竟が蛙より、力なき身で歌詠の、真似をしたのが不覺なれど、春の鈴蟲なか／＼に、鳴出しては音も止めがたく、時雨ふる頃櫻木に、彫めて恥をひろうす。

天保九年戊戌孟春

柳亭種彦



二十六編 上

藤の方の御前にて、繪合ありし事どもを、義植公聞召され、羨ましく覺されて、光氏君にその由を、聞えさせ給ひければ、光氏は畏まり、「仰なくとも御前にて、催さんそのために、内々にての繪合は、下ならしに候ふ」とて、夫より猶も其事に、紫ともく打かより、再びはれの繪合に、人々の目を驚かさんと、中にも勝れし繪巻物は、撰出しておきながら、まだわが方にとめ置きしも、此度はとて悉く、磯菜の許へ送りやる。その中に自ら描きし、彼の須磨明石の一卷をも、取交ぜられしは心の中に、おもふ仔細のある故なるべし。政則もその心劣らず、高直に密に言ふやう、「光氏君は今新に、描かせんは口惜しよ、たゞ持傳へてありけん限り、取出すこそよけれなんど、此頃仰ありしかど、己はまたさは思はず、たとへば上手の繪にもせよ、久しく傳來なしたるは、何事も古めきて、女の姿は天津繪の、藤を擔けし娘の如く、男は棒立茶筌髪、角罌うつたる無反の刀、ひうちを入れたる袖無し羽織、いかつけなる有様は、若き人の目にはつくまじ。それよりはたゞ今の浮世を、見るが如くに描き

しこそ、をかしからめと思ふ」なんど、聞え知らせてなほ多く、畫工どもを呼集め、人に見せじと奥深く、暗き座敷に窓をあけ、描かするよしを義尙も、東山にて聞召され、磯菜をそのまま捨置かば、初め心を懸けしかど、思ひを遂けず却つてわが子の、傳となりたるを、憤るゆゑなりと、人の譏り思はんかと、むかし今の名だたる畫工が、手を盡したる巻どもを、送り遣し給ひしが、その中に都より、鎌倉までの名所古跡、見るが如くに道中の、景色を詳しく描きたるあり、磯菜はそれをつくぐながめ、さきつ年伊勢の國へ、下りし事を思ひ出で、その折には母上の、いとまめくしく此所にては、斯く宣ひし彼所では、しかく仰ありしなど、涙は雨とふりし世の、いとど戀しき鈴鹿川、八十瀬の浪も袖による、心地せられてその外の、巻をば能くも見ざりけり。此繪は大内爲光の、祖父某鎌倉に、仕へしをりに時の將軍、頼嗣公の賜にて、家の寶と祕置きしを、娘富徽の前に贈り、義尙すなはち母より得て、今まで祕藏なしたるなり。なほ是等の古き繪ども、富徽の前より富世の前に、贈られたるも多かるべし。廿日あまりを其日と定め、かく俄なる様なれど、人々の丹精にて、右左とも珍らしく、面白き繪ども多く、其所此所より集りたり。かくて其日の結構は、富世の前の住み給ふ、奥殿より廊下つゞき、打はれたる西むきの、廣座敷をその場と定め、正面に設置し、御座所に義植公、

御著座ありければ、少し下りて光氏君、縁側には赤松親子、その外つねに御身近く、召使ると侍は、御許を蒙りて、おのゝく謹み控へたり。左は南匂の局へ、いと近ければ磯菜の方、右は北にて富世の前、一段高う在します。この左右には長押より、純帳やうの絹を打垂れ、あらには見えざる様に、しつらへながら傳の、女どもはその前に、翻れ出づるもいと多かり。さて繪合の始まるべき、時に臨みて四郎正尙、御前に出でて一禮し、兄光氏におし並び、しづとこそ坐したりけれ。この正尙も武術の暇に、遊藝を嗜みしが、繪をなん殊に好みしかば、今日繪合の判者にせんと、光氏豫て密に勧め、夫とはなしに義植の、機嫌を伺ふ體にもてなし、斯うくせよと差圖して、此所へ招き寄せたるなり。程なく磯菜の方よりして、紫檀の箱に繪を打入れ、蘇枋の木にて花形に、脚を透しと机に載せ、女小姓六人ばかり、霞に櫻の惣模様、藤の花房いと長き、唐織の帯結び下け、皆一様の姿にて、しづくと昇出し、その様なべてならず見ゆ。富世の前の方よりも、水の流に山吹を、縫箔したる振の袖、同じ様なる女の童、一時に捧出づる、箱も机も沈香にて、是も左と等しき華足に、總角の房結んだり。右も左も又これに、下机といふものあり、紫萌黄唐高麗の、錦の打敷しき設け、その上にこそ据ゑたりけれ。かよれば兩方思ひくゝの、繪を打開きて取出すを、正尙仰を蒙りて、この判をなし

たるが、その中にも取分けて、いみじく描きたる繪どもありて、勝負更に定めやらす、有觸れたる四季の繪も、古の上手どもの、面白き事を撰び、筆滯らず、かき流しよ、その様譬へん方もなし。是に合せて右の方より、出したるは今新に、描かせたる紙繪なり。絹地にたがひて機張なく、山水の勢は、見せ盡さぬものながら、細に巧みし筆の綾、心に入れて作りしは、浅はかなるに似たれども、昔の眞を描きしに恥ぢず、いと賑はしく面白き、かたは左に勝りて見ゆ。是のみならず始より、定めかねたる争ども、かたぐ興ある事多かり。藤の方は匂の局の、通ひ口なる御簾障子を、なかば明けておはします。昔より繪は好ませ給ふ、道にてあれば善悪を、詳しく知しめすならんと、思へば光氏等閑には、見やり難くて正尙が、判する詞の心もとなき、其折々には夫はかく、是はかうとて詞を添へ、指し教へ給ふ御姿、例の事にはありながら、眩しきまでに輝きけり。されども繪どもの多ければ、優劣をそれかれと、定めかねつと夜に入りぬ。はや數とりの花の枝も、たど一本となりし折、須磨の巻の出来るに、政則縁より少し進み、老眼ながら差伺ひ、是こそ豫て噂に聞く、光氏君の御筆ならめ、此方も豫て心を用ひ、果の巻は優れたるを、撰残させて置きつれども、嗚呼須磨の浦浪に、打返されてうつせ貝、碎けて見えすなりぬらんと、密に心騒ぎにけり。さきにも度々言ふ如く、光氏は晝

をよくする上、是はとりわけ海山の、實の景色を見盡して、明石へ移りし其後に、心靜に描きたるなれば、浦々磯の隠れもなく、打見るものもおのづから、感に堪へつゝ吐息をつき、都を離れ此所に、在しましよ其時は、心苦しくさぞ悲しと、覺しよ事もありつらんと、光氏の心の中さへ、自然と繪の上に現れ、日記といふにもあらざれど、見聞き給ひし事どもを、何くれとなく書きすさび、給ひし假名の美しさ、あはれなる歌なども、ところ／＼に交れるを、正尙はじめ皆うち寄り、繰返しては打ながめ、「まだこの類の御筆すさび、祕置かせ給ふもあらば、見せさせ給へ」ト言ひしろひ、あはれさも面白さも、是に上超すものあらじと、萬みな押譲りて、左の方勝になりぬ。なほ興盡きず人々は、御前に打集ひ、夜明も近くなる程に、いとしめやかに打廻る、盃を光氏は、受持ちながら過ぎし世の、物語に不圖移り、「おのれ幼き時よりも、學問にのみ只管に、心を入れて候ひしが、父君の宣ふは、それ文學といふものは、世に用ひられ人々に、侮られじとてする者多く、身の慎にするは少し、此道長けて短命なる、人も和漢にいと多し、不肖ながらこの義正の、骨肉を分けたる汝、文才なくとも輕しむる、人のあらん道理なし、此道を深く習ひ、氣鬱の病をひき出しそ、身をこなすには武術ぞよきと、その隙々に遊藝を、さまざま教へ給ひしかば、何をなしても拙きと、いふにもあらず、さればとて、得

たりと思ふ事もなし。その中なるかく事は、いと果敢なき技ながら、いかにもしてわが心に、適ふ程にかきなさんと、思ひし事も折々ありて、人にも知らさず稽古せしが、思ひがけなく山賤と、身をやつしたる其時に、須磨や明石の海の深き、心を見しより斯く描かば、をかしからんと能く胸には、疊込みて置きたれども、筆の運は限りあり、心に思ふ半だに、かき取れぬものにてあり。さるに依つて今までは、文庫にかくして置いたるを、今日の序に取出でて、御覽に入れしが今さらに、面目なく候ふト、正尙に宣へば、打笑みつゝ會釋なし、「何の業も心なくては、習ひ難きものながら、その道々の師に就きて、學ぶに道あり法のあり、手に入る入らぬは才に由れど、形の出来ざる者はなし。たゞ筆を執る道と、碁を打つ事のみ諸藝に違ひ、賢き人もなし得ぬもあり、物事愚なる者も、このふたしなには上手あり。さはいひながら貴人には、人に卓越けし者の多し。宣ふごとく父上には、いづれの御子にもよく諸藝を、賤られたるその中にも、取分けて兄上には、御心を入れ給ひ、教へさせ給ひしかば、御學問はいふも更なり、二には琴、三には笛、次は琵琶と父君も、つね／＼宣ひ世の人も、長け給ひしはこの四いろと、御尊にもいひ出でて、繪はたゞ好ませらるゝが故、筆の序にかきすさび、給ふのみにてさまでの事は、あるまじう某まで、思ふに違ひていにしへの、墨繪の上手も及び難き、この山水の

御筆遣ひ。是を見せなば繪師どもは、「跡を晦まし逃匿れん。あらけしからぬ御技ぞ」と、打くつろいて宣ひながら、又操返して義正公の御事を聞えいでて、うちしほたれ給ふ程に、三十日に近き曙の、月さし出でてまだ此方は、さやかならねど東の天は、白み渡りていとをかし。義植公は人々の、打しめりし氣を引立てんと、亂舞の具足を取らせ、それへの役を定め、正尙に笛を與ふ。彼光氏には及ばずながら、人には優りて吹立てたり。太鼓は高直みづからは、鼓を調べ給ふにぞ、光氏はたゞ扇を取り、時々拍子をそへたまふが、殊に勝れて面白し。夜も明けはつれば花の色も、人の形も仄に見え、鳥の囀り飛かふ風情、人の心ものびやかに、いと興ある朝ほらけ、繪の善惡を定めたる、その恩賞には小袖三襲、正尙に賜りつ。そのほかへも夫々の、程につけつと賜あり。光氏は司を呼び、「拙き筆にて寫したる、この浦々の一卷は、藤の方の御手許へ、留置かれ候ふやう、申上げよ」と言ひながら、義植公の機嫌能き、體を見あけて心に嬉しく、暇を乞ひて立上る、折に杉生走り來り、「この外にもなほ明石にて、かよせられたる卷あらん、夫をも見せてと御方の、床しがらせ給ひつ」と、告ぐれば光氏打點き、「かかる序も侍らば、追々に差上げんと、聞置きていづれもはや、退出なして休息せよ」と、襟搔合せて出でたまへば、政則御次に進出で、高直に囁くは、「かよる果敢なき遊にさへ、何の故に

か光氏君、磯菜を最眞したまへば、つひには彼に富世の前、氣押れたまふ事もや」と、心疾しき氣色なるに、高直わざと打笑ひ、「富世の前とは御年も、似合しき程なれば、見馴れ親しみなほ深き、御志ある様をも、某竊に見上げたり、などさる事の候はん」と、いと頼もしく答ふるにぞ、さもあらんかと政則も、思ひ直し心安く、立歸りけるとなん。

おもふに光氏かよる遊を、君に勧め奉るは、此頃未だ山名の殘黨、所々に隠れ住み、近きに合戦起らんなど、風聞ありて隠かならぬ、人の心を安めんと、盛なる世を知らさんためか。またこの春の初の頃、近國の山々より、材木多く伐出させ、車に積み筏に流し、都へ取寄せ給ひしかば、そこへに砦を構へ、城の普請の用意なりと、之をも専ら噂せしが、さは無くして光氏俄に、嵯峨に寺を建立あり、公の後見したまふ御身の、世を捨て給はん謂もなし、かの黄昏が果敢なく失せたる、また殊更に執ねき阿古木が、跡弔ひて生先ある、御子たち二人の御身上に、彼等が障碍をあらせじとてか、その故はいと知り難し。

繪合の卷こゝに終り、松風の卷にうつる。宗入は妻眞柴もろとも、三昧堂の傍に籠り、且暮佛に仕ふまつり、浮世の事は捨果てながら、たゞ朝霧が事のみは、更に忘ると隙もなく、思ひ餘りてしめやかに、ある日眞柴に言ひけるは、

「義植公世を知しめし、都はいよく静なれば、姫君誘ひ朝霧に、疾く上れよと光氏君の、た
びたび仰越されしかど、娘は兎角思ひ立たず、室町御所の後見を、遊ばす御身の暇なき、夫故
やらん氏素生、正しき寵妾にだに、しみく情を懸け給はず、つれなの君やと打歎つ、者もあ
るよし傳聞く、まして此身は田舎人、さる晴がましき方々の、中へ差出で交らはん、産み参ら
せし姫君が、大切ゆゑにあの様な、女を召寄せ給ひしかと、人に笑はれ譏られなば、姫君まで
の御恥辱、數ならぬ身を現すより、又たまさかの御下りを、待つこそ宜けれさりながら、か
る浦邊に姫君を、置き申しなば末々に、光氏君の御胤ながら、在所育と輕しむる、人もあらん
とさまんぐに、思ひ亂れて只管に、都へとは上らじと、言ひも放さず遠からぬ、内にも思ひ
立つ様に、御受けなして置きつるが、いかになさんと歎くは道理、願かなうて御胤まで、擧げ
し喜びひきかへて、おのれが辛苦もいかばかり。御身が異見を用ひざる、後悔今さら詮なし」
ト、あを息ついて黙然たり。眞柴は暫く打案じ、思ひ出しし事ありけん、それと黙き側へ寄り、
「都の西大井川の、邊に妾が祖父に當る、小倉太夫が屋敷あり、其後には住む人も、なくて年
頃荒れまどへど、夫をどうか繕はせ、人に知らさず朝霧を、彼所に住ませて光氏君の、御住居
も近ければ、密に様子を聞合せ、其上に兎も角も、計ひ様の侍らん」ト、聞いて宗入大に悦び、

「能くこそ心付かれたり、年は長けても懐子、娘ひとりは何とやら、心許なく思ふなり、御身も
共に行き給へ。さて其屋敷の普請には、誰をか遣らん」ト言掛くるを、眞柴は引とり身を猶進
め、「夫に定め給ひなば、幸ひの事のあり、昔よりして彼の所に、宿守の様にてある、才十とか
云ふ老人、此國に用ありとて、さる頃下りてたしかまだ、屋敷の中に侍りし」ト、いひつゝ千
鳥を呼出し、「光氏君より御暇賜り、其方がくだつて來る時に、道連になつた人が、居るなら此
所へ呼んでたも」ト聞いて千鳥は打笑ひ、「それはあなたの御祖父さまの、御屋敷守とやらいう
た、親父の事でござりますか。何とかいふ渡場で、同じ船へ乗つた時、私が供の者と、ふつと
話をした所が、この御館へやはり來る人、それならば丁度好い、送つて上げうと言うた故、連
立つては参つたれど、夫はく頑な、悪い人でござります。何の御用か知らねども、解れば宜
いが」ト呟きながら、走り行きしが程もなく、彼の才十を連れ來れば、宗入縁さき近く呼び、「こ
の浦浪に世を避けて、鹽屋の煙消果てん、心なりしが末の世に、思ひもかけぬ事ありて、花の
都へ返咲、再び住家もとめんと、思へど俄に賑しき、所もうるさしさればとて、田舎に近きは
事足るまじ、古き名所の靜なる、邊に如くはあるべからずと、思ふに幸ひ汝が守る、屋敷は太
秦嵯峨野に近く、嵐山渡月橋、音に聞えし邊なり。萬の入目は渡遣らんが、修理を加へてまづ

假に、住むべき程に繕ひなす、手段ありや」ト問ひければ、才十しかく會釋もせず、「この年ごろ荒れ次第に、捨置かせ給ひしかば、彌が上に草も木も、生重りて一面に、怪しき藪となり行きぬ。僅に残りし御住居も、風に倒れ雨に朽ち、此程ははや御腰を、掛けさせらるべき所もなし。其上に當春より、大覺寺とかいふ寺の、古有りし南に當り、阿彌陀の御堂を光氏君、造らせ給ふがその所に、いと近ければ林木を、運ぶ車は引きもきらず、蕃匠壁塗諸職人、朝夕往來なすに由り、酒肴を商ふ店だな、御門前までたち續き、いと騒がしき街となりぬ。かの靜なる名所を、もとめたまふ御心には、入るまじう候」ト、我物顔に年久しく、靜に宿りしその所を、迫遣らるゝがいと悲しく、此事思止らせんと、言葉を巧に言ひければ、宗入は打點き、「我々は光氏君の、御蔭を頼む者なれば、それこそは却つて宜けれ。さぞ嚴しき御堂ならん、頓て上りて拜むべし。見苦しくともまづありふれたる、住居をそのまゝ繕ひ置き、あまりに損ぜし所のみ、取捨てさせて建添へべし。大方の事どもを、計ひ置かば内々の、事は追々せせん」ト、言へども宿守才十は、なほ心得ぬ顔色にて、「御年若き時だにも、厭はせられし繁華の地へ、六十も越えさせ給ひながら、立出で給はん謂はなし。是は慥に噂に聞く、かの姫君を上げ給はん、御下心と推したり。其儀ならば藪を伐り、草を刈らせんまでもなし、光氏君がかの御堂を、

御建立の林木の、餘をもつて嵯峨の御殿を、なほ建廣げさせ給ひ、乾の方に花郷とか、聞えし方を移し住ませ、北をば殊に黄くしつらひ、是には誰と人を定めず、世に便もなく寄邊もなき、人を集めて住ますべき、その爲ならん一間々々に、仕切りて造らせ給ふよし。東に當りていと美々しき、高殿造は此方の姫上、迎へ給はん御心にて、未だに人は住ませ給はず。明日にも御供致さん」ト、打咄くを宗入は、庭を眺めて知らず顔、つくりて更に答へねば、才十さまゝ打案じ、「大井の里の御屋敷に、附きたる田畑さふらひしが、皆いたづらに荒れしかば、何がしかれがし押奪ひ、おほかた人の物となり、今はおのれが作れる分は、其方に年貢を出す」など、兎角につけて密にわが、得分となしたる地の、いかにならんと危けに、思ひてづなく憎き顔の、鼻なんどを打赤め、口の邊へ飛來る蜂の、螫すを怖れて吹拂ふ、様して顔を膨かし、腹たよしけに言ひかすむ。眞柴はをかしく打見やり、「今更にその田などの事を、宣ふにてはゆめゆめ無し、昔の様にはならずとも、假の住居に取繕へと、仰が其方は聞取れぬか。妾とても世の中を、捨てたる身にて此年ごろ、尋ねもやらで置いたれば、今改めて言争ふ、心はなけれど屋敷の繪圖も、沽券も傳へて此所に有り、もし押領した者どもが、わが地の様に言募らば、光氏君へ申上げ、取返すのもいと易し。それらの事は案するな」ト物多く取らせければ、ありが

たしとて退きしが、才十つくく思ふやう、今勢ある光氏君を、笠に著なして宗入が、事を
 糺さば是までの、私慾は忽ち現れんと、心疚しく病氣といつはり、引籠りてありければ、宗入
 は心いられ、普請に精しき家來を選び、日頃家に入出する、上手の匠をあまた集め、萬事は繪
 圖にて問ふべしと、都へ遣し彼所の館を、思ふ様にぞ造らせける。

二十六編 下

かく宗入が娘を都へ、上せんといふ催しは、光氏夢にも知り給はで、上らん事を物憂がる、朝
 霞が心の中、更に量りかね給ひ、且はたましく擧げし姫を、淋しき田舎に捨置きなば、彼こそ
 は光氏が、父の不興を蒙りて、さまよひ歩きしその中の、子なれと人の言傳へ、娘の疵となり
 もやせん、疾く都へ迎ふるには、若くべからずとさまよひに、打案する折もをり、犬吉が走り
 來り、明石よりの御使と、知らする程なく打通る、千鳥を此所へと側に招き、「明石の磯に打寄
 する、身は片貝と呼びし名も、因みなきにはあらざれど、須磨の浦より通ふとの、心で千鳥と
 附換へしが、かの玉章の使には、又雁と改むるが、宜いではないか」ト戯れとば、千鳥は何か
 にこく打笑み、「貝も千鳥も水邊に、縁があるやら海にも住飽き、飛歸るのは大井川。かうば
 かりでは流石のあなたも、御合點が参りますまい。入道申しあげまする、田舎育の朝霧を、御
 館へは憚あり、さればとてまた姫君を、かく凄じき山里に、置き申さんも恐あり、住荒し候
 へども、大井の里にいさよかなる、屋敷ありしを思ひ出で、ちかづくに姫君の、御守につけて

朝霧を、上せますると申すこと。朝霧さまの仰には、大井は嵯峨へも近いとやら、月の桂の川上へ、光をうつさせたまふ折も、あるなら其時直々に、三年積りし事どもを、申上ぐるを樂みに、此度御文は差上げぬ、浮世の花には嵐山、障のない中眺めたいと、かのさし下す筏より、氣は浮々と遊ばして、御筆も執れぬ御様子。右の通で玉章の、御使を致さねば、名をかりがねと變るには、及びませぬ」トつらくく、例の通りに嘯りけり。光氏は機嫌よく、「都の人に立交るは、いと苦しと朝霧が、言送りしは我にも包み、別に館を營みて、そのうへ上らんとてなりしか、心の用意感心せり。又宗入も光氏が、播磨に来るを好き序と、娘を押し送りしなど、嘲らるゝを厭ふが故、かく計ひて不足なき、家のよけい知らするも、道理なしとは言ひ難し。夫はさしおき幼き者の、名を一度も言ひおこさず、たゞ姫君と記すゆゑ、我方よりも姫とのみ、言遣りて過したり、何とか呼ぶ」ト問ひ給へば、千鳥は答へて、「申さずと知れたる通り、御七夜に御名をつくるが、例ながら程遠ければ、伺ひまするに日數もかより、さればとて私に、呼ばんのも憚あれば、御誕生の地名をそのまゝ、御名のやうに明石姫君、と申上げて置きます」ト聞いて光氏、「それでよし。明石といへば暮れぬうち、はて誰をか」ト案せしが、忍び歩きその折には、いつも外れぬ惟吉こそ、よけれと點き呼出し、件の事ども語り聞

かせ、「宗入が負けじ魂、大井の住居も見どころの、有る様に造りつらん。汝千鳥と打連立ち、彼所へ行きて見てまるれ」ト、遣し給ふと引違へ、杉生何か用ありけに、一人は老いたる一人は若き、女を兩人連れ來り、御前に手をつかへ、機嫌を伺ひさて言ふやう、「此者どもは親子にて、母は鐵蔓娘は菊咲、室町御所へ昨日まゐり、私に逢ひたいと、申す事ゆる御用の際に、面談致して用の趣、尋ねし處この鐵蔓は、幼きより義正公の、御側に仕へ父とやらの、病氣につき御暇を、願ひしは早三十年以前の事、その後夫を持ち、擧げたる娘を何卒、その御縁にて嵯峨の御所へ、御奉公に差上げたが、この御館には昔の事を、存じた者がない故に、その願を取次いで、貰ひたいと申す頼。年月も遙に過ぎ、殊には多き女中の事、私とても確には、覺えませぬとさう聞けば、どうやら顔に覺もあり、夫なら明日夕かた嵯峨へ、お連れ申して参らうと、菊咲ばかり私が、部屋に留置き鐵蔓が、歸る折に人をつけ、見せましたるが堀川の、邊は寂しき所に似合はず、住居も綺麗にいと廣く、召使も數多ありと、送の者の歸つて話。其外の事どもは、お直にお聞き遊して」ト讓れば鐵蔓なほ平伏し、「たゞ今申上げられしを、繰返すも憚ながら、まだ稚兒鬚の頃よりも、室町様の御恩を蒙り、御暇を賜りしは、君のお産れ遊ばす頃。杉生殿はその時分、眉毛は拂つて居られしが、やうく年は十六七、たしかには私を、

覺えられぬも道理至極。さて私の嫁しましたるは、遙に西の國の百姓、この春の末夫は病死、身寄に善からぬ者ありて、田畑多く有るのを目がけ、筋なく家を奪取られ、快からず其所に、在らんよりはと貯蓄を、散さず持ちしを取集め、娘に都の風俗も、見習はせたく直に上京。とてもものに御家の、式作法を覺えさせ、その上婿を取りたき望。何とぞ叶へさせられてト、思ひ込んでぞ願ひける。光氏つくく、打見るに、親子が人柄卑しからず、年積みて後擧げし子ならん、娘はやうやく二十ばかり、髪黒く色白く、目もとすどしく愛敬あり。母は若きその程は、麗しくもありつらん、はや六十にも餘りて見ゆ。されど萌出る若草も、霜に痛める枯草も、その葉の形の變らぬは、同じ種同じ血筋、あらそひ難きものなりと、思ひつゝ猶さまさまに、義正公の御身の上、室町御所の事なると、昔語をそれかれと、せさせてこころみ給ふに、その應答滯らず、疑無ければ、「菊咲と、やらん女は彼者の、望の如く留置くべし。杉生宜きに計へ」ト、仰に喜び三人とも、そのまゝ出でにけり。

惟吉は日暮れて後、大井の里より歸り來て、彼所の様はいかにぞと、光氏の問ふをも待たず、急かはしく手をつかへ、「御推量に露違はず、人に劣らじ侮られじと、宗入が豫ての氣質、いつの間に造らせけん、館の結構なみくならず、今までの藪原へ、湧出でたるかと驚かれぬ。明

石にては海面を、遙に遠く眺めしが、此所は又大井川を、近く望みて所の様も、似通ひたるがその上に、總て家居も住馴れし、模様に造りて手道具の、類はもとより屏風燈臺、何くれとなく彼地より、取寄せてしつらへたれば、播磨へ下りし心地せられ、都の中とは思はれず。かの川岸につくりもやらず、自然と振よき松蔭に、丸木の柱萱の軒、心も用ひず侘しげに、建てたる閨の様なんと、おのづからに山里の、あはれを見せて木を撰び、磨きたてたる御殿より、却つてゆゑしう候」ト、聞え上ぐれば、「朝霧が、住居とするには夫こそ宜からめ。大儀々々」ト光氏は、惟吉に暇を取らせ、さて明石への迎には、誰をか遣らんと打案じ、不圖片攬の調太夫が、かの宗入の館を尋ね、都の事など物語り、暫く足を留めしと、言ひたる事を思ひ出で、次の日密に彼を呼び、件の事ども言聞かせ、その外親しき者どもに、此事外へ漏すなと、口固めして調太夫、もろとも明石へ忍びやかに、迎へに下し給ひけり。

千鳥も又この人々と、打連れ宗入館に歸り、「姫君もろとも近きうち、都へ上らせ給ふ事ども聞え上げしに光氏君、殊のほか御喜び、御迎のため御近習の、侍大勢下されし」ト、言ふに朝霧今は早、のがれ難くて上らんに、心は疾くと定めながら、年月馴れたる此浦を、離れん事もあはれにて、又父上の心細く、ひとり止り給はん事など、思ひ亂れて萬に悲しく、荻の上風

よそにのみ、聞渡りしを愁ひに、よれてほつれし絲芒、露の情のかよらずは、今の歎はよもあらじと、嵯峨野の花に袖觸れぬ、ひとの身の上羨まし。

宗入は只くよくくと、世に有難き御迎、誰に憚る事もなく、上るは娘の上なき幸、年頃日頃寢ても覺めても、願ひし事の叶ひしは、嬉しけれども姫君の、御年よりは智恵づかれ、祖父よ祖父よと朝夕に、慕はせられしを見奉らず、なに樂しみに生存へんと、老にほれしや同じ事を、繰返し、言ふより外の事もなし。妻の眞柴は娘に添ひ、都へ行けば一方は、安堵しながら又一方、縁もゆかりもなき人さへ、見馴れそなれて別るとは、悲しきものをましてや夫を、振捨て行くに堪へかねれど、よしや共にと誘ふとも、都の土は踏まじといふ、心の誓を破るべき、氣質ならぬを能く知れば、言ひも出さずたゞ胸を、痛むるばかりせん方なし。思ひ餘りて娘に向ひ、「若き時よりかたくろしき、宗入殿の事なれば、いつしめんと打解けて、語ひ給ひし事もなく、老いては殊更一徹の、募りし上に佛門に、歸依し給ひし其後は、妾と住居も遠く隔て、たま／＼逢ひても用の事、言はるよばかりで話もされず、詞に鏗膠なく頼もしけ、なけれど久しき夫婦中、なまなか他人が深切に、言はるよよりは心もおかれず。殊に御身が孝行に、して給はれば何ひとつ、心に足らぬ事もなし。されば靜に此家にて、迎への雲を待たんものと、心の

中に誓ひしが、思ひもかけぬ事起り、俄にこよを出立つが、今更心細し」とて、打歎ちつと見渡せば、重野はじめ朝霧の、腰元女も涙にくれ、共に萎れて詞なし。此者どもは都の風俗、朝霧に見習はせんと、皆呼下しと女にて、いづれも年の若ければ、この荒浪にいつまでか、沈果てんと人知れず、心の底に歎きしを、今幸ひに故郷へ、歸るは嬉しきものながら、繪にも及ばぬ此濱の、景色を又も立歸り、見る世はあらじと名残の惜まれ、寄りくる波のかよるかや、兎角に袖も濡れがちゆゑ、眞柴はなほと一様に、心の中を察せしなり。此頃すべて打擧り、言ふ事も聞く事も、あはれくと取重ね、秋のころほひなりければ、心細さぞ彌増しける。

さて出立つべき日の、曉は、秋風すどしく吹渡り、急がはしけに鳴く蟲の、聲にまじりて鉦鼓の音、幽に響くは宗入が、例の如く夜深に起出で、三昧堂の勤なり。悲しき中にも朝霧は、三年隔てし我君に、逢ふ嬉しさも取交せて、宵より更に目も合はず、獨つく／＼海の方を、見渡して居るその處へ、母の眞柴は立出でて、「御身も昨夜は眠らぬ様子、妾は殊に常さへも、寢覺がちなる老の癖、いろ／＼の事苦になつて、一夜さ三夜さとろくと、まどろんだ事もない。もう明くるには間もあるまい。腰元どもく、著換は伏籠に掛つてあるか、鬢のほつれを搔上げて」ト、出立つ用意とりまかなふ。行果ててや宗入も、涕うち噉りて次の間より、こなたの様